

IT1X22

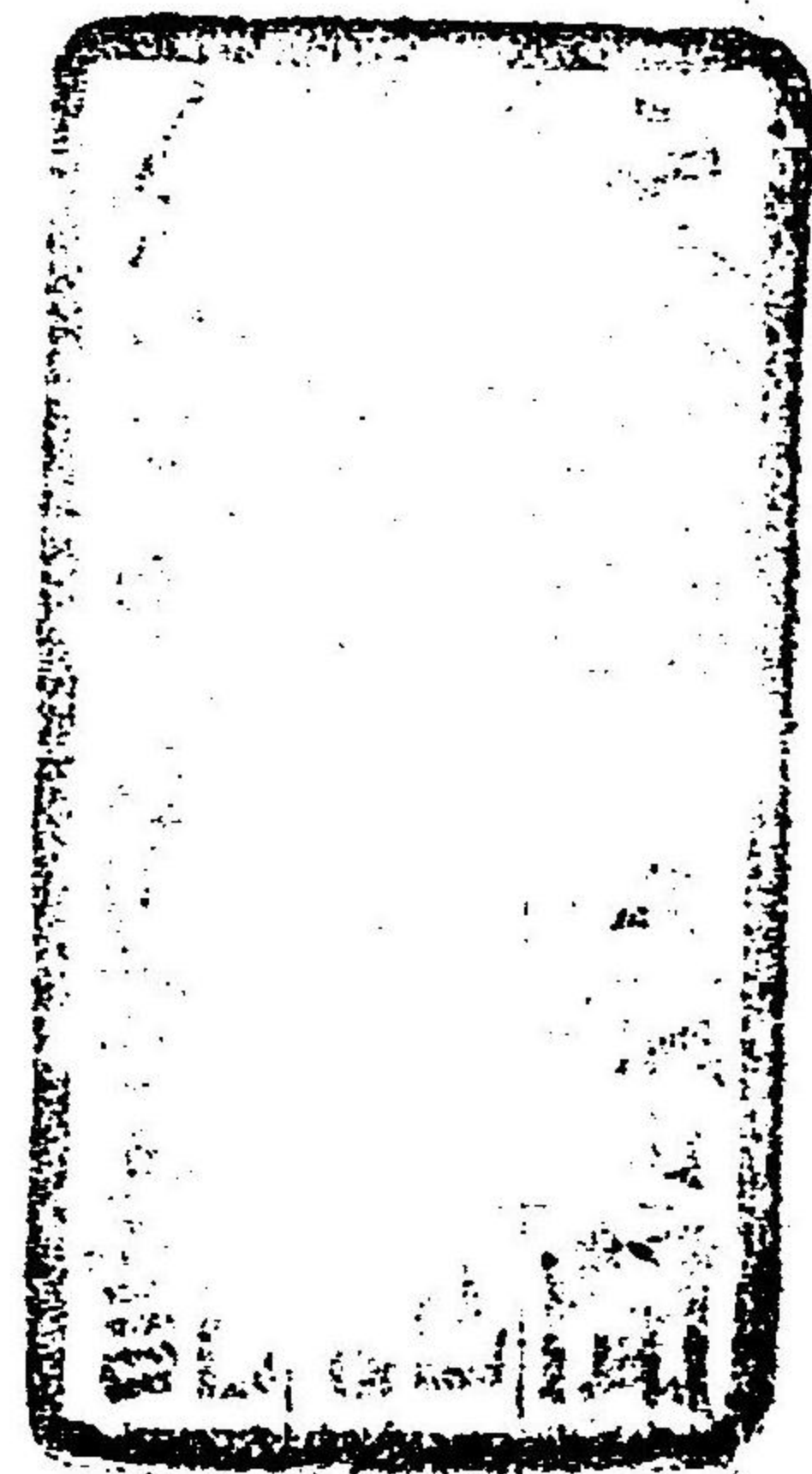
45-444

慶應義塾譯

獨立自營

大國民

全



明治
44. 3. 14
寄贈

東京

金港堂書籍株式會社

緒言

本書は佛國の社會學者ツモラン氏の著にして趣意とする所は獨立自活の氣風を鼓吹せんとするに在り試に議論の要點を擧ぐれば佛國の教育法は官吏養成を主とするが故に活潑有爲の人物を作る能はず獨逸の學校は國粹主義の流行する所にして青年をして世界の舞臺に他の國民と雌雄を争ふに必要な資格を得せしむるに足らず獨り英人種の教育法は家庭に於ても學校に於ても將た社會に於ても總て獨立自活を目的とするが故に各青年は父母に依頼せず家産に依頼せず國家に依頼せず富源の存する所自由の住む所是れ我郷として大膽に天涯地角到る所に移住して地を開き商工業を營み以て新社會を組織す即ち英人種が今日の隆盛を致したる所以にして生存競争の活

劇場に立て自ら衰亡を免れんと欲せば英人に學ぶの外に策ある可らず且つ獨逸は國家主義の盛なる所にして政府を萬能視するの風なるが故に自然に社會主義の發生を促がし爲めに個人の獨立心を害して國家の基礎を薄弱ならしむるに反し英人種の社會は此主義を排斥して益々自治の精神を發揮するが故に社會の根底は愈々鞏固にして如何なる波瀾にも動搖するることなし然かのみならず國家主義の社會に於ては官權徒に盛にして民業振はざる尙ほ其上に政治家は漫に野心を逞うせんとして漫に租税を徴し漫に軍備を擴張するが故に民力いよく疲弊し敵の襲來を待たずして早く既に自ら斃るゝの苦境に陥る可し然るに個人主義の社會に於ては人々の求むる所は只自由の行動のみ政府の手を煩さずして爲す可きは人民自ら奮て

之を爲すが故に國は繁昌せざらんと欲するも得べからず之を要するに人間の幸福は獨り自營主義の社會に於て之を求む可し依頼主義の社會に於ては結局共倒れの不幸を免る可らず以上の論旨は夙に我慶應義塾の主張する所に於て實に我國多年の弊習を矯むるに極めて緊要の藥石たるを信ず是に於て之を邦語に譯して廣く世人の一讀を求めんと欲し一方に於ては其事に着手すると同時に一方に於ては佛國の出版者に對して承認を求めたるに此書を日本語に翻譯するの權利は都て小林力彌氏(近江彦根の人)に與へたれば氏に向て交渉せられたしとのことなり依て直に權利の讓與を小林氏に求めたるに氏は義塾が早くも本書に着眼したるを喜び快く義塾の希望に應じたるは我輩の感謝する所なり氏は曾て教育及び社會問題研究の

爲めに歐亞各地を漫遊し久しく佛國に在り親しく本書の著者に接して其所説を聞き其學校を視、翻て我國目下の状態に鑑みて本書を我國民に紹介するの必要を感じ著者并に發行書肆に協議して邦語に翻譯の全權を得たるなりと云ふ今や譯方になり書肆金港堂に托して之を出版せしむ若しも此書が我國民の氣風を改むるに於て多少貢獻する所あらば我輩の本懐これに過ぎず之を譯したるものは義塾の教員井上純三郎、占部百太郎の兩氏にして余も聊か其勞を分ちしものなり

慶應義塾

北川禮弼

明治三十五年八月

原著者の序言

英人の他に卓越するは著しき事實なり、假令ひ吾々佛人中には之を認めざるものなきに非ずと雖も、吾々は常に之を心に記し且つ之を恐怖せざるを得ず、吾々が英人に對して憂慮し、猜忌し往々にして憎惡の念を催ほすことあるは、即ち充分に其事實を宣告するものと云ふ可し。

坤圓球上、英人に會することなくしては、一步も進むこと能はず、以前は佛國殖民地にして、今は英國々旗の翻々たるを見る、到る所皆然らざるはなし。

英人は實に、北米(加奈院)よりルイジアナに至るまで嘗ては佛領たりしに於て、印度に於て、モリリアス(昔し佛國の屬島)に於て、將た埃及に於て、吾々佛人を驅逐したり。

英人は加奈陀と合衆國とに據りて亞米利加を支配し、埃及と喜望峯とに據りて阿弗利加を支配し、印度と緬甸とに據りて亞細亞を支配し、濠太利亞とニュージールランドとに據りて南洋を支配し、而して其商工業及び外交政略に據りて、歐羅巴否な全世界を支配す。

佛蘭西、獨逸、伊太利、西班牙の如き、亦各々殖民地を有すと雖も、多くは官吏の殖民地にして、只軍隊的政治を行ふのみ、人民を移殖せず、土地を開拓せず、結局英國殖民の如く永久の根據を作ることなし。

他の二大帝國、即ち露西亞及び支那は、廣大なる版圖を領すと雖も、其領地たる多くは荒廢し、今後とても文明は容易に是等の地方に入るることなかる可し。

之に反して、英人種の諸國は、最も活潑に、最も進歩的に、又最も富饒なる文明の先頭に立てり、世界何の地たるを問はず、此人種にして、一旦移住せんか、驚く可き速力を以て、歐洲最新の文明を輸入して、其地の状態を一新せざることなし、而して是等の新社會は往々吾々を凌駕し、多少輕侮の意味を以て、吾々の社會を舊世界と稱す、新社會の側より之を見れば、吾々の社會が聊か老耄したるが如く見ゆるは怪むに足らざるなり。

試に、吾々佛人がニューカレドニア及び他の南洋所屬地に於て爲せし所のものと、彼等英人が濠太利亞及びニュージールランドに於て爲せし所のものとを比較せよ。

次に西班牙及び葡萄牙の配下に在りし南米の成行きを見、而して後英人の手に依りて變革せられし北米を看よ、豈に雲泥の相

違に非ずや。

左に示す數字は簡單なりと雖も亦以て英人の他に卓越するを證するに足る可し。

吾人は政府の統計表に據り、一年間に蘇西運河を通航する船舶の數は左の如くなることを知り得たり。

佛國船舶

一六〇隻

獨逸船舶

二六〇

英國船舶

二二六二

然れども議會若しくは新聞雜誌等に於て之を論難し、又或は怒れる老婦の如く徒に英人に對して切齒扼腕するも、以て英人の他に卓越するを指摘するに足らず、吾人は先づ彼等と同等の地位に立つものとして、又最も精密に最も冷靜に之を解剖す可き

科學者として、之を研究し以て事の真相を審にせざる可らず、疑問は實に、英人が爾かく驚く可き膨脹力を有する所以、爾かく文化に適當する所以の秘密、否な其手段を發見するに在り、是れ實に、吾々佛人及び佛人の子孫に取ては死活の問題にして本書の目的は専ら之を研究するに在るものと知る可し。

其二

第二編

佛人と英人の私生涯

第一章

佛國教育法は出産兒の割合を減退せしむ

其一

其二

其三

其四

其五

第二章

佛國の教育制度は財界の基礎を危ふす

其一

其二

其三

第三章

英米の教育と生存競争

其一

其二

其三

其四

第四章

英人種の成功と其家庭

九六

一〇八

一〇九

一一三

一一七

一二一

一二六

一二九

一二九

一三三

一三七

一三九

一三九

一四二

一五一

一五八

一六七

其一

其二

其三

第三編

佛人と英人種との公生涯

第一章

佛英の政治家

其一

其二

其三

其四

其五

其六

第二章

英人種と社會主義

其一

其二

其三

第三章

佛人と英人種とは祖國に對する觀念を異にす

其一

其二

目次

三

一六九

一七六

一八七

一九五

一九五

二〇一

二〇七

二一四

二一八

二二一

二二三

二二三

二五三

二六六

二七六

二七八

二八〇

其三	二八三
其四	二九〇
其五	二九六
第四章	三〇三
其一	三〇四
其二	三一二
第五章	三二四
其一	三二六
其二	三三二
其三	三三六
其四	三四四
第六章	三五六
其一	三五六
其二	三五九
其三	三六八
其四	三七二

獨立大國民

慶應義塾譯

第一編 學校に於ける佛人と英人

英人と他の西洋諸國民との相違は、其學校に於ても、既に明に之を認むるを得べし、而して此相違は頗る著しきが故に、事の始めより、英人の他に卓越する所以を解するは難からざるなり。

各國民は皆な夫れくの慣習に隨ひ、自家の理想に依て教育の制度を立つ、而して其教育は翻て又その社會の狀態に反響を及ぼすものなり。

英佛獨の教育に關する左の三論文は之を實際に證明するものにして、第四の論文に於ては即ち社會進化の實情を究め、以て吾人が吾人の兒童をして日に新なる世界の狀態に順應せしむるには、如何に之を教育す可きかを説明せんと欲す。

第一章 佛國の學制は人物養成に適する乎

其一

漸く學校を出でたる多くの佛國青年に對ひ、試に今後如何なる職業に従事せんと欲するやを問へ、彼等の四分の三は異口同音に官吏の志願者なりと答ふるなる可し、實に是等多數の青年が熱望する所は陸軍武官、高等文官、民政官、財務官、官立大學校等政府の設立に係る役所に奉公せんとするに在りて、獨立の職業は概して以上の目的を達せんとして失敗したる落武者の隠れ場所たるに過ぎず、然も官吏の地位には自ら限ありて、悉く是等の候補者を收容すること能はざるが故に、其中より入用だけの人員を拔擢せざるを得ず、即ち撰擇法の必要を生ずる所以なり。扱て之を撰擇するには、試験に依るか、將た門地勢力に依るの外なし、門地勢力に依るの撰擇は固より例外、附加にして、試験こそ實に官海に入るの一大關門なれ。左れば試験に成功せんことは、佛國青年の宿望にして、其將來の浮沈盛衰は一に之に依て決するの有様なるが故に、子弟が此成功を遂ぐるに最も都合よき手段は、其父兄等の競ふて用ゐんと欲する所なり。

學校は即ち青年の最も希望する職業に入るの關門を開く唯一の方法なるが故に、佛人が學校を視ること極めて重大にして、學校は實に人の浮沈を司るものなればなり。

且つ學校その最も試験の豫備に最も適するやう組織せらる、是れ父兄等が年々各種の競争試験に登第する學生の數に準じて學校の價値を定むるが故に、勢ひ此の如くならざるを得ざるなり、此種の競争に不首尾なる學校は忽にして學生の隻影をも止めざるに至る、試験成功の如何は直に學校の死活問題なり。

而して今その試験を通過するに最も確實なる準備法は注入教育に如くはなし、蓋し此野蠻なる方法は其目的を達するには極めて急要にして、大學及び其他の高等學校の競ふて實行する所なり、然らば則ち注入教育とは如何、出來得るだけの少時間を経て、規定の試験科目に關する皮想ながらも一時須要の知識を強ひて詰込むものにして、是等の知識は次に示す二個の理由よりして、出來得る限り短時間内に之を詰込まざる可らず。

何れの官職に就くにも概して年齢の制限あり、即ち其急を要する第一の理由にし

て、此制限を設くる所以は、彌が上にも増加する候補者の數を制限すると共に、一層試験を嚴酷にせんが爲めなり、假令ひ或は年齢の制限なしとするも、若年にして登第すれば、退職期限に達する前昇級するに十分の歲月を有す、即ち學校の修業を急ぐ第二の理由なり。

事情かくの如くなれば、學問の皮根に流るゝは必然の數にして、候補者いよく増加するに隨ひ、一層その試験を困難ならしめんが爲めにますます試験科目を増加す、即ち受験者は到底人間の力を以てしては普く通曉すること能はざる百科全書的知識を收めざる可らざるものにして、彼等は只僅に是等の知識に觸るゝのみ、斯くの如く煩雜なる試験には試験委員と雖も其問題の多くに答ふること能はざるは勿論にして、彼等自ら候補者に立たば、恐らくは落第者たるを免れざる可し。是に於てか、注入主義の教育は單に試験科目に關して浮雲の如き知識を與ふるに過ぎざること明白にして、若しも其目的とする所、眞實、人の智識を開發し其良能を陶冶するに在らんには、此種の教育も或は多少永續の結果を收め難きに非ずと雖も、實際趣旨とする所は只一時の記憶に在るが故に、其効能は全く表面に止まり、人

の智能に何等の影響をも及ぼすことなし、試験の了ると共に學び得たる所のものは總て雲散霧消して、腦中復た一物を止めざるに至る可し、然れども青年の本願は試験及第一事に外ならざるが故に、之に對して敢て苦情を唱ふるものなし、只その時に於て登用試験に及第するの資格さへあれば其れにて十分なりとし、試験了る官途に入るの道開けたる上は、他は一切問ふ所に非るなり。

此くの如く、登用試験は一方には注入教育を誘起すると同時に、他方に於ては一種特別なる學校制度の興起を促せり、何ぞや、寄宿學校即ち是なり、試験に依りて青年立身の道を開く邦國に於ては、父兄たる者が全然其子弟の教育を學校に一任するの傾向を呈するは自然の勢なり、實にや、注入教育は一種特別の訓練法を要す、而して其器械的訓練法は彼等父兄の素より心得ざる所にして、家庭に於ては到底實行すること能はざるのみならず、一定の受験年限は決して動かす可らず、子弟たる者は其受験科目より聊かたりとも他に心を轉ず可らざるが故に、必ずや、此種の寄宿學校に寄寓せざるを得ざるなり。

其二

此くの如き教育法は、文官若しくは武官を養成するを目的とする學校に於て至當の方法なるは、何人も異議を容れざる所なり、蓋し完全なる官吏は我意志を無きものとして、服従を第一とし、長官の命令とあれば其是非曲直を論せずして、一意これを奉行せざる可らず、彼等は實に上官の手足なり機械なればなり。

試に寄宿制度が如何に這般の訓練に適當するかを見よ、其組織は恰も兵營の如くにして、學生は毎朝鐘或は太鼓の音を合圖に床を出で、列を爲して一の科業より他の科業に移り、運動は兵士の行軍の如く足並を揃へて進退し、遊戯は高き壘壁を以て圍まれたる構内の運動場に於てす、彼等は遊び戯るゝよりも寧ろ一團となりて歩き廻ること多し、休息時間は極めて短く、通例午前には半時間、午餐後一時間、午後四時の間食に半時間あるのみ、歸省また稀れにして、概して一ヶ月一度に過ぎず、父母は一週二回其子弟に會ふことを得れども、其會見時間は大抵一時間ぐらゐにして、然も共同應接所内他聞を避くる能はざる處に於てするを常とす。

思ふに、此の如き組織は青年の自由、自然の行動及び創造力の發達を抑壓するや明なり、之が爲めに家庭の感化に因て發展す可き各自の特性を没却し、玉石混淆、各種

の人を同一鑄型に投じて、唯命是從ふ一種の器械的人物に化了せしむ、歎ず可きなり。然のみならず、前記の試験制度は、青年の思慮判断力を發育せしめざるが故に、彼等をして一層黙従を容易ならしむるの結果ある可し、其學校に在るの時に於て何等の思慮分別もなく、只教師の授くるがまに、黙して教科上の知識を詰込みたる者は、官吏と爲りても亦同じく上官の命に黙従して、一意これを奉行するの人たるを得べし、況んや教師の教授も官吏の命令も等しく國家と云へる同一根源より發するに於てをや、彼等は學生として國家の教條を教へられ、官吏として亦國家の命令に服従す、結局何等の變化をも見ざるなり。

佛國に於て、初め 學校を官吏養成所と爲さんとの考を起せしものは拿破翁一世なり、十七世紀乃至十八世紀までは寄宿學校なるもの極めて少なかりしが、拿破翁一世が佛蘭西大學を起して其模範を示してより、此種の學校著しく増加したり、實に拿破翁一世時代の如き中央集權の政治を行はんに、彼が如き多數の官吏を使用せざる可らず、是に於てか、國家は其使用せんとする官吏の製造を以て自ら任じ、未だ思想の定まらざる青年學生に向て、好官吏たるに必要な教義慣習即ち創造

力の滅殺、受働的服従并に思想意見の統一、約言すれば個人の特性を剝奪するに足る可き總てのものを鼓吹するに至りしなり。

拿破翁一世以來種々の政府相繼で起り、種々の政治を行ひしに拘はらず、彼が一旦確立したる組織は今日に至るまで依然として存立し、中央集權の傾向は拿破翁の時代よりも滅せざるは勿論、官吏の員數は却て増加したり、斯くの如くにして注入教育及び寄宿學校制度は次第に發達するの一方あるのみ。

其三

以上は多數の佛國人が官途に入るの階段として、先づ試験に及第せんとの冀望より、自ら受くる所の待遇法なり、併し、官吏希望者は無限なれども、成功する者は其中の一部分に過ぎざるが故に、失敗せし候補者は更に他の方面に向て地位を求めざるを得ず、是に於てか、官吏を製造するに極めて好都合なる此教育制度は、果して已れ自ら獨立の地位を作り、且つ自ら治めんとする人士を養成するに均しく適當なるや否やの問題を生ず、而して自ら獨立の地位を作るには、先づ第一に創造の才を要し、次に強固なる意志と他に依頼せざるの慣習とを要す。

然るに、前記の制度は帝に此種の氣風を發達せしめざるのみならず、却て之を緊束し又萎縮せしむる尙ほ其上に、致々撓まざる勤勉よりは寧ろ只嚙り付の報償として進級する据膳的地位を希望するの弊風を助長するに至る可し、陸軍その他各省に於ける進級は、多く先任と庇保とに由らざるはなし、畢竟困難とする所は只官海に入るの一事に在り、一たび就職したる上は、別に心を勞せずして、一階又一級、次第に其地位の昇進するや疑ふ可らず、此くの如くにして英邁不屈の精神を養はんとす、到底期す可きに非るなり。

且つ又、獨立の地位を造らんには須く春秋に富むを要す、然らずんばあらゆる企業の初頭に於て必ず遭遇す可き種々の困難に耐へ、若しくは之に打勝つこと能はず、特に少年時代は職業を學ぶに最も都合よき時代なり。

然るに高等なる官位は少なくとも二十歳以上、大抵は二十五歳往々にして三拾歳若しくは夫れ以上の人に非ざれば之を授與せず、志願者にして若し此地位に上るの望を失せんか、出世の關門は殆んど全く彼の前に鎖さる可し、企業の當初に於ては困難多くして利益少なく、且つ其間多くの時を要するの例なれば、此種の人に取

ては何事を爲すにも日暮れて途遠きの感を免る可らず、然のみならず、年齢の老ゆるに隨て益々性急と爲り、益々性急と爲るに隨て地位を見出すこといよ／＼困難となる可し。

然れども、只年若しと云ふの一事のみにては未だ以て足れりとす可らず、必ずや才能、志望及び知識を具有せざる可らず、誰か一日にして農業家たり商業家たり將た工業家たるを得る者あらんや、總て是等の業務に就かんとするには夫れ相當の修業を要し、且つ實地と家庭の見聞とは最も肝要なりと知る可し、然るに前記學校の修業は毫も是等の職業に資せざるのみならず、却て青年をして父祖の業を嫌厭し徒に官職を貴ぶの念を起さしむ、農工商家の子弟にして學校卒業と同時に、父祖の業務を繼ぐ能はずと宣言して、其父兄を失望せしむる者幾何なるを知らず。

佛國の學校が青年を驅て官途に向はしむる其勢力は甚だ大にして、遂に官途よりも一層通常の職業なれども、而かも最も有用にして且つ名譽ある業務に疎隔するの弊を長せしめたるは歎ず可し、登用試験に失敗せし者は餘儀なく是等の實業に従事すれども、元來其好む所に非るがゆゑに、熱心もなければ事に必要なる特種の

知識もなし、其成功頗る覺束なしと云ふ可し。

佛國の教育制度は、此くの如く青年の官途に就くに都合よきと同時に、官途以外のあらゆる吏務并に高等職業に對しても亦頗る適當なる組織なり、官途以外の吏務と官吏の職務とは相類するものにして、創造の力も意思の働きも不撓の勉強をも要せざるなり、而して、其安氣なるは彼此共に同様にして、著しき進歩は固より期し難けれども、年功に依り次第に昇級するは疑ふ可らず、官吏登用試験に落第したる者が、好んで是等の吏務に従事せんと競争するは人の知る所なり、但し其椅子には亦自ら限りありて、到底その希望を充す能はず。

佛國の青年が記者及び教師の如き高等職業を冀望するも、亦是れ佛國教育制度直接の結果なり、試験科目の増加に依て百科全書的知識を與ふるは此制度の特色にして、學校出身の青年は一通り各種の學科に涉り、何事に就ても或は書き或は語るの心得あるが故に、自ら以て博學多識と爲す、然れども憐む可し、多少文學者たる其人は學校に於て他の獨立生活に必要な教育を受けず、否な寧ろ、其學校教育の爲めに不適當の人物と爲されたるが故に、餘儀なく斯る職業に従事するに至るなり。

要するに、此種の高等職業に従事せんと欲する者過多なるに至りしは、其人々が一種特別の教育を受けたる結果に外ならず。

然のみならず、此教育法は何種の問題にても根底より之を論究するの力を失はしむ。佛國人は元來想像力に富むが故に、輕々に事物を速断して、爲に危険なる綜合を爲すこと多し、其最も顯著なる證據は佛國に於ける新刊書籍の綱要を紹介する週刊雑誌の賣行宜しきを見て之を知る可し、此くの如き狀勢なれば、浩濶なる書籍の刊行は益々少なく、若し之ありとすれば、其書籍は大概百科全書的性質を帶ぶる幾多の著書の編纂物たるに過ぎず、即ち多年の研究を費したる一人の著述に非ずして、寧ろ讀み易きやうに編纂したる梗概書なり、左れば僅少の例外を除きて、現今佛國には眞正なる著者も讀者も共になしと云て可なり、佛國の書肆が數卷に亘りたる書籍の出版を躊躇するも故なきに非ざるなり。

然れども、總ての問題を根本より研究すること能はざる此現象は、決して佛國人固有の特性に非ず、過去二世紀間及び現世紀の初に於て出版したるものと、最近四十年間の著作とを比較すれば、事自ら明白なる可し、畢竟するに、前記の事實は登用試

験に因て促されたる注入教育の結果なり、人若し事物の表面のみに觸接し、専ら袖珍書のみ依て學修し、正當に事理を解せずして之を速了し、消化し難き雜駁なる知識を詰込むの風習に慣れんか、組織あり秩序ある正則の研究は到底能くせざるに至る可し、而して此正則的研究に最も不適當なるものは、詰込主義及び試験の爲めに最も多くの年月を費し最も多くの力を盡したるものにして、佛國官立學校の學生の如き此弊の頂上に達したるものと云ふ可し、彼等は記憶に富み概念に敏に 諛證を撰むこと極めて速なり、此種の才智を養成せんことは即ち學校唯一の目的にして、彼等が登用試験に及第するは職として此才智に由るなり、併しながら、一朝是等の外美にして内空なる學問を實地に應用するの必要に迫ることあるんか、直に其無能を暴露せざるを得ず、

要するに、佛國現今の教育制度は官吏の製造には極めて妙なれども、其他の事には一切不適當にして、就中人物養成には最も不適當なりと知る可し。

第二章 獨逸の學制は人物養成に適する乎

人或は余を以て、世の神聖視する所のものを漸次に破壊して以て、快と爲すの惡漢

なりと思惟せんかなれども、余は是れより更に獨逸の學校に就て聊か評論を試みんと欲す。

佛人が獨逸の學校を尊敬せしこと夫れ幾何ぞ、獨逸が佛國に打勝ちしも其學校の優れるが故なりと稱して、彼等は頻りに學校を増設し、或は試験科目を追加せり、然り、事苟も教育に關すと云へば、如何ほどの失費も敢て之を吝まず、以て學校全盛の時代を現出せり、思ふに、如何なる浪費家も是れ以上の狂熱を以て其家を零落せしむるものは非ざる可し。

其學校熱の熾なるや、全國を擧げて恰も狂せんばかりにして、授業料免除の教育にては尙ほ不充分なり、宜しく強迫教育を施す可しとて、山間僻邑の牧童にまでも、就學を強ひ、學校の効能に就て些かたりとも敢て疑議を挿ひ者あれば、人は却て之を憫むほどの有様なりき。¹⁵

當時佛國の急務とせし所は則ち獨逸の模倣に在りて、其兵制を獨逸式に則りし如く、學問研究法も、教育法も將た精妙と適切とを以て名高き言語學も、亦みな範を獨逸に採りしなり、『大學二年生をして好良なる羅甸教科書を用ゐしめよ、佛國の振興

期して待つ可し』とは、佛國大學の諸博士が熱心唱道せし所にして、學校熱に浮されたる佛國は、一齊に此怪語に雷同せしなり。

昨日までは確固不拔の眞理とせられしもの、今日は頓に誤想と認めらるゝに至りしは抑も何故ぞ、前記所見の誤想なるは、今は何人も疑はざる所にして、萊因兩岸の國民、孰れも之を承認せざるはなし。

¹¹ 最初佛國人の間に誰言ふとなく、學校に對して不平の囁を漏せしが、漸くにして二三の人士は學校が決して待設けし程の功果を見はさゞりしことを警告し、學制の發達は實際の功益と明に相反するの現象を呈し、試験及第者の多數は滔々として墮落しつゝあることを、事實に徴し數字に示して指摘せり、是に於てか、學校の發達は徒に無用の人物を増加して、恐る可き危険を醸しつゝあることを言ふ者あるに至れり。

是等の風評が教育に關係なき局外漢もしくは民間人士の間に止まりたる時まで、は、齊東野人の語として世間一般に注意するものなかりしのみか、却て僻説として之を非難した¹²、然るに佛國大學中にては有名なる人々及び實際教育界の領袖等

〔其中には故文部大臣をも含めり〕まで、之と同一の不平を唱ふるに至り、遂に學制改革の熱は先づ佛國最古の大學ソルボンに勃興せり。

然れども、同様の物論が獨都伯林に起りしまでは、尙ほ或は、一の思想より他の思想に極端より極端に激變する佛人の習僻として之を看過するを得たりしならんも、既に獨逸に於て然る以上は、最早や之を輕視するを得ず、況んや獨逸に於ける反對の發頭者は實に獨逸皇帝なるをや。

斯くて、近年までは學校の功能を無上なりとして稱賛したる獨佛の兩國民も、學校が其の待設けたる功績を擧げざるに失望して、今や却て、稱賛したる時と同一の氣勢を以て之を非難するに至れり。

獨逸皇帝は何の點に於て失望せし乎、學校に對して何を待設けし乎、是等の研究は極めて有益にして教訓と爲るは云ふまでもなく、帝が教育上の抱負を知り、而して帝の期望が果して實現せらるゝの機會ありや否やを確むるも亦、有益にして教訓と爲る研究ならん。

其一

獨逸皇帝が教育に關して演説したる其演説の最初の部分は要するに、學校が吾人の期望せし結果を齎らざりしことを論じたるものにして、先づ學校が教育の第一義に於て失敗せしことを痛言せり、曰く

『若し、學校にして最初より其當然止まる可き地點に止まりたらんには、只今大臣が論及せし如き閣令を發布するの必要を見ざりしならん、若し朕の言にして多少過激に亘ることあらば、其は現當局者に對して言ふに非ずして、學制及び學制に因て生じたる事情に對して云ふものなりと諒せられよ……………學校は實に吾人が當然期望す可き効果を奏せざりしなり』

夫れより、帝は教課目、教授の方法等に關して攻撃を始めしが、第一着に死語の研究を科學の地位に進め、青年の文學的練習に倔強の補助を與へし言語學に對して大攻撃を加へたり、曰く

『弊害の根本は、實に千八百七十年以來言語學者等が人物の養成、實際社會の要求如何を度外視して、専ら教へらる可き題目、教授の技術もしくは學問其物に重きを置きしこと是れなり、言語學者として有名なる樞密顧問官ヒンツペテル氏の

目前に於て、此言を發するは誠に氣の毒なれども、斯學研究の弊害は最早や黙視す可らざるの度に達したり』

帝は教授の方法に就て假借なく攻撃したる如く、教課目に關しても亦用捨なく非難したり、今日に至る迄、文學的教育の基礎と爲れるものは何ぞと云へば即ち羅句語にして、獨逸人は其言語學に於て得意なるが如く、羅句語に於ても亦頗る得意なることは人の知る所なれども、是れ亦匡正を要する心得違なり、獨帝が此事に就て語る所を聽け、曰く

『從來羅句語に對して反對を唱ふるもの少なからず、羅句作文も亦甚だ大切なり、外國語を研究する人に取ては裨益少なからず、是れ間違もなき事實なり』

『然れども卿等よ、朕も亦嘗て羅句語を學びし一人なり、卿等の羅句作文は果して如何にして出來せしか、朕は屢々一青年が、例せば獨逸作文に丁並を取り羅句作文に乙最上を取りしを見たり、然れども此學生は賞す可らずして寧ろ罰す可きものなり、何となれば彼は正當の方法に依らず、詳言すれば、助力を得て文を作りしこと明なればなり、吾人學生が以前作りし羅句文の十中八九は皆此手段に依

らざるはなし、然も是等の作文は良好とせられたり、羅句作文を重すること斯の如し、吾人もし羅句文を綴るが如く手本に依て獨逸文を作らんか、決して善き點數を得ること能はざる可し、左れば羅句作文は徒に時を費すのみにして實効なし、斷然廢す可きものなり』

言語學及び羅句語の教授が待設けたる効果を奏せざりしこと此の如し、帝は更に進んで他の點に就て攻撃して曰く、學校は實際の見地より云ふも亦失敗せり、詳に云へば、人物を養成し立身の素養を得せしむること能はざりしなりと、是れ實に帝が演説の骨子なり、少なくとも帝が最も力を置めて言明せしは學校が人物養成を誤りしと云ふの點に在り、文部大臣は兼て帝の意向を察知するが故に、其開會の演説に於て、普魯西人及び獨逸帝國民が其境遇の變化したる後に於ても、尙ほ從來の如く自國の天地に満足し、學問の國民を以て安んず可きや否やを奏問せしに、帝は『獨逸帝國民は今や其眼を海外に轉ずるのみならず、移住をも企つ可きが故に、決して從來の如くなる可らず』と答へたり。

此理や極めて明なり、今日歐洲諸國民は競ふて世界を征服せんとするが故に、獨逸

入をして手足を伸ばさしめ、世界征服に於て其分を盡すに適せしむるは、實に目下の急務なりと云ふ可し。

是に於て、文部大臣は今尙ほ實施中なる高等教育を目的とする所の古來の學制は、全く之を廢棄す可きものなりと結論せり。

次に皇帝の演説は、其最初より獨逸の教育法が實用に遠かれることを縷述して曰く、『朕をして先づ第一に、今日の問題は主として我國が世界の母國たる地位に缺く可らざる要素を具へ、國民をして生存競争に堪へしむるには、如何なる教育策を採用す可きかに在ることを指示せしめよ』と、帝の眞意は誠に明白なり、少年をして須く生存競争に適せしめざる可らず、再言すれば、彼等をして獨立自活の力を具へ、最も移住に適したる他人種と海外に競争して、後れを取らざるの實用的人物たらしめざる可らずと云ふに在るなり。

而して此點に於ても亦學校は失敗せり、何となれば、學校は人生の落第者、或は多く新聞雜誌記者の類を製出したるのみならず、尙ほ甚だしきは、聊か氣力を要する事業には何事にも不向なる近視眼者及び、過度の勉強の爲めに衰弱せる畸形兒を製

出したればなり、獨帝は最も明白なる語を以て之を喝破せり、帝は先づ少年に勉強を強ふるが爲めに、其健康を害し、且つ其意志の發達を妨ぐる弊を指示して曰く

『朕は今我が學童の時間表を見て、是非とも家庭復習時間を改正するの必要を悟れり、樞密顧問官ヒンツペテル氏は朕がカツセル中學校の學生たりし時、父母が第一に此事に關して苦情を唱へしことを記憶するなる可し、當局者は其後直に取調を命じたり、即ち我々學生は復習の爲めに幾時間を費せしかを記したる層一書を毎朝校長に差出すことゝ爲れり、朕は實にヒンツペテル氏が知れる如く、家庭にて七時間、學校にて六時間勉強し、食事に二時間を費したり、朕が自由時間の如何に少なかりしかを察するに足る可し』

帝は此くの如き過勞の惡結果を救濟す可き唯一の方法を附記せしが、其事たる決して一般學生の倣ふ能はざる所なり、曰く『若し朕にして當時乘馬するか、若しくは其他の方法に依り自由に運動するの機會を有せざりしならんには、世界の事物は凡そ如何に進歩せしやを知ること能はざりしならん』と。

馬上の運動が精神の鬱を散ずるの好方法なることは云ふまでもなければ、之が

爲めに人生及び世界の知識を得るに足らざるは亦疑ふ可らざるなり帝は勉強過度の弊害を指摘して曰く

『朕は此くの如き状態に對して根本的治療を施すの必要を感ずる者なり、卿等よ、弓は最早や此上に曲ぐ可らず、此くの如く甚だしく曲げたるまゝに棄置く可らず、事態は實に極端に達したり』

『學校は人間以上の仕事を爲したり、朕は學校が餘り多くの學者を製出したりと信ず、學校は實に一般國民の利益を害し、個人の幸福を損する迄に過度の教育を施したり』

國民活動の大小は其國に於ける學者の數に依りて之を計るを得べしと主張したる人々は、此演説に對して果して如何の言を爲す可き乎、帝は尙ほ進んで曰く、

『ビスマルク公の所謂、大學卒業生の貧民窟てふ語は最も能く此状態を言悉せり、飢餓の門に入らんとする是等多數の候補者、痛語、殊に新聞雜誌記者等は官立學校が産出したる畸形兒にして、餘り激語なれども半ば眞實ならずとせず、此事實こそ實に吾人の危害を醸すものなり、斯くの如く學者の國內に溢るゝ状態を喻

ふれば洪水に浸されたる田圃の如し、最早や此上の水害を忍ぶ能はざるなり、左れば朕は有力なる理由を認むるに非ずんば、此上中學校の増設を認可せざる可し、今日の中學にて既に澤山なり』

國民の富強活動は其國學校の數に依て推測するを得べしと唱道せし當年の論者は、帝の此宣言に對して果して如何なる答辯をか爲さんとする、況んや、斯くの如く痛切なる非難を加へし人は、古日耳曼の深林より出でたる何等の教育もなき蠻人に非ずして、實に身自ら最も發達せる學校教育を受け、殊に大學の隆盛を以て世に矜る獨逸帝國が産出せし人物なるに於てをや。

演説の終りに臨んで、帝は此學制に依て體育上に及ぼせし缺點に論及して曰く『自身の目を以て視る能はざるの人は何事をか爲し得んや、我國の學生中其七割四分は近視眼者なり、朕がカッセル中學校に學生たりしとき、母上の要請に依て我々は幸に空氣の流通宜しき教室に在りしも、尙ほ同級生二十一人の中十八人までは眼鏡を用ゐたり、是等の事實は深く朕の注意を惹きしが、當時學生の父母よりも、此事に關して幾多の書面が朕の手許に達したり、朕は今我國の統治者なる

が故に、事態を此儘に打捨て置く可らざるを宣言するは朕が當然の任務なり』
 『卿等よ、人は世界を觀るに眼鏡の力に依らずして直に自身の眼を以てせざる可
 らず……是れ宜しく注意す可き所にして、朕は卿等と共に其實行を期す可し』
 此くの如くにして、學校は學術上に於ても將た實際上に於ても共に失敗せしのみ
 ならず、又他の失敗に對して責任を負はざる可らず、何ぞや、政治上の失敗にして、即
 ち最も非難の存する所なり。

學校を利用して、自家の至當とする政治主義を青年學生に吹込まんとするは政治
 家の慣用手段にして、總ての政黨殊に政府に取て、根據を學校に固むるほど成功に
 便なるはなし、是れ實に争ふ可らざる教條なり、左れば、佛國にても獨逸にても互に
 學校を利用せんとして、激しく相争ひ、學校は恰も一大政壇たると共に、又種々なる
 政派の分るゝ岐點と爲れり、有名なる佛國の新學校條令は此事情より發したるも
 のにして、獨逸政府が非羅馬教主義を發表せしも亦、此理由に基くものなり。

獨逸皇帝は嘗て佛國政府が爲せし如く學校青年を馴致するの政策を施したり、其
 政策たる一はジャコピン流にして、一は普魯西流なれども、學校に一種の政治主義

を吹込まんとしたるは即ち一なり、然るに其皇帝が、今や學校は待設けたる政治的
 効果を奏せざりしことを嚴肅に公言せり、思ふに、佛國の政治家も亦斯くの如く告
 白するの途に在るものなり、何となれば、多數黨中の政客中には、公然學校を根據と
 するの不可なるを論じたるもの少なからざればなり、政治主義を吹込まんとした
 る學校法は、味方を造るよりも寧ろ之を失はしめたることは、既に彼等の確認する
 所なり。

然らば、政治的見解よりして獨帝の學校に期せし所は如何、請ふ帝自身をして之を
 語らしめよ。

『若しも學校にして、吾人が當然待設けし所のものを爲したりとせば、朕は中學校
 にて教育され能く其間の消息を知れるが故に斯く言ふことを得るなり、學校は
 先づ第一に民主政治に對して戰端を開きたる筈なり』

現今の佛國少數黨が嘗て局に當りしとき用ゐし所の言と何を相似たるの甚だし
 きや、當時共和黨は叫べり、王黨及び僧黨に向て戰端を開けと、實に此くの如き暗語
 は、佛國に於ても獨逸に於ても總ての政黨が同一の目的、即ち學校をして政治的戰

提の機關たらしめんが爲めに屢々繰返されし言なり。
我輩をして尙ほ進んで獨帝の意を窺はしめよ、帝は曰く

『各學校及び各大學は深く此問題に心を盡し、今日朕が國家を統治するに當り、夫れく朕に助力して以て速に事局の牛耳を取るに至らしむるやう、夙に其青年を教育したる筈なり』

帝が演説の趣意は兎も角も、心中一點の矯飾なきは疑ふ可らず、帝は明に學校をして帝が『事局の牛耳を取る』に助力する所の人物を製造せしめんと欲したるなり、是れ實に、帝が學校の本分とし教育の理想とせし所なり、左れば若し獨逸の教授及び父兄等にして此理想に一致せんか、此くの如くするは即ち彼等の當務なる可し。獨帝は其豫期の悉く欺かれたるを宣へし後、尙ほ附言すらく

『我國の學校が吾人の切望せし愛國的生活及び國運進歩の必要に應せしは、實に千八百六十四年、六十六年、七十年を以て最後と爲す、普魯西の學校は、當時到る所に唱道せられし統一思想の貯蓄所たりしなり』

『當時、普魯西の人民は獨逸帝國の復古、アルサス、ロトレーンの回復てふ一念に熱

中せしが、是れも千八百七十一年以來全く消失せり、帝國は茲に設建せられ、吾人は其要求せし所の者を得たるが爲めに、忽ちにして月桂冠を擁して惰眠を貪れり、吾人は直に其獲得せし所の者を保有するの必要を我青年に鼓吹す可き筈なりしも拘らず、從來此方針に向て何事も爲されたることなく、過去幾年の間、地方分權の傾向は漸く著しきに至れり、朕は今國家の首長と爲り、此種の問題を研究す可き任を負ふが故に、之を評價するの地位に在るものと云ふ可し、而して是等の傾向たるや、實に青年教育に起因するものなり』

帝は斯くの如く弊害の實際根源を究めて、之を教育の性質教育の事柄に歸し、言語學及び羅旬語を排斥せしは前既に記したるが如く尙進んで、『學校の使命は主として精神的鍛鍊を施すに在り』と論争せし教師等をも熱罵し、最後に『吾人は最早や此くの如き主義の下に行動す可らず』と結論せり。

『精神的鍛鍊』なる語が、武器の力に依て勢威を保有する普魯西國王に取りて、稍々薄弱に聞ゆるは無理もなきことなり、普魯西が漸次獨逸の全部を併呑し、伯林より號令するの武斷的權力を確定したるは、所謂『精神的鍛鍊』の賜に非ず、且つ、普魯西の此

覇權を維持するも亦『精神的鍛鍊』の結果に非ざるなり。

獨逸の學校は政治上、學術上、及び實用上に於て豫て希望したる結果を生ぜざりしとて帝が之を非難したるは至當と云ふ可し、獨逸の學校制度は全然失敗に歸せり。

其二

獨逸皇帝已に學制を改革せんと決心したり、配下に屬する者は固より其意を遵奉するの外ある可らず、

然らば其改革の趣意如何、帝は學校をして學術上、實用上及び政治上本然の軌道に復歸せしめんが爲めに教育問題を解決するに當り、果して何をか注告し、何をか命合せんと欲する乎。

第一、學術上の見解よりする帝の解釋は、簡單にして根本的なり、帝は中學校以外總ての學校より先づ羅句語を排除せんと欲するものにして、且つ其中學校の數をも制限せんとの意あるは既に前章に記したる所なり、元來、中學校なるものは、高等専門の學科を修めんとする者及び學問專業の人の爲めに設立するものにして、漫に多きを求む可らず、帝は曰く、『有力なる理由の存するに非ざるよりは朕は今後中學

ル
ル

校の増設を認可せざる可し、現今設置のものにして已に十分なり』と。

帝は又羅句語排除に關し、假借なく明言して曰く、『斷然羅句語作文を廢止せよ、是れ實に修學の前程に横はりて時間を徒費せしむるものなればなり……我教育は根底より改革せざる可らず、今の教育主義は數世紀以前の教育主義なり、羅句語と少許の希臘語と共に教へられたる中古の寺小屋教育と同一徹なり』と。

余は今茲に、羅句語存廢の大問題に就て敢て可否を云はざる可し、又羅句語の教授法及び其方法より生じたる結果もしくば餘りに之を重んじ過ぎたること等に就ても兎角の評を挿まざる可し、只一言す可きは、學術上よりして獨逸帝が忠告したる唯一の改革方案は、消極的即ち只これを廢止せよと云ふに過ぎざることは是れなり。

然れども、實用上より見たる獨逸の改革意見は決して消極的に非ざるなり、已に述べたる如く、教育の實用的効果は帝の最も重きを置きたる所なり、帝は教育の力に依り、青年をして『生存競争』に堪へしめ、國民をして海外膨脹に適せしめ、且つ、世界の征服に於て他の國民との競争に打勝たしめんとを望めり、一口に云へば、帝は獨

立自營に堪ふ可き實際的人物を養成し、世界的知識を彼等に鼓吹せんことを希望せしなり、帝が自ら其少時に於て乗馬の外這般の知識を收むるの機會を得ざりしことを哀みしは前章に記したり、讀者の記憶する所なる可し。

併し、獨帝が此壯圖を實行するに如何なる手段に依らんと欲するかは、未だ讀者の了解せざる所ならん、今もし、其兒に歩行を教へんとするものが兒の兩足を緊束したりとせば如何、又もし、天地の廣大なることを其兒に示さんとするものが、故らに兒を狹隘なる容内に監禁し、剩へ、依て以て外面を覗ふ可き一切の孔隙を閉鎖したりとせば如何、讀者は其愚に驚くことならん。

然るに獨帝が前記の希望を達する方法として案出したる所のものは、恰も此比喩に似たり、讀者の了解に便せんが爲めに、茲に再び獨帝の語を引證す可し。

『吾人は須く獨逸の國語を以て我教育の基礎とせざる可らず、獨逸作文は宜しく主要の題目たる可し、學士號を得んとする者、添削を要せざる獨逸文を草し得るに至らば、其精神的修養を経たるは明白にして、以て合格者と認むるを得べし……』
 ……羅甸作文の爲めに我學生が獨逸語に費す可き時間を徒費すること少なか

らす』

是れ實に、獨逸人をして十分其國語に通せしめんとの正當なる希望を表明したるに止まらず、寧ろ公然獨逸的ならざる總てのものを排斥せんとするの希望を表明したるものなり、詳言すれば、あらゆる他國の要素あらゆる外國の知識を禁止せんとするの趣旨を言明したるものなり、帝の演說中明に之を證明するものあり。

『若し我が學生にして、半ば佛語の雜れる古代の獨逸語 *Schulquäste* (學校問題てふ字を用ひずして、純粹なる獨逸語 *Schulfrage* と爲さば、朕の最も満足する所なり、左れば獨逸人は今後専ら *Schulfrage* なる語を用ふ可きなり』

斯く外國語を排斥するを視て、人或は愛國心の餘に出づる者となさんなれども、左の語を見れば、帝が教育上に行はんとする新主義を、一層明瞭に了解するを得べし。是非の判斷は姑く別として、所謂『自國』なる語の意味如何と云ふに、古日耳曼の祖國を指すに非ずして、普魯西王朝の建設したる所のものにして、其中には現今の全獨逸國民を網羅する後代の祖國を意味するは明白なり、即ち獨逸青年が研究す可き歴史は、最近世の歴史、詳言すれば、普魯西が漸次他の日耳曼諸邦を征服せし其間

の歴史なり、現代の獨逸に愛着せしめんが爲めに、必らず教へざる可らずとする所の課目は斯くの如きものにして、帝は、戯に此語を發するものに非ざるなり。

『朕が學校に在りし時は、大撰帝侯、ブランデルブルグのフレデリックキリアム、既に雲霧の中に葬られ、七年戦争亦これを口にするものなし、歴史は前世紀十八世紀に筆を止めて、佛國大革命以後の事を記さず、獨逸の青年に取ては最も大切なる千八百十三年乃至十五年の戦争は、教授せられざりしが故に、朕は科外しか、最も興味を感じたる級に出席して、漸く是等の事實を知ることを得たり』、

左の數語に依りて、帝は結局の目的を自ら明瞭ならしめたり、曰く『何故に我青年をして其當さに知る可きことを知らしめざるか、何故に我政府をして斯くの如く物議囂然の中に陥らしむるか、將た、何故に斯く迄に外國思想を重んずるか、是れ實に注意す可き眼目の點なり』と、帝の意は火を棍るよりも燎にして、誤解せんと欲するも得べからず。

有體に帝の意を語らんか、獨逸青年をして外に向けたる注意を内に轉じて、専ら之を新獨逸に集中せしめよ、青年をして普魯西が依て以て覇を致せし其事件を歎賞

せしむるや、教授せよ、是等の事件は所謂眼目の點なり、斯くの如くにして巧に人心を籠絡すれば、『政府に對する物論』も自ら鎮靜に歸し、且つ『我國の青年が現代の問題に就ても自ら其見解を改むるに至る可し』と云ふに在り。

更に其意を直言すれば、専ら普魯西勃興時代の歴史を教へて、青年の腦中に一種特別の僻見を養はざる可らず、斯くの如くにすれば、古獨逸をも回想せざるに至る可しと云ふに在るなり、吾人は今にして、帝が實用上より見たる教育の解釋如何を知るを得たり、帝は丸出しに告げて曰く

『卿等よ、朕は兵士を要す、朕は我國を守るに適したる青年を要するなり……吾人は須く我高等の諸學校に、現在海陸軍兵學校に於て實行する所の組織を適用せざる可らず』

帝の言甚だ善し、然れども今の世界は實業の世界なり、人々殺戮を事とするの世界に非ずして、生計の資を儲け出す可き世界なり、兵學校の組織は果して此世界に乘出すに適したる青年を造るに足る乎、再言すれば、此くの如き組織は果して有利の事業に適し、且つ活動窮りなき今の社會に處するに必要な技能を備へたる實際的

人物を養成するに足る乎、是等の事業に當るには専ら發起力を發達せしめざる可らず、然るに、獨逸青年の模範とす可きは普魯西流の兵式なりと云ふ、驚く可きに非ずや、若しも獨逸が劣等國民に對して社會的勢力を張るに必要の事業を起さんとならば、先づ其青年の心を開き其眼界を廣くせざる可らず、然るに却て其眼を蔽ふが故に、彼等は過去の世界を知らず、自家直接の小世界の外何物をも知るを得ず、世に莊大有益の美觀は少なからざれども、彼等は只普魯西史中の一節を窺ふことを得るのみ、大砲に依て獲たる勝利は之を知るも、耐忍、氣力、發起力及び意思の力に依て獲たる勝利は之を知ること能はざるなり。

印度には所謂涅槃の境に達せんと目的を以て、生涯を黙想に費す僧侶なきに非ざれども、此くの如きものは彼地に於ても極めて少なし、然るに、獨逸皇帝は無限なる宇宙の一小部分即ち孤立する自國の外視る可らずと爲し、以て全國民をして印度愚僧の愚に倣はしめんと欲す、思はざるの甚だしきものと云ふ可し。此くの如き夢想を實にす可きや否やを判斷するは獨逸人の事なれども、我々佛人は之を戒として其眼界を廣くせざる可らず、蓋し、佛人は漫に自國を嘆美し、世界中

最も進歩したる『大國民』なりとして、自ら誇るの癖あるのみならず、千七百八十九年の大革命を以て萬事の紀元と爲す可きやう青年に教ふるの傾あり、斯くて世界は佛國に頓着せず、駿々として進歩しつゝあることを覺らざるなり。

以上論じ來れる所に據れば、獨逸皇帝の改革案は學術上に於ては消極的にして實用上に於ては架空的なり、然らば、次に政治上より見て其結果果して如何。

帝の改革案は主として政治的利害、或は帝が政治的利害なりと信ずる所のものに起因するが故に、若しも此目的を達せざることあらば、實に氣の毒と云はざるを得ず、帝の演説に曰く、『今日の問題は吾人の已に得たる所の者を如何にして保存す可きかを青年に教ふるに在り、然も、從來此方針に向て何事をも爲されたることなし、左ればこそ、近年地方分權の傾向は漸く發現し來れるなれ』と、是に依て之を見れば、帝の教育策は即ち此警戒す可き地方分權の傾向に反對せんと意に出でたるを知る可し、而して一たび之を合點すれば、帝の演説全體の趣意は極めて明瞭となる可し。

帝の此冀望を實にするには學校が一種の權勢威力を保有せざる可らざれども、

然も學校が之を保有せざるは帝の已に親しく實驗する所なり、何となれば、帝の演説は畢竟するに、普魯西王國の光榮を發揚するやう、既に仕組まれたる其教育制度を、一層鞏固ならしめんことを試むるものに外ならざればなり、左ればこそ、伯林なる中學校の教師連中は帝の此演説に反對し、一齊に斯る非難を受けたるを遺憾とするの意を發表せり、統一されたる獨逸を愛せんことを青年に教授し、革命的運動に抵抗するの力を備へたる社會秩序の擁護者を造るは我々の最も神聖なる職分なりと、彼等は主張したり。

學校に一種の政治主義を吹込まんとしたる教育制度の全然失敗に歸せしは帝自ら語る所の如し、然るにも拘はらず、尙ほ其同一制度を勵行せんとするは何ぞや、帝は遂に其冀望を達する能はざるのみならず、却て反對の結果を招くの危険を冒すものと云ふ可し。

帝の唱道する教育制度は畢竟、獨逸の中等社會をして獨立の職業に依りて生活を營むに不適當ならしむるものなり、何となれば、帝が今演説せし教育策を行ふ所の學校は即ち、中等社會の爲めに態々糊口の道を授けんとするものにして、生來生存

競争に不向なる獨逸人をして益々不向ならしめ、世界に乘出して他と競争するに愈々困難を感せしむ可ければなり、ポアンサード氏は巧に獨逸の中等社會が只管武官、行政官、其他の高等職業に向はんとするの傾あること及び、個人の爲めにも一般社會の爲めにも極めて大切なる金儲け、即ち通常職業を厭棄するの弊風あることを描寫せり。

且つ、此新制度は中等社會をして益々庸劣ならしむる結果として、世に困窮不平のものを續出するに至る可し、而して國家は、其海陸軍は如何に大にして其士官は如何に多きにもせよ、到底この實用的ならざる且つ形式に拘泥する教育が當然製出す可き總ての不能者を扶持すること能はざるや勿論なり、而も是等困窮不平の人物は常に政府に反對するものなるが故に、之を始末するは自ら政府の責任と爲る可し、要するに、此教育制度の結果として帝の指摘したる不平の徴候は、益々増加するの外ある可らず。

主權者自ら一地方の行動一個人の進退に關して容喙する如きことあらば、其政府は非常の病に罹れるものと云ふ可し、而して、若しも茲に、主として一地方一家族に

關する問題ありとせば、其は必然教育に關する問題なり、此理由よりして、政府の干渉は何事にも失敗したり、帝は今其覆轍を踏まんとするものなり。

若し、余の此評論にして、獨逸皇帝の閱覽に入ることあらんか、帝は必ず意外の感を抱くことならん、何となれば、帝の教育策は諸國民の傾向如何に拘はらず、兎に角に新活路を開くものにして、將來の方策此外に求む可らず、是れ決して誇張の言に非ずとは帝の自ら演説せし所なればなり。

終りに臨んで、帝は左の語を爲せり、曰く

『卿等よ、今日は實に吾人が將に新世紀に入らんとする過渡の時代なり、此時に當り、時代の必要を感じ、將來を前見し、新運動の指導者と爲るは朕が家の慣例にして、朕が父祖は之を以て其特權としたり』

『朕は自ら將に逝かんとする今世紀の新傾向を發見したりと信ずるが故に、他の社會改革に於けるが如く、教育の事に關しても斷然新方策を採らんことを決心せり、是れ實に避く可らざる急務にして、例令ひ、今日に於て之を採用せざるも、今後二十年を出でずして、必ず斯く爲さざる可らざるに至る可し』

僅か一分間前までは其父祖の武勳を青年の眼に赫灼たらしめんが爲めに、歴史教授の範圍を普魯西勃興時代に制限し、且つ學術教授を抑制して、實際大帝國の青年をして、帝自ら鼓吹したる所謂生存競争に堪へざらしめんとする其皇帝の舌頭より、此くの如き言を聞かんとは、何人も意外とする所なり』

然れども、其自家撞着は怪むに足らず、是れ實に普魯西人の性質なればなり、吾人もし外交家の惡口を用ふるを得ば、邊鄙の獨逸帝國中にも、半ば東洋的小國民なる普魯西は、最後に歐羅巴の仲間に入り、最後に世界強國の一と爲りしものなり、喩へば、他より十五分間晚く生れたる不規則なる人が、生涯其後れし十五分間を回復する能はずと稱して自ら辨疏するが如く、普魯西は常に他の歐洲諸國民より二世紀も後れたん、嗚呼スプリイ河の沿岸にては、フィリップ二世もしくはルイ十四世が其政策と共に夙に葬り去られたるを知らざるが如く、今尙ほ齷齪として之を學ばんとす、遠き過去の夢と化したるものを未來の政策とは何ぞや。

我輩は國家將來の一問題即ち生存競争、國外に於ける獨逸人の發達如何を觀察するの必要、世界を征服せんとする國民の競争等に付て論ずるものなるが故に、實際

に世界征服の優勝者たる英國人が其青年をして此激烈勇壯なる戰鬥に適せしめんが爲めに、如何に其青年を教育したるか、又如何にして彼等が他に卓越するに至りしやを研究するは、極めて興味ある事にして、之を研究すれば、英國の教育制度が獨逸帝の提供せし學制と如何に根本より相違せるかは、自ら明白となる可し。

其三

以上の論文を起草しつゝありし時、余は偶々一友人の訪問を受けたり、其人は何卒子息をして生存競争に堪ふるの教育を受けしめんと苦心する人にして、佛蘭西人としては珍らしくも、其子息を官吏或は民吏たらしむるを欲せずして、獨立自活の人たらしめんことを冀望せり、左れば友人は屢々唱道せられて而かも殆んど實行を見ざる、所謂實用教育を求むること、獨帝よりも切實なるものと云ふ可し。

此友人は多くの外國學校より規則を取寄せしが、就中最も其注急を惹きたるものなりとて、わざ／＼一冊を携へ來て余に示したり、余は是より其規則を説明し、且つ余が其後自ら得たる材料を附記す可し。

前記の外國學校と云ふは、則ち英國の殖民學校にして、其目的は、自ら進んで海外に

事業を起さんとする者、則ち英人種が依て以て漸次世界を蠶食し、他人種を屈服せしめたる農業上の根據を世界各地に扶植せんとする青年を教育するに在り、是れ恰も獨逸皇帝が自ら發案したる學制に依て達せんとしたる所のものなれども、其取る所の手段に於て著しき相違あるは、讀者の知るに難からざる所なり。

此學校規則の表紙には、學校の特色を表する二個の拔萃文あり、第一はジョン、スチュアート、ミル氏の句にして、『世界現時の状態に於ては殖民事業こそ富裕なる古國の資本を海外に輸出す可き最良の道なることは躊躇なく斷言するを得る所なり』と云ひ、第二はイー、フオスター氏の語にして、『移住は帝に勞働社會の爲めのみならず、總ての階級に取て益々必要となりつゝあるなり』と云ふ。

規則書中には、第一に其目的を記載せり、曰く、本校設立の趣意は通常の學校教育に缺乏する特種の實地練習を受けんと欲する青年を養成するに在りと、然れども、英國の教育法は只此學校に限らず、總て實際的なることは讀者の豫め記憶す可き所なり、要するに、此學校の教育は青年をして生存競争に成功するの資格を得せしめんとするものにして、言の上には、獨逸皇帝の發案も之と異なる所なし。

學校の管理者は各地の殖民地と聯絡を通じ、種々の報告に接するが故に、其學生が異日實地活動の場所を選擇するに便宜多し、此學校出身者の中には、既に外國に於て成功せしもの少なからず。

規則書には、次に學校の位置を記し、且つ繪圖面をも附して、詳細に其外形もしくは内部の組織をも示せり、學校の地位は田舎に在り當然の事なれども、佛國の農學校が巴里府の中央に設置せらるゝを見れば、自ら其用意の異なるを知る可し、一面は海及び航通す可き河川に臨み、一面は農業地を控へたる丘上に建てられたるもの即ち殖民學校にして、此二個の事情のみにても、獨逸の如く市街の中央に學生を群集せしむるよりも、移民を養成するに多少勝る所ある可し。

圖面を見れば、學校に附屬して廣大なる地面あり、農業各種の仕組を示し、農産物の見本を作る等の用に供す、且つ家畜牧場、牛乳搾取所、家禽飼養場、作事場、艇庫等夫れ夫れ相應の建物を構ふるのみならず、近隣に二棟の禮拜堂あるを見れば、宗教上の事も亦忽にせざるを察す可し。

是等の序言の次に學校課程表を示す、其教育の如何にも實際的なる一見はして明

白なり、聊かたりとも、學校を政治上の目的に使用せんなどの考なきは無論にして、只青年が必要とする實際的知識を興へんと欲するのみ、佛國の農學校とは反對に、實地を第一とし、理論上の講義は實地の仕事を説明せんが爲めに授けらるゝに過ぎず、且つ、學生をして移民事業に實際必要な各種の職業を練習せしめんが爲めに、學校にては、常に一群の労働者及び工匠を使用す。

自然の順序として、第一に學ぶ可きは農業にして、各學生は身自ら此事に従ふ彼等に授くるに改良農具を以てし、以て其使用法に熟せしめ、且つ其効用を知らしむ、又菜園及び菓物園にはあらゆる上等の見本を集め、學生をしそ其耕作法を研究せしむ、蜜蜂の飼養は特に重きを置く所にして、是れを最も實用的なり、蓋し、蜂蜜は砂糖及び蠟の代用を爲すが故に、萬事に不自由なる新殖民地に於ては、蜜蜂の飼養は甚だ大切な産業なればなり、其他、所有地の一部に樹木を栽培して、林業研究の用に供す、加奈陀及び濠太利亞に移住するものゝ爲めに、此種の知識の大切なるは規則に示す所なり』

牧畜は多くの殖民地に於て甚だ大切な産業にして、移民が産を興すの初めは此

業に依ること多し、左れば此學校に於ては、特に殖民地の仕事に適したる種類の馬及び子馬を併せて七十頭以上を備ふるのみならず、各種の羊、豚、家禽等をも用意し、學生をして牧畜者と共に其事に當らしめ、以て細に飼養法を學ばしむ。牛乳搾取所には特別に撰擇したる牝牛五十頭を置き、最近發明の器械を用意し、夫れ／＼寒帶地方にも熱帶にも適當したる種々の方法を以て牛酪、乾酪を製造す、尙ほ移民は其家畜の病に罹りしとき之を療治するの必要あるが故に、獸醫術は日課の一部となり居れり。

獨逸帝の如く、之を以て世間實際の知識を得るの手段とするの必要なきも、學生は乘馬術を學び、日々近邊を乘廻せり、是れ多くの新開國にては、馬は今尙ほ唯一の交通器にして、兼て又大地面を測量監視する唯一の方便なればなり、且つ、他と隔離する地方に寄寓する者に取て必要なる測量、地行、排水、灌漑等の術も亦實地に之を學習せしむ。

移民者は只自己の地所を開墾耕作するの法を知るのみにては、未だ以て足れりとする可らず、其住居する所固より僻遠なる可きが故に、彼は一通り種々雜多の技術に

通じ、自ら一切の必要に應ずるの覺悟なかる可らず、約言すれば、人間中最も獨立自營の人たらざる可らず。

斯くの如く獨立自營の人たるには、尙ほ他に學ぶ所なかる可らず、規則の下卷に之を説明す、曰く、第一に鍛冶場ありて、學生に農具及び其他の道具を製造し、且つ之を修繕するの法を習はしめ、又大工及び車大工の仕事場にては、大工の手藝、車輛の修覆、木造家屋の建設等を教へ、尙ほ鞍及び其他の馬具の製造をも覺えしむ。

然かのみならず、移民生活に適するが爲めには、游泳術、端艇漕術、舟橋及び筏等の構造法をも心得ざる可らず、即ち學校所有の端艇を預れる濱番なるもの、此種の技藝を學生に教授す、規則書に曰く「濱番は結び目なしに綱の兩端を繋ぐの技術をも教授す」と、此くの如きは實に英人の實用を貴ぶの精神、精密周到を受するの念を示すものにして、世に無用の知識なきを合點したるものと云ふ可し。

移民は又自身及び他人を介抱するの法をも心得ざる可らず、此大切な箇條に關して規則書は説明すらく、「學生は溺死者を救助する法、種々繃帶の施し方、接骨術及び血止術、其他負傷、火傷を始め、平生有勝ちなる怪我、人手當の事をも教授す可し」

以上記載せし條々は専ら戶外實地の仕事にして、最も重要な科目なり、蓋し、此學校の目的は刀筆の吏を作るに在らずして、活動的人物を養ふに在り、左れば、通常の學科は規則書の終りに附屬科の如く記載せらる、曰く、『校内の授業は已に戶外にて實地經驗せし科目を説明せんが爲めに之を設くるのみ』と、斯くて毎日二時間づつ、校長教師が農學、地質學、礦物學、植物學、山林學、測量學、機械學、獸醫學等を講義し、且つ、將來の移住者に取て最も有益なる殖民地官吏の書信は、總て公に朗讀せらるゝなり。

規則書には又二十五枚の寫眞を附す、是れは、學生等が各種の實習に従事する實況を撮影したるものにして、³⁴余は茲に之を示す能はざるを遺憾とす、何となれば、是等の寫眞を見るものは、神の外何物にも依頼せず、熱心事業に當るの素養を備ふる、有爲にして實際的なる英人種の風采に接して、自ら感奮する所ある可ければなり、此學校に入學するものは、決して貧困の爲めに、餘儀なく海外に出稼する種類の人に非ずして、寧ろ富家の子弟なり、即ち、獨逸皇帝が海外に活動せんことを熱望したる

其中等社會の青年なり、是れぞ此學校の特色にして、規則書に記したる授業科を見れば、十七歳以下一ヶ年二千二百五十フランク(我九百圓に當る)二十歳以下二千七百フランク(千圓)二十歳以上三千五百五十フランク(千百圓)なり、以て入學者の貧子弟に非ざるを察するに足る可し。

左れば、是等の青年は本國に於て安樂の生涯を送らんことを望むは自然の情なる可きに、彼等は左る生活を冀はずして、新開地移住に免るゝ能はざる艱難辛苦に當らんが爲めに、致々として實地教育を受く、誠に感服せざるを得ず。

余は已に是等の青年が必ず獨立不羈なる可きを記せしが、規則書に附せられたる有名なる賛助員等の演說筆記を見れば、果して其然るを證す可し、序に記す、英國の學校は大抵私立にして、此學校も亦人民の私力に依て經營せらるゝものなり。是等賛助員の多くは、自ら移民の生活を營みたるものにして、移住地に於ては必ず種々の困難に遭遇す可きを豫期し、且つ隻手を以て其困難に打勝つの覺悟なかる可らざる旨を青年に警告せり、而かも此種の警告は啻に青年の志氣を沮喪せしめざるのみならず、却て其刺激となるが如し、蓋し、前途の困難は薄志弱行の徒を逡巡

せしむ可きも、剛毅なる英國青年には無上の興奮劑なればなり。

賛助員の一人なるカニユートフオールド卿の言に曰く、『諸君は自ら事業中の最も困難なる事業に當るものなり、時としては不幸と戦はざる可らず、諸君の收穫は或は皆無に歸し、諸君の家畜は或は斃るゝことある可し、而かも不運の爲めに挫折する勿れ、彼の勇者の如く、再び奮起して戦闘を続け、以て諸君の損失を恢復せよ、是れぞ即ち眞の生存競争なり』と、此くの如き演説は、英人種を鼓舞して世界を征服せしむる天籟の音楽にして、普魯西流とは自ら其調を異にするを見る可し。

他の演説者ヴイクトリア總代理者サー、グラハム、ベルリイ氏は曰く、『世界何れの所に於ても、英國々旗の下には必ず殖民するを得べし、加奈陀極寒の地方より亞弗利加、濠州の極熱地方に至るまで、苟くも諸君の向はんと欲する所には、過去千年間或は烈しき戦を戦ひ、或は風雨に暴露したる英國の國旗を見るなる可し、今は即ち諸君が如何なる方向を採る可きか、又何種の專業に就く可きかを熟慮す可きの時にして、豫め能く之を確定せざる可らず、諸君、決して躊躇する勿れ、大膽なれ、果斷なれ、堅忍不拔なれ、英國が斯くの如く多くの殖民地を有する限り、而して之を繼續する

機會の存する間は、聰明なる英國青年は決して心を勞するに及ばざるなり、余は最早や壯年に非ず、余が初めて殖民に従事してより、茲に四十年を經過したるが、當時に於ては、今日諸君が有する如き便利は一も之を得ること能はざりしなり、前途茫茫、資本乏しく知識淺くして、移住地には一人の知人すらなかりしなり、然も余は一度該殖民地の首相に擧げられ、三度議會の席を占めたり』と。

單に一學校の學生のみならず、國民を擧げて此くの如き方法にて教育され、徹頭徹尾、實用的力量を以て世界競争の舞臺に乗出すものなれば、其成功は決して偶然に非るなり。

然らば則ち、將來の主人公なりと自稱し得るものは何人なるか、將た實際世界の主人公たる者は何人なるかは自ら明白なる可し、吾人果して吾人の子弟をして、米國土人の如く全く競争場外に驅斥せられざらんことを冀はんか、獨逸流の教育を取らずして英國風の方法に依る可きは、復た喋々の辯を要せざるなり。

試に、普魯西王國及び普魯西式武斷政治の模型中に養成せられ、教育の基礎は只普魯西地理、普魯西歴史、否な寧ろ普魯西王朝史に過ぎずして、獨立生活に必要な實

際的知識の缺如せる不幸なる獨逸青年ありとし、而して、此青年が前に記したるが如き實地練習を経たる快活なる英國青年と、坤圓球上の何地にてか突然相會して互に競争せざる可らざるに立至りしと假定せよ、其結果果して如何、此二人の中、孰れが今後新世界に於て舊世界の人士が經營す可き事業に適す可き乎、孰れが獨帝の宣言せる如く今日已に帝王一人の職分に非ずして、人種全體の共有す可き創造發起の力を發揮す可き乎。

余は已に歐洲中最も有力なる皇帝が提供したる學制と、二三私人の工夫したるものとを比較したり、然も恐らく、此有力なる皇帝は、個人の氣力を發揮せしむる唯一の方法は、只君主が自己の行動を抑制するに在ること、換言すれば、私人の創造發起の力は、國家の干渉なき所に於て始めて發生するものなりとの理を合點せざるなり。

第三章 英國の學制は果して人物養成に適する乎

一言以て之を蔽へば、社會問題は畢竟教育問題なりと云ふを得べし、今日の急務は世界の新状態に適合する人物を作るに在り、新状態とは他に依頼せずして人々自

ら自己の幸福を計るの謂なり、從來人々の依て以て生活したる社會組織は既に破壊せられ、尙ほ存するものも時の必要に應ずるに足らず。

幸か不幸かは知らざれども、吾人は實に煩雜なる社會進化の最中に生れたり、而して斯くの如き混亂の状態を呈出せしは、全く吾人が祖先より傳承せる古式の教育制度と新に生じたる社會生活の必要と相調和せざるに基因す、別言すれば、吾人は已に全く死去したる舊社會に適合す可き人物を今尙ほ製造しつゝあるものにして、斯る教育を受けながら、實際新状態に順應するの舉動に出るは何人も甚だ難しとする所なり、余は讀者が果して此邊の事情を解するや否やを知らざれども、余自身に取ては事極めて明白なり、余は恰も一人にして二身あるものゝ如し、一方に於ては多年社會上の問題を科學的に研究したる結果として、明に爲す可き所を知り、且つ多少學者流に之を論議することを得れども、他方に於ては幼時の教育に束縛せられ、過去の重荷に壓伏せられて、進歩したる理想を實にすること能はず、或は辛ぶじて僅に之を爲し得るのみ、余の頭腦は已に創造力を發達せしむる自營主義の境に到達せるも、他の部分は尙ほ依頼主義の境に彷徨するものなり、吾人は詩人バ

「ジルの云へる如く、『嗚呼社會の形式を擺脫するは如何に困難なるよ』の歎聲を發せざるを得ず。

老年の吾人が難しとする所必ずしも子孫の難しとする所に非ず、蓋し少年の腦髓は恰も柔なる粘土の如し、新しき感想を享受することを得べし、若し不幸にして吾人自ら新時代の人たる能はずとするも、責めては吾人の子孫を助けて彼岸に達せしめざる可らず、是れ實に當代父兄の大任なり、萬一、此任務を怠らんか、其最も神聖なる義務を盡さざるものにして、因果睨面、嚴しく子孫の頭上に報ひ來る可し。

余は自ら此義務を盡さんことを思ひ、教育問題を一層詳密に且つ實際的見地より研究せんが爲めに、英吉利に再度の旅行を試みたり、余は今度の研究が余自身を益せし如く、同學の士及び佛國の父兄等に裨益する所あらんことを切望する者なり。

其一

英國の教育は佛國の教育よりも迥かに日新の生活に適合し、且つ活潑獨立の人物を作るに便なれども、而かも英國人は尙ほ之に満足せず、教育の改革を思ふこと佛人よりも切なり、蓋し英人は變遷の道を歩むこと佛人よりも先きなるが故に、時勢

と共に推移するの必要を感ずること亦佛人よりも深かる可し。

扱その必要とは何ぞと云ふに、只書籍に依て一知半解の知識を得たるのみにて、實際生活の何物たるを知らざる學者官吏の輩を製造せずして、艱難事變に遭遇すれば自ら之を處理するの人、即ち氣力ありて實用の知識を備へたる人物を養成すること是れなり、英人の得んと欲する所のものは社會進化の狀勢に應じて活動すべき人物に在り。

余は一日エディンボルクに於て、英國の教育に關してダンデイー大學の一講師と語りしとき、講師は余に告げて曰く、『明日夏期講習會にて面白き人物を貴君に紹介す可し、其人は博士として中部英國なる某學校の創立者兼校長なり』と、余は翌日其人に面會して實に一驚を喫したり、其次第は、佛國にて學校教師と云へば古來一定の模形あり、即ち最も端正の姿勢を保ち、黒き衣服に長きフロックコートを着し、常に嚴格に四角張りて、學校教師てふ聖職を帶ぶるの意をほのか示すの風あり、其歩むや緩かにして、飽まで沈重の態度に出で、兒童の精神を感化するに適する切口上にて物を言ふの習慣あり、要するに餘りに勿體ぶるものと云ふ可し、然るに、余と強く握

手せし該校長は全く之に異なれり、讀者は米國西部の開拓者たる英人を以て如何なる風采の人物なりと想像するか、R博士こそ最も適當なる其標本なる可し、即ち軀幹長大にして肉縮り、筋骨逞くして敏活、柔軟、氣力を要する各種の遊技を爲すに最も能く適應す、其扮装何處までも清素にして、灰色なるスコッチ帯ジャケット短服に半ツポンを穿ち厚き毛の靴下に鞏固なる長靴を着け、頭には一種の烏打帽を被れり、余は此人を以て今描かんとする學校の性質を能く代表する者と信ずるが故に、斯く悉しく其風采を記せるなり、然り、此校長あつて此學校あり、事誠に偶然に非ざる也。其翌日は土曜日にて夏期講習會の學課なかりしかば、余はR博士と乗合馬車に搭して散策を試みしが、校長は道すがら余の間に答へ又余にも問ひつゝ、自己の管理する學校の理想と畫策とを語れり、其説明の大意に曰く、今日の教育は最早近代社會生活の狀態に順應せず、其造る所の人物は徒に過去の社會に適するのみ、英國學生の多數は其時間の大部分を後年の生活に何等の功用なき死語の研究に費すの例なり、彼等は近代語學及び自然科學に關して多少の知識を有せざるに非ざれども、社會の構造、實際生活及び實際事業に就ては一も知る所なし、且つ我國遊技の方

法も改革を要すること學科に異ならず、遊技を過重するは過度の注入教育と共に今日の弊害なり、然るに、其教育改革を困難ならしむる事情あり、即ち英國の諸學校が大學の勢力の下に在ること是れなり、各學校は何れも多少の學生を大學の爲めに養ふの例なるに、其大學を見れば總て他の古き團體と等しく責任を重んぜず、總長教授等は目視手觸す可らざる一種の迷想に左右せらる、迷想とは即ち傳説及び慣例に拘泥するの精神にして、此些末事が却て大學の權能オピソリヤよりも有力なりと。然らば貴下の學校は如何にして此學制を改正せんと欲するかと質問せしに、答て曰く、我輩の目的は人間各般の才能を齊一に發達せしむるに在り、學童を完備せる人物と爲し、以て生活のあらゆる目的に適當せしむるに在り、此目的を達せんが爲めには、學校を以て只書籍の力に依り僅に實際社會と氣脈を通ずるが如き人爲的中心と爲す可らず、再言すれば、學校を以て現實實際の小世界たらしめ、以て學生をして實際社會と緊密なる關係を保たしめざる可らず、實際社會に於けるが如く、學校にても亦理論と實際との兩要素を備へざる可らず、若し然らずんば、卒業の後に至り學生は全く取付き端なき未見の世界に彷徨するの悔あらん、且つ、人は唯智識

のみを以て満足す可らず、體格と智識と相俟て始めて人たるの用を爲す可し、故に學校にては學生の氣力、意力、體力、手藝、及び快活なる氣質等を修練せざる可らず。校長が斯く語り行く間に、余は次第に、其學校を一貫する精神を覺ることを得たるも、尙ほ未だ茫漠たるを免れざりしかば、余は學校一日間の業務を精細に説明せんことを乞ひ、學科時間表及び他の細則等を得て、全く其趣意を了解することを得たり。

余と校長とは一旦目的地なる某寺院に着せしが、夫より余は獨り、過ぐる三年間餘の夏期講習會に出席したる人にして、而かも余が發行する雜誌の讀者たる郷紳士B氏を訪問し、B博士の學校に關して質問する所ありしに、氏は十三歳なる長子を近々入學せしめんが爲めに特に其學校を訪問し、且つ念の爲め他の生徒の父兄に就て問合せたりとて、左の三通の書を余に示せしが、余は之を見て感動せざる能はざりき、曰く

『拜啓、私忝十五歳に相成候者、已に十八ヶ月間A學校に在學罷在候處、是迄他の學校に在りし時よりも進歩著しく、徳育體育共に十二分の好結果に御座候、B博士は獨立心に富たる

人物にして、天成の教育家に有之、其學校の主義法則また間然する處無之候、忝も此學校を愛じて勉強致居候、思ふに學生一般の所感も同様なるべしと存候、且つ學校の氣風も頗る宜しく、私は御令息の御入校を呉れくも御勧め申上候』

『拜啓、御問合せの件謹で左に御答申上候。』

拙者は兄弟兩人をA學校に入學爲致候處、兩人とも入學以來大に壯健に相成、且つ先達の試験も無事に通過致し何れも至極壯健に有之候旨申越候、學校内生活の方法も極めて健全にして、學生は獨立獨行の人たる可きやう薰陶被致候、又學校の氣風も宜しく、拙者の推察する所に據れば、學生は概して良家の子弟に御座候。

師弟の間柄親密にして、教師の一人は冬期休業中拙者の宅に在りしが、子供等との交情淺しき計りに親密に御座候、子供等は總じて諸教師を慕ひ居申候。

長子は別して學業の進歩著しく、次子の方は餘程遅き様に候得共、是とも以前よりは大に進歩致し、兩方とも一層活潑に相成申候、學校の仕組は獨立心を發達爲致、宗教に關しても大に自由に御座候(中畧)

尙他に當年八才六ヶ月の小兒有之、是れも遠からず該學校に遣し度と存居候(下畧)

『拜啓、A 學校には私管じに四年間在學致居候に付、此事に關して貴問に御答申上候は小生の大に愉快とする所に御座候、惟は學校にて至極健全に發育致居候、該學校の目的は規則書にて御承知可被成候、古文の教授には重きを置かず候得共、近代語學其他社會に出で、後必要なる知識は大抵教授致居候、倫理と體育に付ては格別に注意致吳れ候。

食物も普通の學校とは全く相異なり、物質結構なる上に品澤山に御座候。
校長は規則の明文にある主義を嚴守厲行致し、なかくに決斷力を具へ、且つ學生に對して深く同情を抱く人に御座候、學生の數は五十人位に制限せられ、各生徒は學業を勵み修養に怠りなきことに御座候、私も同校に二日間滞在致候が、非常に學校生活の愉快なる事を感じ申候。

私は聖書の門派的解釋を缺ける事、こは足下より見ては缺點ならざる可しを、除ひては、此教育組織に對して些か遺憾無御座候。

45
校舎も亦健康に適し、且つ愉快なる構造に有之候、尚ほ申上置度は諸教師共に快活にして修養ある方々に候、R 博士は學童を善導せんが爲めに、其部下に高尚の紳士のみを雇聘被致候、其中には音樂の達人も少なからず候。

R 氏の意見及び以上記載せし書狀は、余をして一層の研究を盡さしむるに至れり、

左に其研究の結果を記す可し。

其二

R 博士の設立せる A 學校は R 郡に在り、千八百八十九年に開業したるものにして、打開きたる田園の間に在り、此地位こそ我輩が追て論ずるが如く、新教育に重大の關係を保つものにして、學校の規則書中にも『近邊には一の市街だもなし』と注意せり。

A 學校創立以來日尚ほ淺しと雖も、該校に於て R 博士の薰陶を受けたる一教師 B 氏は、之と同一の主義に依て英國の南方サッセクス州に B 學校を創立せり、余は此學校にも二回參觀して詳細に其事業を研究することを得たり、兩校ともに佛國流の殺風景なる校舎とは大に其趣を異にし、何れも愉快なる英國風の田舎家なり、一見直に實際生活てふ感念を催すに足る可く、居住者をして兵營或は禁獄等の厭ふ可き感念の代りに、懐かしき家郷てふ快感を抱かしむ。

佛國の學校は、高き障壁の間に挟まれたる狭き地面中に設立せらるゝに反し、英國の此學校は四圍みな空氣、光線、空地、草木等にして、鳥渡外部を一見したる所、如何に

も樂しき住居の如く、學校は不快の觀を呈するものなりとは、此學校に於て認むる能はざる所なり、内部の構造も亦其外觀に譲らず、例へばB學校の食堂の如き甚だ愉快にして、恰も家族の室内の如し、食卓の備付美麗にして、卓子掛は雪の如く白く、什器調度また佳良にして美術的なり、洋琴、繪畫、彫像、安樂椅子等亦等しく愉快便利の用に供せらる、之を以て見るから厭ふ可き佛國學校の食堂と比較せよ、何人も兩國教育制度の間に霄壤の差あるを感ず可し、且つ其校長教師等は妻子を伴ふて學生等と共に食事する事を思へば、其感特に深かる可し、即ち英國の學生は家族的生活を營むものにして、日常普通の生活より強ひて一種特別なる人爲的世界に驅逐さるゝに非ず、言はゞ一の家庭より他の家庭に送らるゝものなり、規則書に曰く「此學校は單に事物を教ふる場所に非ずして實に一個の家庭なり」と。

以上は其組織なり、我輩をして是れより其内容を窺はしめよ、余は先づ順序として其時間表を掲げ、而して後各課の細論に入る可し。

午前六時十五分(冬期は七時) 起床、小食
同 六時半 體 操

同 六時四十五分 學 課
同 七時半 禮 拜
同 七時四十五分 朝 餐(英國流に鹹豚肉、鵝卵等ありて立派なる食事なり)後臥床の整頓、各學生は自ら臥床を掃除するものなり
同 八時半 學 課
同 十時四十五分 小 晝 食
天氣の都合に依り屋外に出て呼吸の運動を爲す(胸まで露出して)
同 十一時十五分 學 課
同 十二時四十五分 唱歌若しくは(季節に依り)游泳
午後一時 晝 餐
同 一時半 風琴或は洋琴の練習
同 一時四十五分 遊技園藝若しくは散歩自轉車練習其他
同 四時 手工の練習
同 六時 喫 茶
同 六時半 唱歌、戯曲、或は音樂の練習其他
第一編 學校に於ける佛人と英人

同	八時半	晚餐及禮拜
同	九時	就 眠

以上の時間表を讀んで第一に感ずる所は、一日の業務が極めて多様なることは是れなり、讀者は之に依りて何事も無理に強ひざるの趣旨と、總て天賦の性能を自然に發達せしむるの目的とを覺る可し、此くの如きをこそ學問的、手藝的、美術的の教育と稱す可きなれ。

正 課	五時間
體育及び手工課	四時間半
技藝課及び室内遊戯	二時間半
睡 眠	九時間
食事及び放課時間	三時間
合計	二十四時間

日曜日には課業なきが故に、學生は隨意に其時間を費消するを得るなり。一日の課業は自ら三部に分る、即ち朝の時間は知識の修養に費し、午後は園藝もしくは手工に従事し、夜間は技藝、音樂及び室内休養に充てらるゝなり。

是れより詳細に以上の三部を考査して以て、此學校の課業及び之に由て生ず可き結果を觀察す可し。

『學生をして事物の名稱を知ると共に其實物に接せしめ、以て絶へず實際より理論に入らしめよ、其學び得たる知識は直に之を使用せしめ、賞與もしくは報酬等の獎勵法を用ひずして、自身の爲めに學ぶの習慣を養成せよ』該學校の課業は實に此くの如き主義を以て授けらるゝなり。

競争法に依て學生に六かしき課業を獎勵するの不可なるは、英米兩國の定論なり、蓋し此方法に依れば、學生は互に他の進歩を妬み、人性の惡しき方面を發露すると共に、課業を以て只一片の役目と爲すに至る可し、學生をして立派なる人たらしめんには、成る可く其良心に訴へ、一人前の人として待遇せざる可らず、R博士は云へり、『此方法は前に學生をして其課業に冷淡ならしめざるのみか、其目的固より賞與に在らずして課業自身に在るがゆゑに、却て彼等を熱心ならしむ、少年をして教育の目的は褒賞もしくは榮號を得るに在りと信せしむるは不可なり、彼等をして人生は富麗に非ず、虚榮心の満足は究竟の目的に非ずと觀念せしむるこそ大切なれ』と。

佛國の學校は全く反對の方法に依るが故に、佛國の讀者は或は以上の所見を以て法外の意見なりと思はんかなれども、R博士の意見は現に多數英國教師の賛成する所にして、人物養成上著大の効果を示すものゝ如し。

米國ミネソタ州セントポールス學校長ビューロー氏よりの來信に據れば、米國人も亦同様の意見を抱くものなり、曰く、『我學校にては決して何種の褒賞をも學生に授與したることなく、又決して彼等を競争せしめたることなし』^{勿論、同一問題に就て學生が一處に答案を作る場合は少なからざれども、余は誰が一番好く出來たと云ふ事を知らしめざるやう自ら注意するの常なり、即ち、余は各生に告ぐるに何時何日より好く、若しくは悪しく出來たりとは云へども、誰々より好く出來たとは嘗て云はず、余は常に學生が余は他より優れりと云ふことを不可なりとし、余は一週間前よりも優れりと云ふを至當とするの意見を持する者なり』と。}

語學殊に近代語學の教授は此學校の重きを置く所にして、其教授法また一般に用ふる所のものとは著しく相異す⁴。余もし、佛人は語學を學習せずして之を研究するものなりと云ふも敢て怪む者なかる可し。然れども、此方法たる明に過てるものに

して、R博士の行へる教授法は余の最も有効と信する所なり、即ち最初二年間、十歳乃至十一歳の學生には英語にて教授し、次の二年間に成る可く佛語を用ひ、其次の二年間は獨逸語に依り、最後に羅甸語と志願者あらば希臘語をも教ふ、斯く數箇國の語を教授するには、固より實際的方法に依るの外なかる可し、近代語學に就ては先づ第一に會話を學び、然る後に文法に移らざる可らず、且つ文法に移りて後も其研究は只會話に熟達するに必要なるだけの程度に止めざる可らず、近代語學の教師中これを知るもの甚だ少なしと雖も、此方法を最も自然に適へる方法なれ、吾人は實に此方法に依りて何の苦勞もなく、不知不識の間に自國語を學び得たるものなり、余は九歳を頭として四人の子供を有す、彼等は此方法即ち語學女教師との會話に依りて獨逸語を學習中なるが、其進歩極めて迅速なり、僅か四箇月にして四人は遊技の時に獨逸語を用ふるのみならず、互に爭論するにも獨逸語を以てするに至りしは驚く可き成功と云ふ可し、四人は又佛文典を佛語にて學びし如く、獨文典を獨逸語にて學びつゝあり、余は此新教育法の説明に便せんが爲め、殊に茲に余が家庭眼前の實例を示したるものなり、尙ほ右學校の學生は前年學びし國語を忘れ

ざるやう、毎日數時間づゝ之を用ふるの例なりと知る可し。

數學の教授も亦同じく實用的性質を帶び、學生等は一旦説明されたる理論を實際に適用するを常とす、即ち學問上の原則に従て物品を製造し、測量を行ひ、且つ田園、工場、遊技、文房具、化學實驗室、食物、燃料等、諸入費に關して種々の書附カネヅ及び備忘録を備置き之に記入して必要なる計算證明を爲す、此くの如きは抽象的研究に特殊の趣味を加ふる者にして、其實益あるや明なり、死せる數字にも自ら生命を生じて、一家經營の術及び商工業上の畫策者たる術をも習得せしむるに至る可し、約言すれば、此學校は實用的人物を養成するものにして、其人物は眞實社會的性質を有する者と見做して間違なかる可し。

自然科学を教授するには、先づ自然界の實物を觀察せしむるの主義にして、此學校の地位は田舎に在るが故に、學生は遠く旅行せずとも直に實物に接し得るの便利あり、即ち彼等は各種の動植物及び鑛物の標本を採集するを得るのみならず、動物の内部組織を研究するの前に、先づ其習慣、外觀、性質等を研究し、植物の分類を爲す前に其形態、構造を考査し、星辰運行の法則を學ぶ前に其名稱、形容を觀察するを得

べく、運動散步は即ち是等の觀察に善き機會を與ふるものなり、斯くて科學は一層自然に一層分り易く一層面白き學問と爲り、容易に心に入り深く吸收するを得べし、且此方法に據れば、佛國に於けるが如く學生をして學問を嫌惡せしむるの弊を免るゝのみか、却て學問研究の嗜好を生じて、學校を出でたる後も、益々進んで研究を積むに至る可し。

歴史を教ふるには社會學の研究と同一の方法を以てす、即ち此學科に興味を加ふるが爲めに、學生をして徒に事實及び年月日を記憶せしめずして、専ら事變の性質成行に關する原因結果を觀察せしめ、特に一國の有形的性質及び其性質が一國の政治商業の發達に及ぼしたる影響を研究せしむるを以て主要と爲す、斯くて學生は先づ英國史を研究し、次で世界の歴史中多少興味ある時代に進み、希臘史に依ては今日社會制度の根原を穿鑿し、羅馬史に依ては、如何なる種類の國家を組織すれば、以て其國民を外國に膨脹せしむるに便なるかを研究せしむ。

十五歳までの學生は總て同一の教授を受くるも、其以後は各生が撰ぶ所の職業に應じて多少これを異にす、即ち學生が進んで大學に入らんと欲するか、或は高等職

業に従事せんと欲するか、若しくは其職業として農工商を撰ばんか將た殖民家たらんと欲するか、其向ふ所に依り、特種の學科に特別の時間と注意とを費すの例なり、規則の自由にして總ての學生が一齊に其身を適應せしむ可き一定の軌道なきは、是れ亦此學校管理上の最も顯著なる特色なり、教育をして學生に適應せしめ、學生をして教育に適應せしむることなし。

之を要するに、規則の大趣意は理論と實地とを疎隔せしめずして、出來得べき丈、學生後年の生活に眞實有用なる教育を授くるに在るなり。

其三

以上論述せし各種の科目は午前の課業にして、午後時間は殆んど全く手工と體育とに費さる、即ち精神の教育に次々に身體の教育を以てするものにして、佛國の教育法は全然體育を藐視するが故に、若しも佛國の父兄をして右の規則を讀ましめなば、必ず一驚を喫することならん、余は過日巴里なるスタニスラス學校の學生に面會せしが、彼は終日學校にて授業を受けし後、尙ほ毎夜九時乃至十時まで家にて勉強せざるを得ずと云へり、斯くの如き過度の勉學は實に身體を害するのみならず、又學問の進歩を妨ぐるものなり、畢竟人は讀書の爲めに時間を費すこと愈々多ければ多きほど、いよく學者と爲るものなりとの誤想より斯る間違を生ずることなり。

扱午後の時間(一時四十五分より六時迄)は専ら園藝、手工、散歩或は自轉車乘に充てらるゝものにして、規則書に曰く、『本校の目的は體育を盛にし、實業上の知識と之を樂むの心とを長せしめ、企業の氣力を養ふと共に學生自身の手に成ると、單に其監督に出るとを問はず、各種の手工を精細に品評するの力を得せしむるに在り、生活上の失敗は多く身體の虚弱なるより生ず、故に本校の學生は日々操練し、盛に運動散歩を爲す上に、毎日多少の手藝をも實習す、是れ實に身體を強壯にし、精神の過勞因循の生活より起る可き神經過敏の弊を醫するに必要なり』と。

以上の文句は、又學生をして實用の目的を有するもの及び實際の生活上に實用となる可き仕事を練習せしむるの趣意をも示すものなり、事實學生は殆んど手づから其學校を建設組織したるものにして、恰も無人島に漂流せしロビンソン・クルソーの如く、學生の周圍に在りて自ら使用し且つ楽しむ所の品々は過半學生の

手製に係るものなり、學校創立の際には、今の庭園は雜草茫々たる荒野にして、畑は塵芥の捨場たりしに、然るに學生は自ら之を開墾して、道路を開き排水法を設けたり、彼等は又總ての門、柵及び建物を塗り、フットボール場をも自ら經營したり、作事場は學生が大工もしくは指物業の大體を學ぶ所にして、種々雜多なる家具什器等を手づから製造したる其中には、机、引出の箱、潜水器械、家禽小屋、鳥籠、端艇等もあり、學校付の農夫が病氣引籠中、或る學生は之に代て畑を耕し家禽を世話し、又或る學生等は市に行いて馬を買ひ共有物となし、年長の學生は之に乗馬術を教授せり、夏期に至れば、園藝及び畑の仕事等自ら重要な課業と爲り、フットボールの代りにクリケット、庭球等の遊戯を爲し、自轉車乘、寫真等は午後休暇中の樂なり。

余が此文の起草中、A學校に其兒を入學せしめたるB氏より書簡到來せり、詳細に該學校見聞の次第を記す、其文に曰く、『余の學校に到りし時、數人の學生は前年自ら作りしクリケット附屬品を弄び、又幅三十乃至四十ヤードの川に架す可き橋梁の事に付て相談し、流水に對して一層の抵抗を加ふるには、石柱を用ひざる可らずなど話し居れり』

『又運動場より校舎に亘れる一小溪あり、建物は此溪流の水平より約百英尺の高地に建築せらる、學生は此溪水を利用して種々の小池或は貯水池を造りしが、是非とも左官の手を要する事の外、總て學生自身の手にて成りしものなり。』

『該校にては今度學生の數を百人に増加せんが爲め、校舎増築の企あり、其準備として、學生は土地の測量、其他建物の精細なる設計圖案を調製する筈なり、蓋し、百人の生徒はB博士が極度とする所の數なり。』

『校舎に接近して假設の化學實驗室及び停車場ありて、學生は此處にてN氏の監督の下に各自の使用し、若しくは學校用に充つ可き種々の道具を製造せり、次學期には貴下も夏期講習會にて閱覽したる新スレート法に依り、一種特別の木工業を創始する計畫なりと』

『校内の各室には極めて愉快なる設備あれども、然かも無用贅澤品は一もあることなし、食事の折にも學生は如何にも愉快らしく、些かも羞耻かむ氣色なし、總體にて六個の食卓を圍み、各食卓に教師一人づゝ附添ひ、食事の折の祈禱は勢よく熱心に唱へらる』

『學生が其教師に對して信用を置き、且つ毫も隔意なきは著しき事實なり、教師の學童に對するや、自ら別格の人を以て居らず寧ろ長兄として何事も相共にするの風あり、言葉遣ひも双方の間に差等なく、往々にして教師も學生と同様の俗語を用ゐることあり、兩者間の區別は、只教師が學者の制服を着する一事のみ』

『R博士は學生をして校外の事務に通曉せしむるを以て大切なりと爲し、時には極めて大事の役目を學生に命じ、或は預金引出の爲め之を銀行に遣はすが如きことあり』と、蓋し、斯の如き世俗の事務及び手藝を教ふるは、只理論を以て授くること能はざる實用的知識を習得せしめんが爲めのみに非ず、又以て學生の身體を發育せしめ、之を鍛練して人生の困苦に堪へしめんが爲めなり、R博士が何故に此見地より得たる實際の結果を巨細に殆んど數理的精密を以て知らんと欲するか、其意自ら明白なる可し。

博士曰く『余は學生の身體が果して適當の營養を得たるか、又其生活の方法は果して彼等の健康に適するや否やを確めんが爲めに、學童生長の割合を知らんと欲し、彼等が學校に寄宿せし間と休暇歸省の際とに於ける生長の割合表を作りたり、萬

一不幸にして學校寄宿中に於ける學童體育の發達歸省中より少なしとせば、是れ即ち我學校の組織不完全なるを證明するものなり、然るに學童が得たる敏捷及び從順等の美德の度合は、之を表示する能はざれども、此二個の性質が他の性質を毀損して得たる者に非ることを確むるは頗る肝要の事に屬す、斯くて得たる結果は甚だ有益なり』と、即ち二個の表に依り、學校寄宿中に増加したる學生の體量身長と、歸省中のものとを比較すれば、在校中の生長著大なること明白なり。

蓋し、我輩が前來記述したる學校生活の方法は、最も身體の發達に適するものなるが故に、以上の結果を見て何人も之を怪まざる可し、博士は尙ほ進んで曰く、『是等の數字を深く穿鑿せずとも、我學校が衣食住の制其宜しきを得たるが爲めに、兎に角に強健なる人物を作りしは疑ふ可らず、我學校に於ては病人は殆んど皆無にして、輕症の頭痛、風邪の如きも極めて稀なり、人の健康は通常當然の事にして、病氣は畢竟過失、無知、不善、過勞、及び仕事の本分を知らざる等の結果に外ならざる旨を少年に教示するは、我學校の生活法なり、我學校にては、學生に清潔と一身の衛生に注意するの習慣を養成するを以て頗る大切の事と爲す』と、學生は毎日入浴し、且つ其臥

床の傍に浴桶を備へざるものなし、之を以て佛國の學生が水を以て恰も贅澤品なるが如く、學生をして其使用を節約せしむるに比すれば、其差異して如何、又佛國の學校は空氣の流通も亦甚だ悪しきに反し、A學校もB學校も冬夏共に窓を開きて睡眠するなり。

其四

午前を正課に、午後を手工及び運動に費し、六時に至りて茶を喫す、夫れより就床に至る三時間は如何に使用せらるゝ乎、ド、ボナール氏曰く、『人は四肢五官の助に依て其智力を運用す』と、我輩は已に午前を智力の發達に午後を四肢五官の鍛鍊に費すことを述べしが、一步を進めて論ずれば、人は只智力と四肢五官とを備ふるのみに止まらず、同時に又社會的動物なり、左れば完全なる人物を仕立てんには、此見地よりも修練を積ましめざる可らず、即ち之に教ふるに禮儀を以てし、以て人と交るにも自他を愉快ならしむるの心得あるを要す、是に於てか前記の學校にては毎日最後の三時間は『社交的人物』を養成するに費す、其手續を研究するは亦頗る興味あることなる可し。

R博士曰く、『我學校の目的は少年をして内氣もしくは不作法ならしめず、以て長者と楽しく交遊せしむるに在り、故に生徒は毎夜校内の婦人及び來客に應接せんが爲め座敷に集合す、座敷は愉快調和の感を起さしむる様設備し、什器、繪畫、彫像も皆此意味にて撰擇したるものなり』と。

此くの如くにして、六時より九時までは學校は宛然一個和樂の家庭に變ずと雖も集會者は只會話するのみに非ずして、或は唱歌を歌ひ琴を弾じ、或は喜劇を演じ音樂を合奏す、音樂は實に此學校の重要な課業なり、『規則書に曰く、『本校にては毎週音樂會を開き、毎夕洋琴を奏す、學生は其感化を受くること多し、又提琴、撥影箱も少なからず、演劇を爲すには生徒自ら劇場を造るの例にして、是れは只快樂の爲めに非ず、實に教育の大切なる一法なり、且つ毎週一夕、セエキスピーアの作を朗讀す。』

學校には又二個の討論俱樂部と繪入雜誌あり、以て社交的性質を發達せしむるの用意を見る可し、規則書に曰く、『雜誌の發行は思想の發表、文藝の造詣に裨益する上に、學校は實に完備せる一個の小世界なりとの觀念を學童に與ふ可し』と、然かのみに

ならず、學生の藝術的觀念を發達せしめんが爲めに、學校附屬の博物館創設中にし、既に大家の作物及び彫刻物その他美術品の見本等を備付けあり。

一日の課業は禮拜を以て始まり禮拜を以て終る、然れども學校は決して宗派の異同を問ふことなし、禮拜堂に於ては食事前の禮拜の如く、聖書を讀み何宗派にも屬せざる祈禱を捧ぐれども、日曜日は休日なるが故に少年は其所屬寺院に參詣するも隨意なり、左れば羅馬教を奉ずる數人の學生は近邊の寺院に於て禮拜す、宗教に關して規則書は「云へらく」宗教は吾人の終生を一貫せり、人生は實に之を以て隙間なく滿されざる可らず、本校は日常生活の一部分として兒童に宗教を勧めず、其宗派の異同は問はざれども、寧ろ其一舉一動悉く宗教の中に攝取し、以て人生を圓満ならしめんと欲す、左ればこそ、本校にては朝夕一同十五分間づゝ禮拜を神に捧げて、信仰と冀望とを表白するなれ」と。

此學校その規則は斯くの如し、我輩は教育制度進化の一階段を畫するものとして、頗る之を重要視するものなり、其實用的性質を帶ぶるの點に於て、其完備せる人物の養成を主眼とするの點に於て、其個人的元氣及び創造のあらゆる能力を發達せ

しむるの點に於て、此學校は近代總ての教育制度と著しく相違す、而して此事實は又實際に世界を風靡しつゝある自營主義の方向に巧に進路を取りたる適例なり、新世界は新教育を要す、社會もしくは團體に依頼せずして自力に依頼するやう人を訓練するの教育を要す、徒に過去に戀着せずして常に將來に注目するやう人を導くの教育を要す。

第四

余は一日此學校に就て友人と語りしとき、其友人の曰く、「誠に面白き實驗なれども、余の所見を以てすれば非常の缺點あり、此學校の寄宿制なること即ち是れなり」と、今日佛國にて流行するが如き寄宿制度は實に生徒の心身に害あり、大なる營舎内に密に無數の學生を閉ぢ籠め、窮窳なる規律に従はしむ、其獨立心を抑制し、又これを破碎するの結果ある可きは無論のことなり、此制度は或は文武官吏の養成に適す可し、然れども之に依て青年の銳氣活動力及び自尊の念を發達せしめんと欲するは無理なる注文と云ふ可し。

今もし、佛人中英佛兩國の寄宿學校に些かたりとも相類似する所ありと思惟する

60
Communist Family Formation (家族形成) (1921)
state

ものあらんか、是れ大なる謬見なり、世には名相同じくして實の全く相異なるもの
少なからず、前記A學校の學生は現在五十人にして、今後増加するとも百人を超へ
ざる可し、R博士は曰く、一校舎の下に百名以上の生徒を教育するは到底力の及ぶ
所に非ざるなりと、然かのみならず、少年は父母の家庭を出ると同時に、他の家庭即
ち校長の家庭に入るものにして、共に食し共に會して親しく相語る、學校は取りも
直さず大なる家庭なり、左れば家庭を離るゝと云ふと雖も、佛國に於て家庭を離る
ゝとは自ら其意を異にする尙ほ其上に、休日は佛國の學校よりも度数多くして期
日長し、暑中に七週間、寒中に四週間、耶蘇復活祭に三週間休業するの例なれば、少年
は一年の内三ヶ月半は其家に在るものにして、全く家庭の感化を離るゝものに非
ざるなり。

各種の社會は皆夫れく、特種の教育法を立て、其社會に適當する學制を編成す、家
族依頼主義の社會に於ては一家内に數夫婦の雜居するを以て其特色と爲す、東洋
未開の社會即ち是れなり、此社會に於ては其子弟は獨立自活せずして家に依頼す、
彼等もし失敗して外より歸來することあらんか、家族は之を養育するとを辭せざ

60
るなり、斯る次第なれば、個人の教育は縦し之を要するも極めて些少にして、時に僧
侶の手傳に依り、家族自ら之を施すに足る可し、此種の社會に於ては教育上見るに
足るものなし、其社會は恰も家族教育の反影と云ふも可なり。
國家依頼主義の社會に於ては、個々分立する家族共產制の代りに、尨大なる國家共
産制行はる、青年が立身するには専ら國家に依頼し、國家は即ち之を登用して陸軍
その他の官職に就かしむ、西洋諸國中佛蘭西獨逸の如き特に此種の社會に屬する
ものなり、而して青年が是等の官職に就かんには登用試験を要し、其登用試験は多
くの候補者を淘汰するが爲めに益々其通過を困難にす、事情かくの如くなれば、注
入教育は自然の結果にして、總ての教授は皆この主義に出づ、而して只記憶術に依
り、漫に種々雜多の知識を押し込むの結果は、消化せざる知識の塊を見るのみ、此種の
社會にては如何にして實際生活の困難に堪ふるの人を造る可きやの問題なくし
て、只如何に教育すれば登用試験を通過し得るやの問題あるのみ、此事情より自然
に生ず可き學校は即ち寄宿學校にして、此學校に於ては試験を最上唯一の目的と
し、如何なることをも之が爲めには犠牲に供せざることなし、一校に五百人乃至千

人以上の學生を蟻集せしむるは、蓋し此種の學校に於ては、父母に代て一々各生徒の行狀に注意し、其氣質を養成するを以て教師の職分とせず、教師は聊かも學生と交際するの要なければならぬ。斯る次第なれば、高尚なる人物必ずしも教師として適任に非ず、識見學問の深遠なるもの又必ずしも適任に非ず、寧ろ最少の時間を以て最多の學科を學生に注入するの術に長じたるもの、生徒をして試験を通過せしむるの詭計に巧なるもの、試験委員の弱點及び特質を最も能く察知する者こそ、最も能く其任に適するものと云ふ可し。

第三種は即ち個人主義の社會にして、英米二國を初めとして瑞典那威の如き之に屬し、其教育の方法は全く前二者と趣を異にす、是等の諸國に於ては各個人は其生計を立つるに、家族もしくは國家に依頼することなし、國は中央集權の國に非ざるが故に、多數の官吏を用ふるの要を見ず、個人は主として自己の氣力と獨立の職業に適したる知識とに依頼して、其生を營むの常なり、左れば此種の社會に於ては、右の性質を發達せしめ、實際的人物を養成するを以て教育の主眼と爲ざる可らず、就ては學校内に出來べき丈け外界の空氣を充満せしむるを要す、然り而して、是等

①
62
の狀態に最も能く適應し、隨て繁昌する所の學校は即ち生徒の員數を少數に限るの學校にして、市街住居の學生の爲めに晝間學校を開き、地方住居の學生に對しては寄宿學校を置く、寄宿學校と雖も、²⁴年をして健全なる家庭の感化を受けしめんが爲めに、成る可く家族的生活を營ましむ、學校を區別して晝間學校寄宿學校と云ふは決して穩當に非ず、蓋し、此語は正反對なる社會の狀態、全然性質を異にする學校及び全然相反する結果を表明することもあればなり。

以上論せし所を以て見れば、余が今述べたるが如き意見に據りて我佛國の學制を改革するの大障害は、我社會の狀態即ち佛國の青年を驅て登用試験に依るの外、他に道なき官途に熱中せしむる其風習に在るを見る可し、世間或は前記の新式學校を以て只一種の好奇心を満足せしむるものと想像せんかなれども、實は決して然らざるなり。

受験者の數尙ほ少なりし時に於ては、青年學生は相應の試験準備を爲せば通過の見込なきに非ざりしも、今日は全く以前と其狀態を異にし、全國無數の青年は我もくと官途の關門に突進するがゆゑに、其狀恰も亂軍呐喊の有様にして、一個の

椅子に百餘人の競争者あり、是に於てか試験は已に官途に入るの關門に非ずして、寧ろ到底踰越す可らざる障壁と爲れり、少年をして此障壁に向て突進し、以て其頭腦を破壊せしむるは決して智者の事に非ず、左れば佛人中多少思慮ある者は、今や漸く獨立の職業に注目するに至りたれども、獨立の職業に成功せんには、佛國今日の教育法にては到底養成す可らざるの資格、即ち前に記したる新式教育に依て最も能く發育せしめらる可き資格を要す。

第四章 如何に子弟を養成す可き乎

其一

佛國人が其子供を立身せしむるの方針は、先づ節儉して各兒の爲めに持參金を貯蓄し、然る後、これを身分相應のものと結婚せしめ、尙ほ出來得べくんば、時に及んで之を公職に就かしむるに在り、然るに、此立身法は近年金利低落の爲めに次第に困難を感ずるに至れり、曾て五分の金利は四分に低落し、今や僅に三分を得るに過ぎず、斯る利息を以て相當の資財を子供に分配せんとす、益々事の困難と爲りつゝあるを見る可し。

元來、佛國は金錢に富むが故に、今日までは此困難も幾分か緩和せられたり、佛國は富國にして巨額の地金銀を有すとは佛人の常に誇稱する所にして、是れは間違もなき事實なり、目下に於て世界の最大金融市場は佛國に外ならず、然れども、不幸にして斯く金錢の饒多なるは單に國民が金儲けしたるが故に非ずして、半ば人爲の源因に出るなり、而して其源因は永續すること能はざるものにして、國民繁榮の徴候と云はんよりは、寧ろ衰微の兆として見る可きものなり。

佛國に金錢多きは、第一子供の數を制限するに由るなり、出産兒の員數年々減少し、最近の人口調査に於て、死亡數の出産數に超過するは人の能く知る所にして、斯くの如きは人間の歴史に於て誠に稀有の現象なり、今日此境遇に在るもの世界中たゞ佛國あるのみ。

今家内に子供の少なきは富有の源因なる其次第を云はん、に假りに六人の子供を養育するに六千フランクを費すものとすれば、一人を養育するには千フランクにて足る可く、即ち毎年五千フランクを貯蓄するを得べし、佛人は一般に此經濟法を行ひ、以て多數の家族を養ふの國民よりも一層多くの遊金を所有するに至りしる。

のにして、佛國が世界の最大金融市場たる一源因は實に此に存するなり。
次に佛人が一般に農工商等獨立の職業を厭忌するは第二の源因なり、農工商業は佛人の好む所に非ず、好む所は只官途に在り、佛國の少年が競ふて官立學校に突進し、其門戸に於て押潰さるゝは一般普通の事實なり、是れ決して誇大の言に非ず、農工商業に依り少しく金錢を得たる佛人の夢る所は、先づ實業界より退隱し、其子供をして官吏たらしめ、若しくは高等職業に従事せしめんと欲するに外ならず、左れば佛人は自己の資金を以て獨立に營業するの志望なきものにして、多くは之を以て株券公債等を買入るゝの例なり、是に於てか懐中の錢は金融市場に出るものにして、佛人が獨立の職業を厭忌するが爲めに、佛國の金融を豊かならしむる所以を見るに足る可し。

然るに斯く金錢を饒多ならしめたる要素は、近年漸く之を減少せしめんとするの傾きあり、遠からずして其供給全く杜絶するに至る可し、今その然る所以を語らんに、子供の數を制限すれば一方に於ては貯金を増加す可しと雖も、又一方に於ては之が爲めに國民の生産力を減す可し、六人の子供を養育す可き父は、一人の子を養

育するものよりも適かに多く労働せざる可らざるが故に、隨て國家の富に寄與すること亦一層大ならざるを得ず、然のみならず、多勢の家族中に生れたる少年は、父母の資産に依頼すること能はざるが故に、父母の資産に依頼する一人子息よりも自ら勞し自ら事を企るの精神に富むは自然の數なる可し、將た又佛人が營利事業を厭忌するが爲めに、其富の全部を市場に放下すと雖も、其これを斯くの如くに放下するは即ち富の泉源を涸す所以なり、何となれば、農工商業の外に富を作るの道なければなり、佛人は政治教育の如き農工商以外の職業が、農工商業に依て養はるゝ所の寄生業務たるを忘るゝものと云ふ可し、或は、以上の現象は我々一代の間は確に繼續するならんと言はんかなれども、余は斯く信する能はず、兎に角に次の時代までは繼續せざる可し。

憐む可し、青年の多くは其地位の多きに拘らず、受験者の無數なるが爲めに續々失敗せり、彼等は今何を爲す可きか、否な何を爲し得るか、何事に適するか、彼等が學校及び家庭に於て受けたる教育は果して如何なる資格を養ひたるか、彼等は行政官もしくは武官たる可き教育を受けたるものにして、官途の外に名譽の地なく、又そ

の志望を満足せしむるに足るものなしとは、繰返へしく教られたる所なり、斯くの如きは即ち時の流行にして、實に中等社會のみならず、下流の社會に於ても同様の思想を抱かざるものなし、再言すれば、座敷に於ても店先に於ても、此不條理なる僻見が勢力を逞ふし、全國民をして狂氣の如くならしむ、公報に據れば、一個の空位を生ずる時には往々にして數千人の候補者を見ることありと云ふ、斯くて憫む可き學生は行政官廳の玄關に蟻集して、時の至るを待ち、或は大言壯語し、或は高聲に不平を訴ふ、彼等は曾て一事を爲さず、又爲す可き準備をもせず、若しも其心事を獨立の仕事に轉じたらんには、左ほどに苦心せずして一層の利益を得るのみか、併せて一層の品格自由を得べきに、思ひを此邊に廻らすものなし、蓋し其然る所以は、愚にも官吏以外の職業に就くを以て品格を損するものと考ふるに由るなり、官吏たらんとして際限もなく時の至るを待つ、其間に時と金錢とを空費し、遂に失敗するも彼等は之を以て愚とは思はざるなり、『官吏』なる一語は官吏國たる佛魯西に於ては實に一種の魔力を有す。

然れども又一方より見れば、彼等が自ら事を企てざるは畢竟爲さざるに非ずして

能はざるなり、官吏養成の爲めには頗る都合よき佛國の教育は、人生の困難に堪ふ可き獨立有爲の人物を造るには三文の價もなし、換言すれば、其教育は格別の骨折なくして、毎月一定の俸給を得べき屬吏を造るの外何事にも適せざるなり、一旦官途に就けば、幾年にして書記官と爲り、又幾年にして局長と爲り、更に又幾年にして養老金を得るなど、豫め其全生涯を知ることを得べし、只前知す可らざる所のものは死去の年月のみ、氣樂なりと云ふ可し、左れば我輩の到着す可き結論は自ら左の如くならざるを得ず、曰く、吾人もし我國の少年をして時勢の必要に應せしめ、今方に到來したる社會上の變化に處して、自ら困難と闘ふの力を得せしめんには、全然其教育法を改革せざる可らず。

前記社會上の變化は一般の事實にして、自ら教育問題の明瞭なる解釋を要す、今試に變化の點を擧ぐれば、第一吾人の事業を吾人の子弟に繼續せしむる方法は之を變更せざるを得ず、現今の方法は、最早や目的を達するに足らず、吾人はあらん限りの力を盡し、子弟の立身を目途として之を教育したり、之を教育するに吾人が依て以て成功したる其方法を用ひたり、然れども其結果は豫期の如くならざるのみな

67/P

らず、往々にして全く反對に出ることあり、左れば佛人中最も思慮あり教育あるもの及び相當の知己を有するものは、常に心配して、『今日の世に處して如何に子供を養育す可きか、如何にせば首尾よく之を立身せしむるを得べきか』と、自問自答しつゝあるなり、是れ尤もなる心配と云ふ可し。

然れども社會學の指導する所に従へば、斯くの如き世態の混雜を見るも別に慷慨するに及ばざるなり、或者は此状態を見て或は耻ぢ或は怒り、或者は之を以て不安の徴候と爲し、又或者は一般の人心躊躇逡巡すると共に善良の主義をも一切放擲して、爲めに悪魔を招くに至る可しと主張して、互に論争し又怒號すれども、結局古主義に復歸するの外なしとの信念に驅られて、孰れも從來の道を辿る、是に於てか全然失敗に終るなり。

社會學の教ふる所に據れば、吾人は一層正當に且つ一層有効に右の事實を解釋するを得べし、即ち是等の事實を解剖し比較し又分類すれば、今や此世界は新舊過渡の時代を経て、今後永續す可き新時代に遷りつゝあることを覺る可し、斯くて吾人は或る點より云へば、世界の歴史に前例なき此變遷の原因方向及び其結果を知り

得るものとして、第一に其原因は如何、生産及び運輸の方法が絶へず變化すること、換言すれば、吾人が生存する方法の變化することは是れなり、以前に在ては生産の場所は何れも小工場にして、往々家を以て工場と爲すものあり、取引は狭くして大抵その地方に限られしのみか、仕事は手或は小仕掛の發動機に依て仕上げられ、仕事の方法は曾て變化なく、間々家傳のものあり、父は先祖傳來のまゝに仕事の方法を其子に傳ふるの例にして、新工夫は殆んど絶無と云ふも可なり、且つ、運輸の機關は頗る不完全にして、到底多額の品を輸出或は輸入すること能はざるが故に、競争とても只近傍の工人間に止まりたる尙ほ其上に、製造の方法、工場主、労働者並に年季小僧等の數を規定したる種々の制限規則ありしが爲め、一層競争を緩ならしめたり、左れば事々物々一定不動にして、只家傳的方法を進むるの一方のみ、是に於て不變家傳、過去を標準としたる教育は、恰も時代の必要に適應し、其教育より獲たる結果は久しく人々の珍重せし所なり。

然るに今や社會の状態は一變せり、生産は大工場に於て、而かも非常の力を備へたる發動機に依て行はれ、消費者の版圖は世界に廣がり、隨て需要も亦始んと無限な

り、製造の方法は科學の進歩に連れて絶へず改良せられ、新工夫は到る所家傳の地位を奪へり、人もし競争に堪へんと欲するか、同じ費用を以て一層多量の品を造るか、或は一層善良なるもの若しくは一層廉價なる物を製出せざる可らず、世は實に酷烈なる競争の世と爲りて、最早や安閑たる生活を許さず、新状態は無遠慮に侵入し來れり、之に順應するの外他に擇ぶべき道あることなし。

右の如く人間生存の手段變化すれば、隨て人間社會全體の變化を來すは必然の勢にして、是れ即ち社會上の維新なり、社會上の維新とは、詰り人間生存法の維新なり。近代自然科學の急激なる進歩に依て此に新時代を現出したるが、此學問の進歩は果して何れの邊に至る可きや、其極を想像する能はず、今は只僅に其端を開きたるのみ、左れば此世界は永久繼續する變化の海に乗出したるものにして、事物の停滯不動なりし過去の社會と、今日の社會とを判然區別する所以のもの實に此に在り、即ち今日の疑問は、如何にすれば此進化の潮流を利用し得べきや、將た如何にすれば此進化に伴ふ一時の危険を防ぎ得べきやの一點に歸す可し、今當世の人物と時勢後れの人物とを比較すれば、後者は只退いて城砦を守る兵士の如く前者は前面

に突進して且つ戦ひ且つ禦ぐ兵士に似たり、全然その性質を異にするものと云ふ可し、斯くの如く社會は變化したれども、是れ決して惡魔の所爲に非ず、又圖らず失策したるものが漫に引込思案に陥る如く、徒に躊躇逡巡するに及ばざるなり、天は人に進歩的自然科學を寄與し、以て新時期に入らしむ、此進歩に順應するは、單に人間の利益のみならず、又實に其天職と云ふも可なり。

余は已に社會學は社會變化の原因と共に、其方向をも指示す可しと云ひしが、其方向たるや誠に明白なり、即ち此變化は人を新状態に導くものにして、今日に於ては最早や従前の軌道に安ず可らず、語を換へて云へば、其身を立つるに、何時も變らざる周圍の事情もしくば永久不易の境遇に順應したる慣習に依頼す可らず、其事情境遇は已に久しく傾廢しつゝありしが、今や上述の必要上より方に瓦解しつゝあるなり、古式の教育法に依て養成せられたるものは速に失敗して、結局起つ能はざるに至る可し、左れば斷然舊來の教育法を廢して、代ふるに新教育を以てせざる可らず、舊來の教育法とは何ぞや、國家の厄介物たらしむるやう人を仕立てること、家族及び變遷し易き仕組に依頼するやう人を訓練すること、官職の爲めに人を作るこ

と奮發も企業力も一切不用にして、而かも何時免職せらるゝや計る可らざる些細の職業を得せしめんとすること即ち是れなり、然らば新教育法とは何ぞ、如何なる事變に遭遇するも自ら之を處分し、幾たび蹉躓するも挫折せざるの人物を造るもの是れなり。

然れども、此新教育法は佛國人が過去一百年間自ら求めし所のものと正しく相反す、佛國の父母が其子孫に就て語る所を聞け、曰く、『子供をして我等の爲せし如く爲さしめよ』『家柄も善く友人も多し、以て汝が立身出世するに足る可し』『少年の欲する所は官途に在り、是等の地位は安泰にして面倒なく且つ浮沈もなかる可し』『我家には不足なし、子供は少しも心配するに及ばず、彼等は安全なる俸給と細君の持參金を得て復た不足なかる可し』云云、此類の言葉は我輩の絶へず耳にする所なれども、今や我輩の耳には殆んど一片の虚言として響かんとす、家柄も友人も官途も持參金も我等及び子供將來の爲めに、最早や何等の保證をも與ふることなし、今日の急務は時に隨て千變萬化する生存競争の困難に堪ふるの力を養ふに在り、然れども不幸にして佛人の多數は全く反對の方法にて教育せられたるが故に、

獨立自活は其最も難しとする所なり、要するに佛人は如何にして斯る生活を營む可きかを知らざるなり、然も新教育の効果を見れば之を實際に試みざるを得ず、困難に僻易せず窮厄に屈せざる強健の人物を養成するには、此新教育法に依るの外なかる可し、自力以外何物にも依頼せず、獨立して耶蘇教の爲めに盡瘁する義士の如きは、實に此種の人物中より出るなり、常に自家の周邊に踟躕して、他の天地を見ざる佛人と自營自活の訓練を受けたる英人種の相異は、恰も佛人と只酋長の爲す所に盲從して、譯もなく一同耶蘇教に改宗する野蠻人種との相違に異ならず。以上は即ち社會變化の原因、方向及び結果にして、吾人が之を好むと否とに係はらず、是非とも通過せざるを得ざる所のものにして、吾人が今後採る可き方針は、從來採り來りたるものと反對に出でざる可らざるなり。

或は云はん、『汝の云ふ所總て甚だ可なり、然れども之を實行するの手段方法は如何』と、今暗中に物を探り、過誤失策に陥るなからんことを欲せば、實際の實驗に依頼せざるを得ず、而して佛國從來の教育は其方針を誤りしが故に、國內には依る可き實驗なし、勢これを外國に求めざるを得ず、吾人は自ら百難を排して成功、且つ家

族、朋友、親戚、或は國家等の助力に依頼せずして、獨立自活し得べきやう青年を養成する所の人種に倣て行動せざる可らず、今幸にして世界に此の如き人種あり、苟も盲目ならざる以上は、何人も之を見ざる能はず、何となれば此人種は世界を侵略して、之を開拓し、之を耕作し、之に殖民し、其原住民者を驅逐して、私人獨立自營の手に依り、驚く可き大事業を成就したればなり、若しも只一の實例に依て、舊教育法が作れる人物と新教育法に依て養成したる人物との相異を見んと欲せば、先づ後者が北米に於て爲せし所のものと、前者が南米に於て爲せし所のものとを比較するに如かず、其間の相違は實に雲泥月窟の如し、一方に於ては社會は非常に進歩し、農工商業は前古未曾有の發達を示すに引代へ、他方に於ては社會は非常に退歩して、人々懶惰不生産なる都邑生活に彷徨し、役人主義と政變との爲めに空しく委棄されたる未開地を見る、北米は將來益々隆盛ならんとし、南米は唯懷敗と衰微とを以て充されたる過去の跡を留むるのみ。

試に見よ、強壯なる北米の子孫は漸次南米にも侵入して、無力なる西班牙人、葡萄牙人等が持堪ふること能はざる田園を所有し、鐵道、銀行、商工業等をも掌握するに至

れるに非ずや、獨立人種の向ふ所敵なきを見る可し、前年佛國に世界大博覽會を催はしたるとき、余はアルゼンチン共和國の大統領と此事を會談せしに、大統領は英米人種侵略の事を語りて、痛く之を悲みたり、大統領は又劣敗者の常として、深く侵略者を非難せしが、强者の道を學ぶは難くして之を難するは易ければなり。勇敢なる競争者の爲す所かくの如し、彼等は鍛練の効に依り、常に其道德上及び宗教上の氣力を保持し得るの民族なり、其信仰は全く加特力教の信仰の如くならず、れども、佛人中に於けるよりも不信の舉動少なし、其然る所以は、彼等が個人として十分に其責任を重ずるが故なり、而して英米人が斯く責任を重んずるの理由は甚だ明白なり。

古風なる社會組織の行はるゝ所に於ては、個人は自己の意志及び其創造力に依頼するよりも、寧ろ家族にせよ、學校にせよ、軍隊にせよ、官途にせよ、將た國家自身にせよ、兎に角に社會の保護的組織に依頼するの常なり、政治上、社會上、宗教上の口碑信仰に於て、其人を支持する所のものは悉く身外に在り、身内には一も自ら維持するの根據なし、再言すれば、周圍の人々が箇様く云爲するが故に、我も亦斯くく

に云爲すと云ふに過ぎず、責任の念なきは固より其所なり、是に於てか保護的組織にして一旦破滅せんか、人も亦隨て破滅す可きなり、舊社會に於ては、其家族上政治上もしくば社會上の組織は薄弱なる個人をも支持するに足るほど十分堅固なりしなり、之を譬へば、左右の支柱に依て漸く支持せらるゝ破屋の如し、若し其支柱を取去らば、忽にして顛覆す可きは勿論なり。

佛國の舊式社會組織は正しく右の運命に遭遇したるものにして、其斷垣殘礎到る所に累々たり、而かも佛人は支柱に依らずして獨立するの道を講せざりしが爲めに、今や全然其立脚地を失ひ、徒に從來依頼し來れる家族、團體、國家、或者は王政、或者は共和政、寺院等に向て援助を乞ひ、己れ自ら立つ所以の道を求めざるなり、換言すれば佛人は獨立人士の歩みし行路を發見するに勉めず、又その行動を學ばずして漫に囂然不平を唱ふ、思はざるの甚だしきものと云ふ可し。

其二

扱て、英米人は其子女を教育するに如何なる方針を採るか、左に之を列擧す可し。

第一、彼等は其子女を自己の所有物視し、若しくは恰も自己の後身附隨に過ぎず

と思惟するが如きことなきは勿論、却て之を以て早速自己より獨立す可き者なりと爲すが故に、其心配する所は、只一日も速に出來得べき好條件の下に之を放任せんとするに在りて、其他を冀はざるなり、是れ即ち英米流の慈愛にして、此種の慈愛は其子供を沒了し、其身體を父母の所有物として、以て卑屈柔順なる伴侶たらしめんと欲するものとは自ら其類を異にす、今佛國流の慈愛を見るに、表面は固より立派なれども、中に私慾を含むこと少なからず、其配偶者たる可きものが遠き外國に行くに非ず、只地方若しくは他の都市に離居す可きが爲めにとて結婚を斷はりしが如きは吾人の往々見る所なり、佛人は誠に子煩悩なり、然れども眞實子供の爲めに之を愛するか、或は自己の爲めには非ざるか。

第二、英米人は最初より其子供を成人おとなとして、即ち別個の人として待遇す、故に子供は銘々責任を重んじ、獨立の觀念を抱くに至る、蓋し、人は多少の價值ある者として之を待遇すれば、自ら其價值を得んことを努むるに至る可し、然るに、佛人は其子供を子供として待遇し、成人の後に至るも尙ほ之を子供視するの例にして、子供なるが故に子供として待遇するの習慣を改むること能はざるものなり。

第三、英米の兩親は將來の必要に應せしむるの見込を以て其子供を教育す、即ち過去の爲めに非ずして、日新の社會否な將來の社會に適するやう教育するなり、故に彼等は自身過去の經歷及び境遇を以て子供の模範に供することなし、然るに佛人は此點に於て、前世紀の佛國貴族の教育法を學ぶものなり、其貴族は今世紀の始めに於て、全く過去に對し、以前の爵位に對し、其消失したる家産、朝廷に對し、否な無益の紀念、紀念の幽靈の爲めに其子供を教育したり。

第四、英米の父母は最も注意して子供の健康法を研究し、佛人も亦これを忽にするには非ざれども、往々にして勉學、試験、市街住居等の爲め、子供の健康を犠牲に供することあり、而して健康を養ふ所以のもの果して何處にかある出來得る限り、其體力、氣力及び身體を發達せしめんことを努む、而かも彼等は勇氣を養はんが爲めに、餘りに體育に熱中して、却て身體を薄弱ならしむるが如き愚を爲さざるなり、彼等は運動の晴藝（はれげい）を獎勵せずして、只何處までも尋常に身體の發育を計るのみ、佛國にても英國の遊技を輸入し、以て厭ふ可き佛國流の規則的體操に代へんとするの議あることは、讀者の知る所なる可し、蓋し、其體操なるものは少しも興味なく、只繁

雜なる科目を一層繁雜ならしむるに過ぎざるものにして、英國の遊技法を輸入するも、亦只厭ふ可き桎梏を加ふるのみ、其遊技法を採用して十分に成功せざりしこと、一時之に熱中して忽ち冷却すること、又多少儀式的に之を行ふの弊あること、佛國の學校生徒は其身體の發達を冀ふよりも、寧ろ學課を避けんとすることの如き余の能く知る所なり、然れども此不十分なる膽本（うらもと）に依て、原本の價値如何を想像するを得べし、英國の遊技法が身體の發育上に著大の効驗あるのみならず、亦以て人間成功の基なる沈着自重の性を養成するに與かつて効力ある事疑ふ可らず。

第五、英米に於ては、早くより小供をして物質的、日常の實務を見習はしむ、父母は其力に相應する事件或は使命を小供に委任し、時としては力に餘る事務を處理せしむることあり、佛人の英米に遊歴するもの此有様を見て驚き、英米人は其驚くを見て驚くの常なり、蓋し英米の教育制度は人物養成を主眼と爲し、學者或は官吏を作るは其目的に非ざるが故に、斯くの如く少年をして實務に當らしむるは當然にして、又必要のこととなり、啻に男兒のみならず、女兒をも同様の筆法を以て教育す、然れども之を説明せんとすれば、言論徒に長きに失するの虞あるを以て、此に贅せざ

る可し。

第六、英米兩國にては一般に其男兒に多少の手工を練習せしむ、彼等は實に佛人の如く手工を以て賤む可きものとは感ぜざるなり、佛人に取ては百度の戦敗よりも尙ほ不幸なる此古來の偏見を、英米人は夙に蟬脱せるなり、彼等は職業に貴賤あるを信せず、只人に能と不能、勤勉と懶惰の別あるを知るのみ、故に貴族の子にして農となり工となり、若しくは商となるも、之が爲めに毫も其品位を損することなし、是れ目前の事實なり、然れども英米兩國に於てあらゆる他の職業に劣れりとする二個の職業あり、何ぞや政治家と官吏即ち是れなり、何が故に然るかと云ふに、第一地位の高きのみが其利徳にして、相當の報酬を得る能はず、次には之が爲めに人間の獨立を奪はるゝが故なり、左れば兩國に於ては政治家官吏の地位は他國の如く多からず、且つ英國にては概してセルチック人種なる愛爾蘭、蘇格蘭若しくはウェールズ出身の人をして之に當らしめ、北米合衆國にては愛爾蘭人と獨逸人とに委す、余の友人ポール、ドュ、ルー、ジェル氏は米國に渡航して共和政治を研究せしが、其名著『亞米利加生活』中に明に此事實を描出せり。

兒童に手工を教ふるは、能く英米の教育主義と一致す、佛國にては教育の全部を學校に於てするの例なれども、英米にては専ら實地に就て職業を覺ふるなり、例へば技師の如き直に實地に就て學ぶなり、如何なる職業も、實地の機能を外にして理論のみ喋々す、何の益かあらん、然るに佛國にては其反對に、理論を以て主位に置く、農務省の官吏を養成せんが爲めに、巴里に農學校を建設したる所以にして、海軍學校をも巴里に移さんとするの議あるは、驚く可きに非ずや。

第七、英米にては新奇にして且つ有用なる凡百の知識を得るに於て、父母は必ず其子女に先だつの常なり、蓋し過去及び停滞不動の官途に向はずして、將來及び絶へず改良進歩する通常職業に心を傾くるの社會、再言れば、國家機關の補助に依らず、専ら個人の手腕に依て進歩を期する社會に於ては、固より斯くの如くならざるを得ず、左ればこそ英米人士は常に堅實にして積極的なる事實、其事實は往々にして順序も方式もなきことあれども、兎に角に價值ある事實を知らんと欲するなれ、英米人が其新聞紙より得んと欲する所も此種の事實にして、英米の新聞紙と佛國の新聞紙とを比較すれば、其相違は恰も晝と夜との如し、佛國新聞紙の目的は娛樂

に在り、所謂大新聞の目的とする所も政治的感情を挑發するに在りて、言はゞ一種開つふしの慰み物たるに過ぎず、之に反して、英米の新聞紙は専ら正確にして迅速なる報導を與へんことを期し、其間理論意見を挿むこと少なく、只事實の一方に重きを置くのみ、兩國新聞紙の斯くの如く全然相異なるを見て、亦以て兩國社會の相違如何を察するに足る可し、尙ほ英米の父母が其子供との會話に於て話頭に上る所のものは、重要、眞實而かも男らしき問題にして、一言流行界の事に及ばず、是れ即ち英國の流行なるか交際社會の閑話若しくは安穩愉快の生活を送り得たる昔時の事を語らず、主として生存競争と自立の大切なるを談ずるなり。

第八、英米の父母は容易に其親權を揮ふことなし、只非常例外の場合に於て之を使用するのみ、我輩は已に彼等が其子供を獨立一人前の人物として待遇することを云へり、假令ひ父母の干涉にせよ、絶へず其子供に干涉して、之を人物に仕立てんことは到底能はざる所なり、故に彼等は眞實の教育は干涉に依て行はれずして、所謂『練習』に因て成るものなりと信せり、彼等は又其子供に命令するよりも、寧ろ忠告若しくは諄々たる説諭に依て之を訓戒し、親權を揮はんよりは寧ろ公平無私の

情を明にせんことを勉む、是に於て子供は父母の趣意を了解して、訓戒の通り行ふに至るなり。

第九、左に記する最後の箇條は、最も重要な箇條なり、即ち兒童が如何なる職業を撰むも、父母が其事に關係せざるを承知することは是なり、佛國に於ては『貴下は令息に何事を爲さしめんと欲するや』と云ふが如き問は毎度耳にする所にして、『余は彼を役人たらしめんと欲す』とか、或は此種の何事かを爲さしめんと欲すとは、即ち其答なり、若しも其子の將來を慮り、之が爲めに父が最も適當と認むる何かの地位を宛行はざる時は、自ら善良なる父とは信せるなり、否な其子に與へんが爲めに、財産の幾分を割愛することすら辭せざるなり。

英米の親は其子供に財産を分配せずして、親は親、子は子、おの／＼獨立して自活するの風なるに、佛國にては其反對に親は子を助けて生計を立てしむるの義務あり、而して其結果は即ち左の如し、假りに汝に三人四人乃至五人の子供ありとせよ、汝は其子供をして社會に相應の生計を爲さしめんが爲めに、汝自身の分に加ふるに、更に三人四人乃至五人前の財産を有せざるを得ず、而かも其れ丈の財産を子供が

丁年即ち二十歳を越へざる中に稼ぎ出さざる可らず、然らざれば到底これを結婚せしむること能はざる可し、佛國に於ては財産なきものは、配偶者として之を迎ふるものなければなり、是れ即ち佛國の父母が一人乃至二人の子供に満足し、以て夙く安樂の境遇に達せんが爲めに、營々役々として馬の如く勞働しつゝある所以なり。余は頃者フランクリンが其母に送つて我子の一人に付て戒めたる書信を再讀せしが、其中に云く、『彼兒は自ら一身を害ふ者なり、今日の割合にて余の金錢を使へば遂に彼の爲めに一錢も残らざることを示さざる可らず』と、思ふに此子供は父の財産に依頼して、自ら地位を求むるに熱心せざりしものならん。

子供に財産を貽さずと云はゞ、讀者は定めて其無情を怒らん、佛人が親の慈愛とする所は斯くの如き思想と相容れざる可し、然れども其子供に金錢を譲らざる英米の父母は、金錢よりも迥に貴重なる物を彼等に與ふるなり、佛人が其子供に與へんと焦慮すれども、與ふること能はざる所のものを與ふるなり、何ぞや、金錢を以て購ふ可らず、否な吾人が孜孜汲々あらゆる方便を盡して辛ふじて蓄積したる黄金も之に對しては何等の光なき敢爲活潑の精神、獨立自活の能力、是れなり、佛人は其の

子孫をして自ら勞せず、或は出來べきだけ僅かの勞に依りて安樂に生活せしめんが爲めに、乞丐の如き生活を爲し、爪に火を點じて汲々貯蓄を事とするは實際の事實なり、斯くの如くして佛人は其子供の將來安泰なりと妄想せん、然れども試に活眼を開ひて吾人の周邊を見よ、何種の人が世界に雄飛し、あらゆる事業に成功して、到る所に好地位を占むるか、十中の八九は進取確守の勇氣に富みたる獨立獨行人たるに非ずや。

次に自身よりは其家族に依頼し、自身の事業よりは兩親の財産及び妻の持參金に依頼するが故に、斯く名けられたる所謂『お坊つちやん』を顧みよ、日々社會の底に沈淪しつゝあるに非ずや、彼等は概して所謂第一等の教育を受けしにも係はらず、何事に於ても人に劣り、總ての勢威權力を失墜して、到底首を擧ぐることも能はざるに至りたり、彼等は自ら事業を經營し、依て以て其地位を進むること能はず、幸に一人息子にして父祖の財産を相續するか、若しくは婚姻政畧に依て辛ふじて其運命を維持するのみ、然るに英米流に教育せられたる、體格は強健にして物質的事實を知り、常に成人として待遇せられ、自己の外何物にも依頼せざるの訓練を受け、人生を

一場の戦争と見做す基督教者の人生觀の青年は、生存の困難に打勝つ可き十分の元氣を有するものにして、彼等は其困難を甘受し之を征服す、約言すれば、彼等は競争に適するが故に、困難の間に處して、恰も平地を行くが如く、暇々として其歩を進むるなり。

斯くの如く論じ來て、今や結論に到達せり、余は英米人種が他の社會を凌駕侵略する其動力の潜める所を闡明せんと試みたり、此人種が成就しつゝある所の不思議は、彼等が其背後に官府の力を恃むこと極めて少なきにも拘はず、颯々と他人種を驅逐するの點に在り、然らば即ち、其動力は何處に存するか、最強の社會力即ち是れなり、其社會力たるや、世界のあらゆる兵力及び政府の力を壓倒するに足る、佛國の大敵大患は佛人の思惟するが如く萊因河の彼岸に在らず、彼岸の武斷主義と社會主義とは、實に佛人をして此敵を顧慮するの面倒を免れしむ可し、然らば佛國の大敵大患は何れに在るか、海峽の彼方、大西洋の對岸に在り、否な、英米人種の開拓し殖民する所、總て大患大敵の存する所ならざるはなし、彼等の到るや、獨逸人の如く強大なる軍隊と完備せる兵器を携へざるが故に、之に注意する者少なきのみか、鋤

鋤を携へ單身にて到るが故に却て輕侮せらるゝの例なれども、是れ畢竟吾人が其鋤の効能、其人物の價值如何を知らざるが爲めなり、已に一たび之を知らば、吾人は直に危険の在る處を察すると同時に、又其救治策の存する所を知るに難からざる可し、

第二編 佛人と英人の私生涯

前編に陳述したる彼我教育制度の相違は、先づ佛英兩國國民の私生涯に反應するが故に、此篇に於ては、聊か彼我私生涯の實例を掲げて説明を試みんと欲す。我佛國の教育法は、益々國民の生存力と社會の勢力とを萎靡せしめて、我弱點の由來する二重の原因となれる其反對に、英國の教育法と社會の空氣は、大に彼の國民の元氣を鼓舞して、益々生存競争に打勝つ可き資性を發達せしむ。

第一章 佛國教育法は出産兒の割合を減退せしむ

佛國に於て出産兒の割合年々減退する事は、今更證明するの必要なし、此點に付ては統計家は争ふべからざる證據を與へ、道德家經濟學者政治家は競ふて此大問題を解決せんとす、然れども其出産兒減少の事實を認むるの一事に於ては、彼此相一致するにも拘はらず、其原因に至りては諸説紛々、恰も暗中に物を索るが如くにして歸着する所なし、故に我輩は社會學の光明を藉りて之を講究せんと欲す。

其一

佛國出産兒の減少は疑ふべからざる事實なれども、尙ほ茲に數字を擧げて之を明瞭ならしむ可し、左記の表は人口一萬人に對して、百有餘年間に跨がれる出産兒の數なり。

年 限	出産兒數
一七七〇年より一七八〇年まで	三百八十人
一八〇一年より一八一〇年まで	三百二十五人
一八一一年より一八二〇年まで	三百十六人
一八二一年より一八三〇年まで	三百〇九人
一八三一年より一八四〇年まで	二百八十九人
一八四一年より一八五〇年まで	二百七十四人
一八五一年より一八六〇年まで	二百六十七人
一八六一年より一八六八年まで	二百六十四人
一八六九年より一八八〇年まで	二百四十五人
一八八〇年より一八九六年まで	二百二十人

右の表に依れば、千七百七十年より千八百九十六年に至る迄に人口一萬人に對し

出産兒數は三百八十人より二百二十人に減退したり、即ち三分一以上の減少を見る可し。

而して千八百八十一年に於ける全佛國の出産兒は九十三萬七千〇五十七人にし、て千八百九十年は八十三萬八千〇五十七人なれば、其間正に十萬人の減少を示すものにして、然かも此出産兒數は同期限内の死亡人員より三萬八千四百四十六人だけ少なきの事實は、我輩の注意す可き要點なり、然かのみならず、此死亡數の超過は平穩無事の時に於て出來したる事實にして、其趨勢は年々増進し來れり。尙ほ千八百九十年に於ける全佛國の出産兒數を左の七年間に比較すれば、

- 千八百八十九年より減少せる事四萬二千五百二十八
- 千八百八十八年より減少せる事四萬四千五百八十八
- 千八百八十七年より減少せる事六萬二千二百七十五人
- 千八百八十六年より減少せる事七萬四千七百七十九人
- 千八百八十五年より減少せる事八萬六千四百九十九人
- 千八百八十四年より減少せる事九萬九千六百九十九人
- 千八百八十三年より減少せる事九萬九千八百八十五人

然るに結婚數の年々減退する割合は出産兒數減少の割合より少なきこと、左の表に照して明なり。

年 限	結 婚 數
一八八四年	二十八萬九千五百五十五
一八八五年	二十八萬三千百七十
一八八六年	二十八萬三千二百〇八
一八八七年	二十七萬七千〇六十
一八八八年	二十七萬六千八百四十八
一八八九年	二十七萬二千九百三十四
一八九〇年	二十六萬九千三百三十二

右の表に依れば、千八百八十四年より同九十年に至る六ヶ年間に、結婚數の減少したること二萬〇二百二十三にして、千八百八十六年に少許の増進ありし外は、年々絶えず減退するの一方のみ。之に反して死亡數は年々絶えず増加すること左表の如し。

年 限

死亡數

111

一八八一年	八十二萬八千八百二十八人
一八八二年	八十三萬三千五百三十九人
一八八三年	八十四萬四千四十一人
一八八四年	八十五萬八千七百八十四人
一八八六年	八十六萬〇二百二十二
一八九〇年	八十七萬六千五百〇五人

然らば千八百九十年の死亡數は千八百八十一年の死亡數より増加せること四萬七千六百七十七人にして、千八百八十三年より増加せること三萬五千三百六十四人なり、而して同上年期間に出産兒の減少せること十萬人なれば、此九ヶ年間に人口の減少せしこと、正に十三萬五千〇九十人なりと知る可し。(譯者曰く此邊多少數字上の誤ありん)今更に佛國出産兒の比例を諸外國に比較すれば、諾威に於ては五十一年間に、澳大利にては六十二年間に、英吉利にては六十三年間に、丁抹にては七十三年間に、瑞典にては八十九年間に、獨逸にては九十八年間に、二倍となり、佛國にては三百三十四年後に至て漸く二倍となる割合なり、尤も統計に依て少許の差異ありと雖も、佛國

が遙に他諸國の後へにあるは、何れの統計に據るも皆同一なり。

出産兒數の減少は此の如く争ふ可らざる事實なり、以下此事實を生じたる原因に付て研究せんとす、統計は只我輩に數字を供給するのみ、事實の根原に溯つて我輩に光明を與ふるは統計の本分に非ざるなり。

論者が出産兒減少の原因として列擧する所のもの頗る多し、ナダイヤツク氏の如きも十七箇條以上の原因を數へしが、其内の多分は重複するものにして、仔細に穿鑿すれば二項目に歸するを得べし、(一)眞正の原因たらざる臆測、(二)唯一の主因より由來する所の副因是れなり、以下順次に此二項目に付て考究し、然る後我輩の主因とする所のものに論及せん。

其二

佛國に於ける出産兒減少の原因として、第一に佛蘭西民族が自然に分娩力に缺乏する事を數へ來るを見る、ナダイヤツク氏は論じて曰く、氣候、社會、經濟、生物學上の狀況如何に依り、生物學上の結果は未だ不確定に屬すれども、各種民族の分娩力は平等一様に非ず例へば支那婦人の分娩力は最も強盛にして、南洋ポリネシヤ婦人の

分娩力は甚だ微弱なり、概して羅甸民族特に佛國民族の分娩力はスラヴ、オニツク及びアングロサクソン民族よりも微弱なり、此一事こそ人口上の點に於て争ふ可らざる我弱點となれるものなりと、成程分娩力の強弱は民族に依て相違するが如くにして其相違の原因を探究して、風土氣候其他社會上の状態に歸するを得べしと雖も、然れども我輩の玆に論せんと欲する所は只佛蘭西一國に關する事實にして、其の生産兒の減少を以て民族の問題とするは我輩の首肯する能はざる所なり、若し果して然りとせば、佛國人口の十八世紀の末葉、革命戰亂の頃迄非常に増進し來れる事分び加奈陀に於て印度に於て伊太利、ルイシアナ、ハイチ、モリタス島、プールボンに於て佛蘭西民族の盛に増加せし事は如何に解釋す可きや、現に加奈陀に於て佛人種の子孫は英人種の子孫よりも大なる割合を以て増加しつつあるに非ずや、加奈陀に於ける佛民族は毎、二十八年に二倍する割合を以て増殖し、其本國に於ては漸く三百三十四年目に二倍する割合なり、左れば佛國出生兒の多少は民族の問題に非ずして、別に近世に其原因を求めざるを得ず、殊に佛蘭西國內にてはブリタニー地方の如き出生兒數の割合非常に高きは注目す可き所なり、千八百八

十年より同八十二年に至る四年間に、同地方五縣の出生兒の超過數は七萬四千九百九十人にして、實に同期限間に於ける佛國全體の出生兒の超過數に等し、若しも佛國各地方共此勢を以て進みたらんには人口増加の一事に關しては毫も隣國を羨むに足らざるなり、單にブリタニー地方のみならず、我工業地方に於ても間斷なく人口の増殖を見るにも拘はらず、他の地方に於ては、十九世紀の始め以後漸々減退の顯象を呈せり、然るに全佛國中、人種は何れの地方も同様に於て、別に更迭なきを見れば、人種問題は少しも其間に關係なきこと明なりと云ふ可し。

論者又或は飲酒の習慣を以て、人口減少の原因なりとし、過去五十年來漸く醱酵性の酒類に代へて酒精分の酒類を用ひ來れる結果、酒精の消費高は著しく増加して、千七百八十八年には二十萬三千五百石なりしものが、千八百八十二年には九十七萬千三百石に増加したりと云ふ、如何にも其通りなり、然れども、佛國に於ける酒精の消費高は他の諸國特に人口増殖の割合著しき北歐諸國よりも少なきのみならず、佛國內に於ても出生兒數の最も多きブリタニー地方こそ飲酒の最も盛なる所にして、酒精を消費すること少なき南部地方に於て却て死亡數の出生兒數に超過

するを見る、飲酒の習慣は佛國人口問題に何等の關係なきを證す可し。次に強制兵役義務は亦人口減少の一原因なりと主張すれども、強制兵役の制度は獨逸に於ても行はるゝに拘はらず、之が爲めに其人口増殖を妨げざるは我輩の目撃する所にして、獨逸にては兵役に服する壯年間の死亡數、自餘の壯年間に於ける死亡數よりも多しとのことなれども、此一事は全體の事實に差したる影響を及ぼさざる可し。

最後に苛税は人口減少の原因なりと云ふ、成程課税は甚だ重きに相違なし、ナポレオン三世の頃には、平均一人の負擔額五十九法フランなりしに、千八百七十二年には八十五法となり、今日は百九法となれり、千八百二十年以來地租は二億四千三百萬法より三億五千七百萬法に増加し、戸窓税は二千九百萬法より四千萬法に膨脹し、特許登録税は四千萬法より一億六千三百萬法に昇れり、然れども重税果して人口問題に重大の關係ありとすれば、富裕の地方よりも、貧民多く重税の負擔に堪へ難き地方こそ出産兒の割合少なる可き筈なるに、事實は之に反して、ノルマンデー又はピカルデー地方の如き富裕なる豪家にては、平均毎戸兒女の數一二人に過ぎざる

にブリタニー、アードシヌ、ロザール、アヴェイヨン、アウトロー、コリエズ等貧窮なる地方に於ては出産の數絶へず死亡數に超過し、人口増殖の事實を呈す、人もし佛國出産兒の地圖を調製し出産兒の低き割合を黒線にて表せば、其黒線の最も多く分賦せらるゝ所は即ち國中富裕の地方なるを見る可し。

然らば以上の諸原因は何れも人口問題に左程の影響を及ぼさざるものなれども、此に前記のものよりも一層有力なる原因あり、左に之を説明す可し。

其三

茲に我輩の講究せんとする諸原因は、疑もなく佛國人口減少の上に尠からぬ影響を及ぼすものにして、而かも其諸原因は決して偶然に發生したるものに非ず、實に以下列挙するが如き諸種の原因の一國內に同時に存在するは、必ず他に一大理由の存するを證するものなり、人もし再三再四同じ過誤失策を犯すに於ては、其人は何處にか缺點あり、或は精神に異狀あるものと審判して至當なる可し、一國に於けるも亦此の如し、佛國出産兒數減少の原因なりとして主張せらるゝ諸種の事情の共存するは、他に是等諸原因の又其原因たる可きものゝ存することを意味するも

のと云はざるを得ず。

一、第一の臆測は稍々簡單なり、即ちド ナダイヤック氏の説に『人々の意志は佛國出産兒数の少なき重なる原因の一なり』と云ふ、佛人にして多くの子女を擧げんと欲せば、他國民同様、多くの子女を擧げ得べきは疑ふ可らず、併も何故に佛人は多くの子女を擧ぐることを欲せざるや、是れを實に講究す可き疑問なり、然らば氏の説は結局何事をも説明せざるものと云ふ可し。

二、小身代者の増加する事、若しも此小身代なる言葉が、果して戸主が自己の子女に相續せしむる僅少の不動産を意味するものとせんか、是等の家族間に於ける出産兒の割合は決して大地主の家族に劣らざるなり、英國の如き大地主の國に於ても、諾威、瑞典、ハノーヴァー州のルネブルク、西班牙の北方バスク地方の如き小地主多き所に於ても、出産兒數に多少の差異なきは事實の證明する所なり、若し又小身代の増加とは小借地人の増加を指すものとすれば、自ら別問題にして、別に論ずる所ある可しと雖も、只此に一言す可きは、佛國に於て現に小借地の行はるゝシヤンペン地方に於て、出産兒の少なきが如く、ノルマンデー又はピカルデー地方の如く大

借地の行はるゝ所に於ても、同様、出産兒の割合甚だ低きこと、是れなり。

三、結婚を忌み、不行狀を恣にして、風儀壞頽せし事、結婚數の減少は疑もなき事實

にして、統計に依れば、佛國結婚數の割合は列國中第十一位に位し、英國、蘭國、澳國等みな佛國の上に位す、道徳風儀の敗類は人口問題上、少なからぬ關係あるに相違なきも、我輩の間はんと欲する所は、何故に佛國人は過去百年間かくの如く結婚を忌避し、將た何故に自ら隣國よりも不徳不行狀を犯すに至れるやの一事に在り。

四、一身の快樂を貪らんとするの私慾、是れ亦事實に相違なし、然れども何故に佛人は俄然かゝる慾望を逞ふし、英、獨、露等の國民は何故に然らざるか、英、獨、露の國民は自然に一身上の快樂を貪らざる性質を有すと想像す可きか、抑も亦出産兒の數を制限して、益々自己の満足を買はんとするの慾望を制止す可き原因、佛國に存せずして、獨り彼の諸國に存するか、是等の疑問に對する解答は如何。

五、給金増加の爲め、一身の愉快の増加せし事、是れは世界全般の事實にして、佛國に特有の事相を説明するに足らず、ナダイヤック氏自身も此一事は、出産減少の理由を説明するものに非ずとして、説を爲して曰く、都鄙至る所、賃銀騰貴して、衣食住

は改善せられ、衛生の道も開けて安樂便利は著しく増進し、他國に於ては之が爲めに出生兒の増加を促がしたるに、然るに獨り佛國に於ては如何なる不祥の原因あつて全然正反對の結果を呈するや、眞に然り、我輩は別に之を説明す可き理由を發見せざる可らず。

六、都市居住民の増加 農民の數減少して、都會に住む者の増加したるは亦争ふ可らざる事實なり、今より四十五六年前には、農業地方の住民は實に佛國總人口の四分の三を占めたるに、然るに今日にては僅かに其六割五歩に過ぎず、而かも次第に減少の趨勢あるに反し、都市は總數の七分の五に相當する増加を示せり、然り、誠に争ふ可らざる事實なれども、是れ亦世界一般の事にして佛國に特別の現象を説明するに足らず、英國の如き都市の發達は佛國に優りて、人口十人の内五人は都市に居住す、獨逸に於ても都市の住民は一割四歩より一割五歩に増加し、伯林の如き二百年前には僅に一万七千四百の人口に過ぎざりしに、今日は百三十一萬六千有餘の尨大なる都會となれり、其他伊、西、澳等の諸國に於ても都市の發達は皆同様なり、然らば都市の住民は地方の住民よりも分斃力弱しとするも、何故に諸外國に於て

は佛國の如く出生兒數の減退を來さざるや、佛國は殊に特種の弊害を蒙りつゝあるものと判斷せざるを得ず。

七、在學中の過勞 佛蘭西の學生ほと腦漿を絞らるゝ、學生なきは勿論、彼の學校區に寄宿する青年の生活は益々その心身を虚弱ならしめ、延いて其子孫をも發育不完全ならしむ可く、此一事は慥に人口減少の有力なる一原因なるが如くなれども、其影響する所は只上流の高等教育ある人士間に止るのみ、我輩は一步を進めて、此過度の勉學を強ゆるに至りし原因を究めざる可からず、思ふに、是れ佛蘭西の地味に限りて自然に生ず可き產物には非ざる可し。

其四

以上列擧したる諸種の事情は、未だ以て此問題を解決するに足らざること明なり、必ずや別に一層大なる原因なかる可らず、而して其原因は如何なる者にもせよ、兎に角に直接有力の影響を家庭に及ぼすものならざる可らず、蓋し家庭は一國人口の根源なればなり、然らば佛國に於て特に一家の状態を困難ならしむ可き奇怪の事情の存在するは疑ふ可らず。

子女を擧げ後繼者を得んと欲するは一般の人情なり、若し此の人情を障害するものなくんば、何人も喜んで多々ます。子女の誕生を歓迎す可し、蓋し、家族多きは一種の勢力にして、子供は家の厄介者に非らずして寧ろ其の柱石とも云ふ可きものなり、多少家族共產主義の行はるゝ所に於ては實際に此の人情の存するを見る、蓋し此主義の行なはるゝ所に於ては、両親が多數の子女を教養して之を立身せしむれば、即ち多くの杖柱を得る譯なり、左ればこそ、東洋に於ては、子供多きは幸なりと云ひ、又、子なき婦人は不幸なりと云ふの諺もある次第にして一般に子を産むこととし、佛國にてもブリタニー、ピレリイ若しくは中部の山間地方の如き、多少共產主義の行はるゝ所に於ては、出産兒數の減退を見ず、然るに全たく反對の自營制度の行はるゝ社會に於ても、同じく人口は益々繁殖す、此社會に生れたる子供も等しく行末を保證せらるれども、其方法は家族の力に依頼せしめず、只これを教養訓練して獨立自活に適するの力を得せしむるのみ、戸主は別に兒女の爲めに財産を備ふるの必要なく、又これを分配することなし。

如何故に佛國にては一部分を除くの外、人口増殖の勢かくの如く微弱なるや、何故

に子供多きは羨む可き事に非ずして却て憫む可き事とせらるゝや、何故に一男一女もしくば只一人の相續人を得るを以て理想とするに至りしや、他なし、佛國にては家族多ければ、両親の負擔重く、其負擔を軽くするには家族の多人數ならんことを豫防するより、外に策なければなり、両親は我子を教養して家族共產の扶助に依頼せんとするも、子供は成年の後に至れば分家するが故に之に依頼するを得ず、左ればとて我子の獨立自活を恃みとせんか、教育の方法其宜しきを失ひたるが故に、此精神を萎縮せしめたるを奈せん、子女の身を立てしむるは全然父母の責任にして、銘々に財産を分配せざれば之を結婚せしむること叶はざる次第なり、左れば子供多ければ多きほど益々多くの身代を造らざる可らず、然かも子女の結婚期十八歳より三十歳に達する間に此準備を爲すを要す。

茲に一人の男あり、妻帯したりとせよ、一年後に一兒を擧ぐるに當て、この人の朝夕忘れんと欲して忘るゝ能はざる所のものは、果して天使の如き幼兒の笑面なるか、否な決して然らず、其幼兒の爲めに持參金の用意こそ此人の寢ても醒ても頭痛に病む所なる可し、一年半若くは二年の後に更に又一子を擧げんか、又一身代を用意

せざる可らず、斯くて二十四五年間に二身代の準備とあつては、迎も力の及ぶ所に非ず、將來費用の増加し來るを豫防せんと覺悟するに至る可し、即ち佛國人が子供の少なからんことを望む所以にして、此習慣を改めざる以上は佛蘭西民族の滅亡到底免る可らず、實に父母は其子女に財産を分配するの義務あるのみならず、分配財産の多少は父子の名譽を輕重するの標準にして、何某は子女に幾何を分與したり、何某は幾何を讓受けたりと、其名譽に關する談柄なり、斯る習俗の世の中に處する親の身こそ憐なれ、一方に於ては銘々の子女に成る可く多くの財産を分配せんとし、又一方に於ては成る可く自己の身代を度々の襲撃に逢ふも毀損せざらんことを勉めざる可らず、統計の證明する所に依れば、此習俗が人爲的避妊法を誘起せしめたるや疑ふ可らず、上流社會即ち細心將來を慮り、名譽に掛けて子女の爲めに多分の持參金を用意せんと欲するものは、子を持つこと少なきものにして、餘り將來を慮らざる労働社會の者は子を擧ぐること多し、蓋し労働社會の子女は自ら成長し自ら食ふが故に、父母の負擔重からざればなり、例へば労働者の多きノール縣の工業地に於ては、出産兒の數は常に著しく死亡數に超過し、死亡三萬五千八十

九人に對し、出産五萬千九百九十七人の割合なり、然るに富裕なる農業地方に於ては死亡の割合著しく多く、ノールに於ては出生六千八百四十二に對して死亡八千二百二十八、チアリスに於ては八千八百五十一に對して九千六十八にして、チルンに於ては六千八百五十一に對して八千五百三十四の割合なり、左れば佛國に於ては、概して後日を慮らざる不注意無能者の増加に依て出産兒の減少を防止するものと云ふも可なり、斯る事情は佛國の將來に如何なる結果を生ず可きか、佛國の家族を悩ます此状態は、前に列擧したる出産兒數減退の副因を説明して餘りある可し、第一に成る可く兒女の數の少なからんことを望むは、畢竟多くの子女に夫々相應の持參金を用意するは到底父母の堪ふる所に非ざるが故なり、箇様なる社會に於ては結婚は人生の吉事に非ずして、寧ろ一大厄難にこそあれば、親たる者は多くの兒女を擧ぐることを斷念し、其責任の歸する所を一二兒の始末に止めて自ら出來得る限りの快樂を貪らんとするに至るなり、子なき夫妻、或は只一二の子を持つて夫婦は我儘なる獨身者と略ぼ相類するものにして、多くの子供を養育する父母の如く、艱難辛苦を敢てするの氣慨なきものなり、要するに佛國の社會に於て多くの子

供を持たば父母を窮厄に陥らしむる結果を生じ、子供の少なきものは安樂愉快に其生を送ることを得るなり。

更に兒童に關して觀察すれば、内に於ても外に於ても、自力に依頼するよりも寧ろ父母の分配金を當てにして、獨立自活の道を求むるの心なく、只管官途に入らんとを是れ勉む、是に於てか潮の如く寄せ來る獵官者を制止せんが爲めに、益々官吏登用試験を困難にすれども、其候補者はいよく多く、何れも無理に及第せんとして漫に諸種の智識を詰め込む、即ち注入教育の行はるゝ所以なり。

以上記したる所に依て、論者は前に枚擧したる諸種の原因は一層大なる唯一の主因より發するものなるを見る可し、而して其主因とは、佛國の社會が其家族に負擔せしむる重荷是れなり。

其五

佛國出産兒の減少は果して凶か吉か、經世家の説この點に於て一致せず、モリス、ブロッグ氏は「時論雜誌」及び「世界の評論」に寄書して論じて曰く、一國人口の増加は必然の結果として貧困を招致するが故に衰弱の原因なりと、ド、モラナリ氏も亦氏

が管理する經濟雜誌に於て同様の結論を掲げたり、然れども事實は果して此結論を證明するや否や、我輩は出産兒の少なきが爲めに佛國が如何なる利益を受けたるかを發見するに苦むなり、若しも佛國を圍繞するに萬里の長城を以てして、一切外國人の侵入を防ぎたらんには、人口の稀少なるが爲めに一層の安樂を得たるならん、何となれば人口減少すれば銘々の仕事を増し、又自然の富源の配當を増す可ければなり、然れども事實は之に反して、佛國人口の不足は間斷なく外國移民の襲來を促がし、伊、獨、西、瑞諸國に餘れる人口の年々この國に溢れ來るもの多し、千八百五十一年には佛蘭西在住の外國人は三十七萬九千人に過ぎざりしに、千八百六十二年には四十九萬九千人となり、千八百七十二年には七十九萬九千人となり、千八百七十六年には八十萬一千人、千八百八十一年には百萬千百人となり、即ち佛人七十三人に對して外國人一人の割合となれり、佛國は實に外國移民の最も多き所に於て外國への移民最も少なき國なり。

人口の減少を喜ぶ論者とても、以上の事實を知らざるに非ざれども、啻に之を警戒せざるのみか、却て之を喜び、雲霞の如く寄せ來る諸外國の勞働者は、之を教育する

が爲めに佛國は一錢をも費さざれば、此輩の來住するは佛蘭西の利益なりと揚言せり、其一例として茲にド・モラナリ氏の説を掲げんに、曰く、佛蘭西人口の不足を補はんとして來住する百萬の労働者を輸入する代りに、之を佛國にて教養せば如何、二十歳の壯年百萬人を得んには百三十萬の小兒を養育せざる可らず、而して約百萬の小兒を丁年迄教養するには三十五億法の費用を要す可し、左すれば佛國は此有用の労働者を自ら養成せずして外より輸入するが爲めに、少くとも三十五億法の費用を節する譯なり、是れ豈に公私の爲めに莫大の利益に非ずや、若しも隣邦諸國より百萬頭の牛羊を無代價にて寄贈せられ、我缺乏を補足するを得ば、佛國は白耳義瑞西等にて之を飼育するに費したるだけの費用を省き得たるものなること明白に非ずやと。

此説如何にも尤もなれども、人は牛羊に非ざることを記憶せざる可らず、果して人は牛羊に非ずとせば其結果如何、他なし、佛國の兒童は家族多き家庭の兒童の如く、強健なる訓練を受けず、幼少の頃より父母の分配金又は妻女の持參金を勘定以外に置いて必ず自勞自活す可きものなりとの觀念を涵養せられざる尙ほ其上に、成

功の秘訣は敢爲活潑に在りとの趣意を訓戒せられざるが故に、丁年に達して未だ一人前の人と爲る能はず、至る所、大家族の家庭に寢食して、強健なる訓練を経たる民族と競争して、醜くも失敗を取るなり、我商工業者が自國人を棄て、獨逸、瑞典の番頭を雇ひ、白耳義、伊太利の職人を聘するは之が爲めなり、是等の番頭職工は佛人よりも一層從順にして、精勵なる上に給金を貪らず、佛國職人の不足とする賃錢を得て、其中より貯蓄するの常なり、思ふに、是等の外國人來らざれば、佛國生産品の價格は今日に倍し、其商工業をして益々外國との競争に堪へざらしむるならん、我輩は我實業の爲めに彼の健全なる外來の労働者に向て感謝せざる可らず、然れども記憶せよ、彼等の佛國に來つて其商工業を助くるは、即ち我佛國民の氣力を損し、道徳を腐敗せしむると共に、國の膨脹力を殺滅し、國威國權を犠牲にするものなることを。

第二章 佛國の教育制度は財界の基礎を危ふす

其一

人口を開けば即ち曰く、今の世は金の世の中なりと、或者は此語を聞いて喜び、或者

は悲しむ、今や財界の企業投機は實に前古未曾有の盛況を呈す、然れども是れ決して偶然の事に非ず、世に何事にも偶然に出現するものなければなり、金錢の勢力をして今日の如く偉大ならしめたるものは石炭の發明ならんか、石炭は實に一家の資力を以て企及す可らざる無数の大事業を勃興せしめたり、是等の事業は何れも株式組織に依て經營せらるゝ其中に就て、採炭業は第一位を占む、蓋し石炭なるものは金屬と異なり、大なる層を爲して存在し、何程にても採掘するを得るが故に、多數の労働者を使役する大事業と爲りしなり、且つ石炭は總ての工業に動力を與ふるものにして、隨て其需用も殆んど無限なるが故に、採炭業は大仕掛にするを便とす、即ち大資本を要する所以にして、株式に依るの外、この資金を得るの道なし。石炭は礦山業に一新事業を加ふると共に、又全般の工業を變革せしめたり、小工場は變じて大工場となりしのみならず、其原動力は工業の生産額を増加して、恰も労働者の數を十倍否な百倍したると同様の結果を生じたる尙ほ其上に、蒸氣船の出現を促がして、交通機關を一新したり、而して、是等の事業は亦皆大資本を要するものにして、株式會社に依て經營せらるゝなり、其他瓦斯の製造と云ひ、電氣の應用

と云ひ、スエズ運河の開鑿と云ひ、何れも石炭に依て促されたる株式會社の業務ならざるはなし、然かのみならず、石炭の勢力は各國政府をして公益の爲めに大事業を企つるに至らしめたり、然るに國庫の收入は是等の事業を營むに足らざるが故に、公債募集に依頼して前記株式會社の何れよりも更に洪大なる一種の株式會社を現出したり。

金錢が前代未聞の勢力を有するに至りしは右の事情に依るものにして、何人にて之を以て株券を買入れ置く時は何等の勞もなくして自ら相應の歳入を得べし、昔は利子の收入に依て衣食する者は素封家のみなりしに、今は零碎の金錢を積立て、株券類を買て其配當に衣食するもの少なからず。

以上は皆石炭より生じたる結果なり、今や吾人は天然力より發現する自然の變遷中にあるものにして、之に抵抗するは到底人力の及ぶ所に非ず、萬一にも敢て抵抗を企るものあらば只狂愚と評す可きのみ。

尙ほ世人の嗜好が株券類に傾く理由を略言すれば、第一、此動産は分割し易きと共に、得るに容易にして、中産の人も之を手に入るゝを得べし、斯くて一旦之を所持す

れば、何等の責任もなく、又何等の勞力をも加へずして、定期に相當の收入を得ること、農工商業が何時何程の利益を生ずるや、殆んど豫期す可らざるの比に非ざる其上に、特別配當金の望もなきに非ず、即ち株券の所有者は寢て居て金を儲くるものにして、何人か此美味に誘はれざるものあらんや、然かのみならず、會社の株主中には是迄巨利を博したる者多く、中にもスエズ運河及び巴里瓦斯會社の株主の如き僅かの資を投じて思ひ懸なき莫大の利益を得たれば、世人は忽ち株券熱に浮かされ、一方に於て失敗破産したる幾多の會社あるを忘れて、只管利益を得たる樽のみを吹聴し、我もくゝと此種の株券を買收せんとする熱心は、恰も渴者の水を求むるが如し、特に株式取引所の株券は賣買の容易なると市價の高低著しきとに依り、稍々投機心ある者は専ら之に投資し、其市價の暴騰を僥倖せんとするも無理ならずと云ふ可し。

此くの如く世人を誘ふて株券に熱中せしめたるが爲めに、世は極端なる拜金宗の世の中となり、金満家は至る所に無冠の王として崇めらるゝに至れり然るに、株券の價は一上一下變化定りなきものにして、常に市場の相場に依て左右せられ、而し

て其市場は又政變の爲めに投機者の爲めに左右せらるゝが故に、財界の浮沈定りなく、倒産する者少なからず、時としては一般經濟界に恐慌を來し、取引所株券の不確實なることは、猶ほ林檎の樹に林檎を生じ、葡萄の蔓に葡萄を生ずる如く、疑ひなき事實なり。

擬て、此取引所株券に固有なる浮沈定りなき性質と、並に株式取引所の世を支配する勢力は到底免る可からざる弊害なるか、是れ何人も知らんと欲する問題ならん、我輩は左に此弊害を避るを得べき事及び、或國々にては現に此弊害を感せざる事を説かんとす。

其二

株式賣買の流行は何處にも同様の結果を生ずるものに非ず、投機の最も盛なる國必しも信用の最も紊亂したる國に非ず、或國にては投機隨分盛なれども、差したる弊害を蒙らざること猶ほ米國の葡萄樹は佛國のものよりも黴菌發生の害に堪ふるが如き事實なきに非ず。

近來、猶太人及び投機家の社會を荼毒する問題に就て痛論したる著述の夥しき、汗

半充棟も留ならず、而して其議論は多く感情に流れ、唯事物の表面のみを見て、徒に實行す可らざる治療法を勸むるに過ぎざるものなれども、而かも世論の喧噪かくの如くなるは、正に佛國社會の惱める病患の如何に重大なるやを示すものと云ふ可し、尤も佛人に限り、他の國民よりも取引所株券に資を投ずること一層熱心なりとは云ふ可らず、英、米、獨、人も此點に付ては佛人と同様なれども、彼等は只貯金の一部を割いて株券を買ふのみ、決して資産を擧て之に投ずることなし、然るに佛人は資本も貯金も全財産を擧て株式に投ずるの常なり、人の話に、佛蘭西は融通金の最も潤澤なる國なりと云ふ、實際の事實なれども、其然る所以は佛人が一般に身代を擧げて、佛語の所謂流通資本と爲すの風あるに由るのみ、決して資産に富むが故に非ず、左ればこそ世界經濟上の出來事は多く巴里を中心として發するなれ。

巴里は敏腕なる經濟家が一攫千金の利を博するの好道場たりとの意味に於て、佛蘭西は實に金融の大市場なれども、斯くて佛國の通貨は土耳其に南米諸共和國に、百川千流流れ去て復た歸らず、彼のスエズの開鑿も、パナマ運河の工事も、重に佛蘭西の資本に依て企てられたるは人の知る所なり、然れども佛人は只その資本を供

したるのみ、決して其事業を掌握するに非ず、見よ、スエズ運河は既に英人の手に歸し、パナマの工事亦將に米人の掌中に入らんとするに非ずや、毎度ながらアングロサクソン人種の敏腕羨むの外なし、佛人は資を投じ、危険を犯して、其收穫は何時も他人に奪ひ去らるゝなり。

果して然りとすれば、佛國は概して株券に資を投ずる國たること明白にして、其然る所以は、佛人が農工商の三大富源を等閑に付し去るが爲めなり。

ルイ十四世が如何に貴族をして其の領地を去て宮廷に奉仕せしむるに熱心なりしやは、今更に繰返すの要なし、斯くて、上流社會は漸次農業との關係を絶て都市に住居することゝ爲りたれば、佛國は實に大地主の其所領地に不在者の最も多き國となれり、隨て彼等は地方領土の利害に關して最も冷淡なる者にして、農業の改良に投ず可き資本は諸種の方面に分散せり、通常なれば、是等の資本は當然商工業に注入さる可き筈なれども、上流社會の偏見なる、商工業を以て自家の地位を辱かしむる賤業と心得るが故に、彼等の爲す所は、只一日も早く財産を造りて一日も早く退隱し、其息子をして所謂上流社會が蔑視せざる所の行路、即ち官途に出でしめん

ことを計るのみ、佛人は概して文官又は武官の一員に備はるを以て無上の名譽と夢想し、文武官たる事は良妻を得、交際社會に歓迎せらる可き唯一の手段として苟も男子たるものは、既に官吏たるか、或は未來の官吏を以て任ずる獵官者ならざるはなし。

而して一旦官吏となりて俸給に有り付き、日常の費用を節して蓄へたる貯金は如何に之を使用するやと云ふに、我地位の威嚴を損ふ者として賤む所の農工商其他の實業上に投ずることなきは勿論なり、否な、彼等は全く實業に不案内なるが故に是等の貯金は株式取引所に向て注がるゝなり、株式取引所は實に資本を自ら運轉する事を欲せざるもの、或は有益に運轉する器量なき人々の餘剰金を吸収するに備強の場所となれり、且つ佛蘭西の家族には兒女の數甚だ少なし、其出産兒の少なきは近き將來に於て佛國の衰運を招くに相違なきも目今の所、多くの兒女を教養するに使用す可き金錢も亦、遊資金となりて取引所に注ぎ込まるゝなり。

前段述べ來りし如く、産を擧げて株式に投資する其結果は、一度株式社會の頓挫恐弊に遭遇すれば、再び恢復す可からざる破滅に陥るを常とす、アングロサクソン

人種の社會に於ても亦然るか如何。

其三

アングロサクソン人の中に於ては、上流社會も將た一般人民も、農業を等閑に付し去ることなし、貴族は廣大なる土地を領して、其領土内に邸宅を構へ、假令自ら所有地の全體を耕作せざるも、少なくとも其一部は必ず自ら耕作するの常なるが故に、彼等は何れも能く農業上の實務に通曉せり、英國の大地主が如何に大金を農業改進の爲めに投ずるか、は佛國地主等の信せざる所なれども、此農業に大金を投ずるの一事は、英國紳士の民間に重きを爲す所以なり、其外、北米に濠州にニュージーランドに移住する英人の爲す所、亦土地開拓に外ならず、實に土地を所有し之を耕作するは、英人の最も名譽とする所にして、萬里の波濤を踰えて天涯地角に殖民事業を企て、着々功を奏する所以は此に存するなり、斯くて英國の青年は年々歳々海外に渡航し、其海外に出でざる者も節約して得たる金錢は多く農事に利用するが故に、株式に投ずる資本は極めて僅少なり、然るに佛人の海外に出る者は極めて少なく、其たまく、出る者も、多くは官吏の資格を以て出張するものなるが故に、殖

民事業上害あつて益なきなり。

英國人の敏腕を試む可き事業は單に農業に限らず、商業工業共に上流人士と雖も等しく嗜む所の業務にして、貴族の男子も海外に出でざれば、本國に在て製造家又は其他の實業家として身を立て、毫も之を耻辱とせず、左ればこそ英米兩國に於ては、商工業駁々として進歩するなれ、而して、是等の企業に要する資本は莫大なる可し、然るに其莫大の高に達す可き資本は、佛國にては方向を轉じて皆株式市場に投せらるゝなり。

英人が農工商業に赴く今一つの理由を云へば、英國にては官吏の數は出來得る限り少數に縮少せられ、佛國の如く官僚政治發達して、官吏の猷立仰々しからざるが故に、人々の活動力は自然有用の事業に向て集注せらるゝなり、且つ、是等の業務は法律上佛國に於けるが如く、其子供の間に分配す可き制限なく、英國の戸主は自分の財産に對して全權を有し、勝手に相續人を撰んで、自ら營み來れる實業を永遠に繼承せしむる事を得るなり。

一家の資産を個人の企業に投せんと欲するものは、即ち株式の投機に資産を危う

するものに非ざるの事實は、讀者の既に諒とする所ならん、此美風の行はるゝ社會に於ては、假令ひ株式に手を出だすことあるも、其趣は、恰も保養の爲に伊太利沿岸地方に遊べる旅客が途中試みにモンテカーロ(巴里の近傍に在る賭博の中心)の富籤に數百法を投じたと一般、中れば善し、中らざるも別に痛痒を感ぜざるが如し。D、ルージエー氏の著せし米人の生涯と云へる書に左の記事あり、讀者の一顧を煩はさんとす、特に其第三篇第三章を見よ、曰く、『余は紐育及びポストンに於て、農業その他の實業に投資する多くの資本家に會見せしが、是等の人々は何れも能く其事に通曉するのみならず、十分に資本を監理せんが爲に、成る可く之を分割せざらん事に留意すること、佛國に於ける慣習と相反す、我佛國の金穴が屢々云ふ所の譬喩を借りて之を評すれば、彼等は所持する一切の鶏卵を一個の籠に入るゝ事を躊躇せざるものなり、蓋し、彼等は常に籠を監視し、其底に穴なきを確信すればなり、左れば米國の新聞紙は實業上の記事を以て埋められ、株式相場表の如き之を掲載することなし、然る所以は、米人の多數は相場表を讀んで興味を感ずることなし、若し少しにても餘金あらば、之を以て直に實業上に活用し、株券を抱いて空想を畫く事

を欲せざればなりと。

一四〇

斯る次第なれば、英米に於ては株券の賣買は現金を以てするの例にして、之を買込
れば、何程の巨額にても翌朝仕拂の銀行小切手にて支拂ひ何人も現物を受授して
取引を爲すが故に、途方もなき投機心を自然に抑制して株式賣買を安全ならしむ
左ればこそ一朝株式市場に劇變を生ずるも、英米人は其打撃を蒙むること、我佛國
に於ける如く甚だしきに至らざるなれ、猶太人は何故に佛國に於ては跋扈するに
拘はらず、英米及び濠州等に於ては然らざるか、一切の家産を株券に投せざる所、各
人が自ら自家の資本を自家の業務に運用する所、銘々が自ら其身を保つ法の知
る所に於ては、猶太人は其手腕を用ふるに所なし、譬へば、猶太人は猶ほ植物の如し、
周囲の狀況彼等に適應せざれば、自ら榮ふること能はざるなり。

第三章 英米の教育と生存競争

其一

千八百九十二年の五月、余は英國より二通の案内狀に接したり、其一は英國科學研
究會より送り來りしものにて、同會は其第七十二回を、同年の八月四日より十日迄

エジンボロに於て開會する事となりしなり、案内狀の文面には委員等は貴下來臨
の榮を辱ふし、當市御滞在中來賓として歡待せん事を希望致候、且つ私共は出來得
る限り力を盡くして、貴下の御逗留を愉快ならしめ度、此段貴意を得度候とあり、何
人か此の如き丁重なる案内に應せざるを得んや、其二は、前者と殆んど同時に、エジ
ンボロ夏期學校の創立者ゲッテス教授より發したるものにして、余の同會に臨席
し社會學に關して一座の講話をなさん事を請へるなり、斯くて余は八月二日に愛
す可きエジンボロ市に到着し、其後毎年一回宛、四回迄引續き同地に赴きたり。
夏期學校は英國にて著しく成功したる組織の一なれば、此に其詳細を述べし。
夏期學校とは大學擴張講義の名を以て大學の所在地たると否とを問はず、多くは
夏期休業中最後の一箇月間、夫々便宜の地に一般公衆の爲めに開かる、講習會に
して、其學科には科學もあり、技藝もあり、男女を論せず、何人にも些少の講習料を
拂へば入會することを得るなり、英人中には自ら切磋して其好む所の學藝を進む
るに銳意なるもの甚だ多きが故に、此組織は首尾よく成功せり、英國何れの都會に
於ても其講習會に出席する男女生數百人に達し、米國に於ては數千人に及ぶの常

なり。

一四二

其二

余はエジンボロ市に於て講話を始めたるに、聴講者六七十名を得たるは一驚を喫したる所なり、佛語を以てする講義に此くの如き多數の聴衆を得んとは思ひも寄らぬ所にして、余は何か社會學上或は教育上の參考にもならんかと試に聴衆の種類を取調べたるに、中には數人の大地主あり、出版業者あり、倫敦にて社會學を教授する學校の校長あり、學生あり、學生の中には佛國巴里在學の者もあり、單に學識を増さんと欲するの外餘念なき若き婦人も少なからず、又國民教育及び社會改善の事に熱心なる實業家もあり、諸方の公私學校の男女教員もあり、就中最も多きは男女教員にして、余は其中の一女教員に向ひ、佛國にては教員の職に在る人々が夏期講習會に出席せんなど余の夢にも思はざる所(特に講習料を拂つて)なりと告げしに、其婦人は怪訝に堪へざる顔色にて、休日を此くの如く利用するは、當然の事と思へる者の如くなりき。

夏期講習會の盛なるは、ナッグスフォールド、ケンブリッジ附近に毎年開會したる講習

會の聴講料が常に六七百磅に達したる事實を見ても之を知る可し、而して斯く盛大を致す所以は他なし、英國の人々が進取的にして、自個の値打を高むるに熱心なるが爲めにして、此熱心は英國教育制度の促す所なるは、余の既に前篇に述べたる所なり。

益し、此進取的氣風は農家の内にも見出すことを得べし、余はエジンボロより程遠からぬ農園を訪はんとして、さる停車場に下りし時余に會見せんとして來りし農業家に會へり、其人は服装其他とも宛然立派なる紳士にして、銀行家か外交家か富裕なる都人士とより外は思はれざる風采なり、余は此人に導かれて其居室に行きしに、宅は停車場より約一哩を隔つる農園中に在り、兩側に花木を栽えたる清潔なる通路を通り過ぎて玄關に達すれば、其正面には花園あり、家屋は一見して英國風の住み心地よき居室なるを察するに足る可く、内へ通れば、階上階下絨緞を鋪詰めあり、應接間に通れば、此家の婦人出で來りて余に應對す、其舉動しとやかにして、亦宛然たる貴婦人なり、其可なりに佛語を話せるは、高等教育を受けたる事を證するものと云ふ可し、四方山の談話の種は盡くるときなく、話頭は轉じて諸種の方面に

涉れども、應答に窮するの色なし、嚙て下婢は茶を持來れり、婦人は手際能く之を酌んで余に饗したり、下婢も亦お三どんより俄に客間に登用されたる田舎娘の如く不作法ならず、兎に角に一通りの作法を心得、一種の氣品を備へ、洗濯したての前懸を着し、頭巾をさへ戴きて、恰も貴顯の家に奉仕する者の如し、余の記事此の如く仔細に渡るは、英國にて佳良なる中等社會の生活風を細かに讀者に紹介せんが爲めに、敢て筆に任せて徒らに長談を試みるには非ざるなり。

翻て我佛國農家の状態を見るに、北部地方の農家は愉快なる居室を構へ、常にモーニングコート或はジャケットを着し、其風采富裕なる地主に異ならず、彼等は可なりの教育を受け、中には學士もありて、生計は豊なる者の如し、然れども一般農家の状態は之に比すれば月鼈の相違あり、余は日雇人と撰ぶ所なき、南部及び中部佛蘭西又はブレトン地方の農民を取て比較する事を好まず、寧ろ地味の豊饒を以て知られたるノルマンデーの農家の状態を記さんに、余の屢々往來せし所にして、今尙ほ記憶する一農家は、前段蘇格蘭の農家と同様、凡そ千六七百反歩の耕作に従事して、相應の富を有するは、一人息子に殆んど四萬圓の財産を分配したるにても知

る可し、左れば相應の生計を營み得べきは勿論なるに、毫も然かせず、又其意志もなきが如し、市日に町へ出るには、補綴繕綻、色褪めたる上衣を着する外は常に襦袢に似たる仕事着を着し、其妻も之に似たる風采にて、共用泉水の側に行きて洗濯を爲し、言語應對の野卑なる日雇稼の女に異ならず、居宅内部の有様も主人夫妻の人品と相應じ、寢食共に一の大廣間にて濟ますの例なり、且つ此廣間の床は畑地面より高からず、壁の白垩は見淋らしく剝落し、唯一の家具は二本の柱の上に板を横へたる如き長きテーブルあるのみ、主従共にテーブル懸もなき此テーブルに倚りて食事するを常とす、テーブルの周圍には僅かの腰掛と數脚の貧しき椅子あるのみ、臺所道具も廢水槽も亦みな此室に同居す、余は茲に殊更に見淋らしき特殊の例を引用したるに非ず、是れ實に佛國農民普通の状態なり、世人が之を見て當然の事と爲し、敢て怪まざるは、農家の生活と云へば、不潔不快を意味する者と心得るが故なる可し。

讀者或は、前記英國農家の状態は特殊の例なりと思ふならん、余も亦彼れが使役する耕作夫の住家を訪ぬる迄は、實に然か思ひしなり。

人の知る如く、佛國の耕作夫は假小屋の内に藁の上に寝るか厩舎内に固き寢床に眠るか、然らざれば最も卑陋なる室内に宿泊するを常とす、余は英國に於て、前記の農家が備役する耕作夫の宿舎を一覽せんことを請ひしに直に諾せられて、其農家より一町以内の往還に沿ふて並び立てる六戸の宿舎へと案内せられたり、宿舎の外観は甚だ愉快にして各舎の前面には花園あり、花園中には縦横に清潔なる小徑を通じ、屋後には菜園あり、我輩が恰も其處へ往きし時、服裝其他中等社會の人と覺ぼしき若き婦人が、子守り車を押し來れるに會へり、其子守り車は四輪車にて、佛國にては寧ろ贅澤の部類に屬するものなり、車中の幼兒は丁寧に白衣にて纏はれたり、余の同僚にて同行せしポアンサード氏は之を見て、都會より散歩に來りし婦人なるやと問ひしが、何を圖らん、此婦人こそ我輩を案内せし農家の使役する耕作夫の妻ならんとは、案内の主人は此婦人に向て、來賓の爲めに其居室を一覽せしめん事を請ひしに、婦人は快く承諾したり、扱其家に至れば、玄関の戸の内外に椰子の織緯にて製したる靴拭あり、戸を排して内に入れば、玄関の間あり、此玄関の間あるは住居をして愉快便利ならしむるものにして、同時に防寒の用を爲す、此玄関の間の

右に一室あり、物を洗ふ所にして、佛國農家にては知らざる所、厨房兼帶の食堂をして一層清潔ならしむるに便なり、此食堂は二間半四方の巨室にして、萬端の器具備はらざるなし、半ば壁の中に隠れたる火爐と云ひ、其他の銅器鐵器等能く研き上げられて、燦然眩き許りなり、一見手入れの行届けるを證す可し、總じて英國の家婦は料理よりも掃除に長じ、竈と云ひ階段と云ひ、不斷研き上げて之を清潔にす、一日中立居せる時間よりも、跪く時間多き者の如し(西洋室内にては料理は立ながら拭ひ研き掃除は跪きながらする者と知るべし)、尙ほ英國にては農民の宅にても、如何に室内裝飾の事に注意するやを詳説せんに、余の一見したる前記耕作夫の食堂に於てすら、最新流行の家具器具等安排よく整列せられ、寢室には光輝燦然たる眞鍮の玉を以て飾りたる鐵製の寢臺を備ふ、其他箆筒あり、睡椅子あり、化粧臺あり、洗面臺あり、洗面臺の上には各種の小瓶紅白の箱を排列せり、如何に一家を樂天地となさんとするに留意するやを察す可し、家庭を愉快ならしめんとする此希望は、他の勞働社會にも一般に行はるゝなり、余の訪ねたる農園の近傍に石炭礦あり、此炭田に働ける礦夫の家々に於ても、小さき花園を設け階段を研ぎ上げ、美しき窓懸を備付けたる杯、其風情前段耕作夫の家と

大同小異なりしが、之に反して、其近傍の町筋に當り、同じく労働者の住める家屋にして、内外共不潔極まる者あり、其家の小兒等が襪を纏ひ、跣足にて外に遊べる有様前記の談とは正反對にして、暫くは怪訝に堪へざりしが、炭田の持主は説明して曰く「彼處に住めるは衛生快樂等の何物たるを解せざる愛爾蘭の労働者なり、余は彼等をして最も古き家に最も安き家賃にて住ましむるに、彼等は之に満足せり、然るに蘇格蘭の労働者に對しては、新家屋を設けて之に住ましむ。蘇人は出来る丈け之を裝飾し、清潔に保つ例なり」と、案内せる主人も亦蘇、愛、労働者の性癖に付て述べて曰く「余も農事多忙の時、特に收穫の際には愛爾蘭土人を雇ふことあれども、其宿舍は如何様にて苦情なし、彼等は宿舍の如何に關しては全く無頓着なり」と。是に於て自營主義のアングロ、サクソン人種と、依頼主義の愛爾蘭人との間に家庭の快樂に關して其思想の全く相反するを見る可し、余は又序に近隣なるベニック町に赴き、職人の家を訪ひしが、其居宅は二階造にして居住者の所有に屬し、屋内にはカーペットを敷詰めたるのみか、眠椅子あり、ピアノあり、一見して家婦が清潔を好み風流に富めるを知る可し、纏て、食堂兼帶の客間に於て、茶菓を振舞はれたるが、麴

包ケイキ、ビスケット、牛酪、トースト等の食品は、大なる方形のテーブル上に排列され、茶器も甚だ美しく二度目に茶を給仕する時は、傍に備へある盤水にて茶碗を濯ぐなど其清潔なる風習は佛國に於て曾て見ざる所なり、質素なる職人さへ其生活の優美なる斯くの如くにして、佛國人の眼には誠に新奇に感せられたり。

余は試に、余輩を案内せる農家に就て、其耕作人に支給する給金の高如何を問ひしに、彼等は月々四十六圓内外を給せられ、家賃は無料にて、銘々九反歩内外の菜園を貸渡され、外に馬鈴薯、鹽豚等の貯藏食品を與へらるゝの例にして、家婦は戸外に働くこと稀なりと云ふ、左れば前述せる一家の快樂は、單に戸主たる耕作夫自身の懐中より設備せらるゝものにして、清潔にして整頓せる生活は、決して錯亂汚穢の生活より高價なりと云ふ可らず、要は只整理上の巧拙如何にあるのみ、尙ほ茲に一言したきは、英國の労働者は佛國の労働者の如く、貯金に汲々たらず、儲くる所の金は全く消費し、自分の身分を高めんが爲めに、一層有利の職業を得るに熱心なること、是れなり、英人ほど自分の地位を進む可き機會を捕捉するに銳意なるものなし、之が爲めには勇往猛進全力を盡すの例なり、是れ英人種が續々海外に移住する所以

にして不時の變に備ふるには、保險に依頼するが故に如何なる場合に於ても妻子遺族をして路頭に迷はしむることなし、即ち英米二國に於て保險業の盛なる所以にして、此くの如き社會の組織は、個人をして進取的に發達せしむること必然なり、左ればこそ、其國民は下層の労働者に至るまで歐洲大陸の國民よりも自重心に富み、威嚴を備へ、優等なる生活を營むなれ、一言に評すれば、何人にも英國の労働者に接すれば、其都鄙何れに住む者を論せず、一見して内外共に紳士らしき容儀あるに感ずるならん、彼等は實に初段の地位にある紳士なり、少なくとも紳士の風采あり、汲々として節儉貯蓄するよりも、裕かに生活せんことを深く心懸くるものゝ如し。

之に反して、我佛國人の能事とする所は節儉貯蓄のみにして、英人の潔しとせざる地位に安んじ、官吏も教員も將た番頭職人も、英國に於けるよりも薄給にして、然かも其中より汲々として貯蓄を爲す、然るに英人は成る可く愉快なる生活を主眼として、能く金錢を使用し、剩餘あれば自分の親しく監督する事業に利用するを常とす。

佛人の見淋らしき生活法、節儉の習慣は、終生其身を離るゝことなし、習慣の力は甚だ強くして、相應の身代を得るも猶ほ且つ些少の快樂に安んずるは前にも述べたるノルマンデー地方の富裕なる農家が憫れなる生活を見て知る可し、佛國下等社會の人と雖も、中には勤儉貯蓄に依て財産家となるものなきに非ざれども、彼等は到底潤澤なる家計の快味を解せず、社會に首を擧ぐることも能はざるなり。

其三

余は或日エジンボロ市の郊外に住する家族に招かれたれば、講話の歸途馬車を驅て之に赴きたり、此家人は余等の發見せる、社會學購讀者の一人なれば、我、社會學の英人に及ばず感化の如何を判斷するにも無上の好機會なりと思ひ、殊更に喜んで其招に應じたるなり、邸宅の構へは壯麗にして、家族は若き夫妻の外に、慥か三人の子供ありしと覺ゆ、此家族は市より四哩許を隔つる田舎に年中住居する由、單に此家族に限らず、途中にても年中住居する多くの邸宅を見受けしが、此くの如く一年を通して(冬期中すらも)田舎住ひを爲すは、即ち英人生涯の特質なり、途中余の面會せし或る若き婦人も云へり、我が夫はエジンボロ市に職業を有すれども、我等は此

郊外の地に住むを好み、田舎生活は市街生活よりも一層獨立にして快樂なりと、此獨立と快樂の二語は實に英人處世の理想にして、此理想を常に胸中に畫くが故に親族を離れ僅かの知己と共に至る所に家郷を造る事を得るなり、而して至る所に家郷を造るの技倆あるは、又實に勢力強大なる人種たる所以なり。

余は前記の家庭に於て、初對面の客とは云へ余の理想は夙に知られたる知己として、厚く款待されしが茲に余は隔意なく英人の社會學を學ぶ目的如何を觀察するを得たり、畢竟英人は自身が躬行實踐上の參考に資せんとして斯學を研究するものにして、佛人が社會を指導す可き合理的方策を發見せんとして之を講究するとは、全く其趣を異にせり、而して此二種の傾向こそ即ち彼我二國民の特徴を代表する者なれ、要するに、彼等は實地應用に傾き、我等は一般の理論に耽る者と云ふも可なり、余の訪ねたる夫妻の社會學を學ぶも亦實に躬行上の定規を求めんとするに外ならず、現に此家族は廣大なる地所を所有し、今は他人に貸付けあれども一年後貸付期限満期となれる曉には、更に契約を繼續する事なく、自ら之を整理せんとして其用意に忙はしく、主人は只書籍上農業の理論を取調ぶるのみならず、日々近傍

の農園に出で、將來の職分に對して實習中なりと云へり、英國にては多くの歲月を都會に送れる商人にても猶ほ能く農業生活に通曉する其一例を擧げんに、余の同伴し來れる友人ベラーシユ氏の招かれたる農家の如きは、久しく銀行支店の支配人なりしが、其銀行の閉業したる以後、地所を借りて農業に轉じたりと云ふ、佛國に於て此くの如き類例は幾ど稀なり。

英人が農業に心を傾くるは幼兒の頃より概して半農流義の生活を營むに由來するものならん、即ち自營主義の家庭に生れたる兒童は、夙に周圍の人に付て學ぶよりも寧ろ物に就て學ぶこと多く、朝夕天然に接して、自然に田舎住の趣味を味ひ、自ら花木を植へ野菜を作り家禽を飼ふ杯、佛蘭西に於ては其道の者の外は心得なき事迄も家庭に於て生長する間に、知らず識らず會得することを得るなり。

社會學研究の目的を以て昨夏米國を視察したる友人ピューロー氏の説に據れば、親しく天然に接して農業に對する觀念を助長せしむる事は米國都鄙の學校に於ても普く行はるゝ所なりと云ふ、動植物學は佛國よりも米國に於て重んぜられ、其研究法は全く實際的にして、教師は生徒に對して次の課業には何の花、何の枝等を持

來れと命じ、生徒をして専ら生物に對して生きてる觀念を得せしむる事に注意する者の如し、生徒が實物を持來りし時は、教師は何處に此植物を摘みたりや、其地味は如何に、其全體の外形は如何に、又其成長の模様は如何等を質問すと云ふ、斯くありてこそ教師の説明は効力あり、生徒の受くる印象は磨滅せざるものなれ。

然れども、以上の如き教育法は兒女の家庭が田舎にあるか、若しくは田舎に近き所に在るに非ずんば、園圃の設備手近になきが故に到底實行し難し、然るに英人が田舎住りを好むは、前にも述べたる如くにして、テイ氏の説にも、英人の家庭にては、客間の談話さへ農業の問題多く、肥料培養法、接樹法等に就て仔細に相語り、列座の貴婦人さへ是等の談話に興味を感ずと云へり。

此くの如き社會に於ては、余が郊外に訪ねし一家の婦人の如く、良人と共に心を協せて農業に轉せんと、用意をさく／＼怠りなきも敢へて怪むに足らざるなり、婦人も余に語りて徐ろに熟考したる上、良人の舉を協賛する事に決心したりと云へり、此くの如き婦人は萬一、良人を鼓舞獎勵するの必要あらんか、必ず之を爲す可し、即ち婦人が男子に對して偉大なる力を添ふるものなり、然るに我佛國の婦人は如何、余

の友人中にも地所を所持して適當の借手なきに苦み、自ら之を耕作管理せん事を企つる者尠からざれども、何時も細君より異議を申立て、爲めに其企は水泡に歸するものゝ如し、田舎住りを思ひ、繁々訪問交際の出來ざるを憂ふる點に於て、我婦人は男子よりも甚だしく、農業を目して名譽を損ふ卑賤の業なりと爲す、是れ我農業の振はざる大原因ならん、佛國の男子にして、若しも農業を捨て、文官武官たらんか、良妻否な多分の嫁奩を持來る婦人を得ること容易なりと云ふ、或は僧侶も亦幾分か良妻を得る勢力ありと云ふ、余は僧侶の名譽の爲めに其語の誤れるを信せんと欲す。

彼地滞在中、余は土曜日と日曜日とは講話を爲したることなし、諸官衙、諸商店、工場其他一切の事務は土曜日の十二時より月曜の曉迄休業となればなり、奇辯を弄する者は或は云はん、英人は最も多く働く國民なりと云ふと雖も、土曜日を休業とするを見れば、最も少く働く國民にあらずやと、然れども事の實際を云へば、英人は能く休むが故に又能く働く事を得るなり、換言すれば、英人は長き休を得んが爲めに、短き間に多くの仕事をなすに外ならざるなり。

現に倫敦市中毎朝九時以前に店を開く商店稀にして、夕方店を閉づるも亦巴里市中の商店よりも甚だ早く、官衙其他の事務所皆然らざるはなし、概して英人の執務時間は佛人よりも餘程短し、是れ實業家の多くが、遙に市内目抜の場所を遠ざかりたる郊外の地に居を卜して通勤するを得る所以なり、單に倫敦のみならず、エジンボロ其他の都會に於ても、商業家の商業市場に居住する者は甚だ稀なり、然るに佛國の商人は之に異なり、商店の裏又は其二階に居住するの例なるが故に、毎日早く店を開きて遅く閉ぢ、多くは日曜日にも營業し、土曜日に營業せざる者は皆無と云ふて可なり、一見佛人は英人よりも能く働く者の如くなれども、時間の多少よりも仕事の多少を勘定すれば、英人は佛人より餘計の仕事を爲すは事實の證明する所なり、例へば中食を爲すにも、英人は時間を費すこと甚だ少なく、事務所に立ちながら之を濟ますこと多く、爲めに營業を中絶することなし、

余は或土曜日の朝某炭田を縦覽し、其處の監督人の從弟と相知るに至れり、此青年はニュージラランドに於て牧羊業に従事し、隔年に故郷に歸りて、二ヶ月許り滞在するを例とするものなるが、彼はニュージラランドの生涯を喜び、永住の目的なりと云ふ、

余は其職業を撰びし所以を尋ねしに、躊躇せず答へて曰く、『**生きたる生涯なれば、なり、独立的なればなり、**』と、獨立の二字は實に英人の一生を奮勵せしむる指導者にして、何れの方面より觀察するも、常に此決論に達するなり、余は次に、新開國に於て成功する最良法は如何と問ひしに、『**最良法とは他なし、牧童として最下層の仕事より始むるに在り**』と答へたり、彼れ自身も名族の身を以て、實に此最下層の仕事より始めたるものにして、英人の眼中、收支相償はざることあらざる限りは、馬鹿らしき賤業と云ふものなし、牧童の業決して收支相償はざるものに非ず、否な、牧畜の道に精通せんには牧童より始めざる可らず、左ればこそ、此青年は甘んじて着々段階を踏み、修業を積みたるものならん、牧童の如き役に服するに際し、最も忍び難きは無學文盲の徒と相伍するに在り、然るに此事に關して、彼の青年は語て曰く、『**人若し紳士を以て己を持せば、如何なる無智の徒と雖も遂には之を敬するに至る可し、我移住民が此種の事業を企つるに當りては、何れも實地經驗を積んで始めて着手するを常とす、若しも始めより資金を投じて牧畜業を企てたらんには、不利の牧場病畜を賣付けらるゝなど徒に姦商の欺く所と爲り、失敗に終らんのみと、佛國の青年果**

して此行路より出立するの勇氣ありや否や甚だ覺束なし、然れども立身の途は此行路に據るの外なし、英人種成功の秘訣亦實に茲にありと知る可し。

其四

余は尙は數日の午後を費やして、郊外處々の邸宅を訪問せしが、是れ等の大地主は多くは郊外の邸宅を本城とし、別に市中にも居宅を構ふる者ありと云ふ、其の邸宅中には古物館博物館の類を設備する者もあれば、公園を有する者もあり、或は形勝の地を占めて城郭を爲せるものも少なからず、然るに、其大地主中には財政紊亂して、將さに所有地を賣り拂はんとする者もなきに非ず、而して此窮迫の地に陥りしものは如何なる部類の者なるやを取調べしに、案の定、何れもセルツ人種より出でたる蘇格蘭の舊貴族なる事を知り得たり、彼等は今日、我佛國の舊名族と同様の運命に遭遇する者の如し、嫡子家督相續法と世襲財産制との恩恵に浴して、今日迄何等の職業を自らすることなく、家門を繼承し來りたれども、今や人爲的恩典の恵に浴するにも拘はらず、斯くは落日の境遇に陥れるなり。

元來、英の貴族は同國に於て自然に發生したる者に非らざること明白なり、自營主義を實行して、終始一貫變ることなき英人種の社會には、決して世襲貴族の存在を容さざるなり、自營主義とは自勞自活家族の扶助なくして身を立つるの義にして、英人は常に二句を以て此主義を鼓舞す、曰く『自立せよ』曰く『生活の爲めに戦へ』是れなり、此主義は長男に家督を譲り、世襲財産を相續せしめて、青年の自立心と生存競争の氣概とを消滅せしむる貴族制度と、氷炭相容れざること勿論なり、英國にして若しも、諾威又は獨逸のサクソニー王國の如く、古來外國との關係なく、全く別天地を爲したらんには、彼地には今日迄世襲貴族なきこと猶ほ米國、濠州、ニュージールランドの如く、純然たる自營主義の社會を爲せるならん、然らば英國今日の世襲貴族は果して、何れより來りしやと云ふに、外國より輸入せられしなり、即ち維理勝王ウィリアム・コンケロアと共に歐洲大陸より來りしなり。

維理勝王の率ゐし軍勢は、如何なる種類の人々より成りしやは歴史に徴しても詳かならざれども、王はノルマンデーより起て、途中至る所に兵を募集し、多くは掠奪分配の名義の下に無賴の徒を集め英國に航して彼地を征服し、地を割いて將士に分與したり、是れぞ即ち英國世襲貴族の濫觴にして、英國世襲貴族の祖先は實に依

離主義の社會より出でたるものなり、即ち維理勝王部下の征服者なるノルマン人種是れなり、斯くて、ノルマン人種は移住民として自營主義のサクソン人種の如く、百年の長計を扶植すること能はざりしも、純然たる依頼主義に基ける世襲貴族制度の地盤を築き、以て今日に至れるなり、其間英人種の特質たる自營主義を蹂躪したるに相違なきも、至大至廣の自營主義は、争でか久しく屈伏す可き、ノルマン人の爲めに壓抑せられて、農耕に使役されたるサクソン人は遂に首を擧げ來りて、王權は漸々縮小せられ、眞實自治の立憲政體を組織したり、是れ實に自營主義の賜なり、對岸の地に於ては、此くの如く自營主義の勝利を博したる其際に、佛國は再び依頼主義の好餌となり、ルイ十四世の下に獨裁政府を戴けり。

然れども、ノルマン人の輸入せし贅物は今尙ほ英國に存在せり、世襲貴族是なり、世襲貴族の權力は猶ほ君主權の如く、殆んど有名無實に歸したれども、貴族院議員の缺員を補充するが如き、二三の特權は尙ほ之を有す、然かも英人が今日迄強ひて此特權を剝奪せんと試みたることなきは、思ふに、貴族院議員の椅子を貴族に譲り置くを以て利益なりと信すればなり、其次第は、自營主義の英人は自然に收益多き職

業を撰び、青年が身を立つるにも、父母の分配金妻女の持參金に依頼せず、自營の途に出でざるを得ざるが故に、是非其實業に従事せざる可からず、否な幼少の時より訓練されたる技能を振はんが爲め、自然に實業に従事せざるを得ざるが故に、己の就任するを欲せざる政治の職責を世襲貴族に譲り、彼等の自惚心を満足せしむるを以て、一舉兩得の方策と信すればなり、而して志操堅實にして、自營の氣象に富みたる英人の事なれば、貴族を戴きながら、少なくとも過去一百有餘年間は甚だしき弊害を蒙りたることなし、是れ亦自營主義の感化と勢力の致す所なり、其感化勢力とは何ぞや。

第一、自營主義の感化は引いて貴族の青年に及び、彼等の中有爲なる二男三男等は文武官等の閑職に戀々たる事なく、活潑なる實業を撰ぶに至れり、而して貴族中後嗣なく家名の斷絶せんとするものある場合には、是等の者來りて其家を相續するが故に、貴族院中にも農工商の實務に通曉したるものなきに非ず、是れ貴族院をして、無爲無能の贅物たらしめざる所以なり、然かのみならず、サクソン系統を造り、自營主義の分子を貴族院に混和したること、亦同院の衰亡を免れたる一原因と云ふ

可し。

第二に、自營主義の勢力は他の方面に於ても功を奏し、此勢力を以て、君主權と共に貴族の權勢を抑制して公民の權利を無視し、個人の自由を妨害する事なからしめたり、自營主義の國民は政治に衣食するを欲せざれども、農工商業等、苟も身を立て家を起さんとする業務に、法律を以て干渉せらるるは其最も忍ぶ能はざる所にして、不法の課税を忌み、平和の侵害を許さず、以て實業の發達に勉めて終始渝るとなし、然るに依頼主義の社會に於ては、男子の理想は官祿を食むに在り、一身一家の爲めに尸位閑職を得て愉安の計をなさんとするに在り、他を亡ぼして自ら榮へんとす、社會の平和を亂すは必然の數なり、我佛國に於て、革命に繼ぐに革命を以てしたるも亦現に南米諸國に於て騒亂の絶ゆるとなきも、全く此理に外ならざるなり。前述の如く、英人は事實上自治政治を實行し、有害なる貴族の特權を奪ひ、彼等をして社會に實權を振ふと能はざらしめたれども、貴族の勢力決して自營主義を毀損せずと云ふ可らず、蓋し自營主義の神髓とする所は、人の價値は自身の魂氣と勤勉とに依て得たる者の外なく、人物の貴賤上下は全く此堅忍不撓なる性質の多少に

依りて定まる者なりと確信するに在り、然るに、世襲貴族の輸入は、此理想に接續するに、人は一身の價値以外に、門閥類族より來る所の價値ありとする依頼主義の觀念を以てせり、此一事は社會組織の根底を動かし、自營主義の爲めに一大汚辱を加へたるものなり。

歐洲大陸の人々は、貴族の英國社會に及ぼしたる前記の弊害を聞くも、悚然として恐るゝことなかる可し、何となれば、大陸の人々は何れも多少依頼主義に感染し、門閥政治を見て當然の事として毫も怪まざればなり、然れども、英國の如き自營主義の根底鞏固なる社會に於ては決して然らず、貴族に對する彼等の所感果して如何は、文豪サカレの美妙に畫きたる所なり、氏はスノプスと云へる書に於て、英人の恍惚として貴族に昏迷せる有様を諷刺したり、スノプスとは萬事貴族に模倣し、貴族の言動を賞賛し、權門に出入し、自己の判斷に依らずして、何事も貴人の説如何に依て進退する一味の人々を云ふなり、サカレの此書を書きしは、千八百四十八年にして、今日よりも貴族の弊甚だしかりし頃なれば、其書の一節に云へることあり、曰く、貴族崇拜何ぞ夫れ此くの如く盛なる、老幼男女の別なく我國民は一同に貴族

の足下に伏拜す、貴族のスノッブスに對する威力亦盛なる哉、スノッブスの繁榮は實に貴族の賜にして、我等は貴族に向て感謝せざる可らずと、斯く冒頭を掲げ來て、氏は千載不滅の名文を以て、あらゆる階級に屬するスノッブスに付て異様の特質を寫し出したる。

スノッブス魂性の普及する一段に於て我佛國の決して英國に劣らざるは我輩の注意を要する所なり、我等佛人も亦皆スノッブスならざるはなし、只その異なる所は、此弱點は、我佛國に於ては社會組織自然の結果なるに英國に於ては外來の附屬物たるに過ぎず、隨て容易に矯正し得べきこと是れなり、現に此矯正の事實は着々現出し、今や英國貴族の威勢は孤城落日復た昔日の比にあらざるは、貴族院の漸く世に尊重されざるの府たらんとする趨勢あるを見て、之を知る可し、今日既に公然貴族院を廢す可しと論ずるものあり、事情かくの如くなれば、貴族院假令ひ憲政機關の附屬物たるも、決して憲法の運用上に差支なきなり。

但し、英國にては將來決して上流社會の廢滅する時なかる可し、自營主義の國民中には此種の社會を發生せしむること必然なり、然れども、彼の國に於て自然に發生

せる上流社會とは、貴族の謂に非ずして、所謂紳士の社會なり、然るに紳士の地位は世襲的に非ずして、一身の價値に依て得らるゝものにして、世人が何某は紳士なり、何某は紳士に非ずと云ふ、其所謂紳士なる者の資格は如何と云ふに、一言以て定義を下し難けれども、品性と徳義との合體を意味し、英語の所謂體面を全ふする者と謂て可ならんか。

農工商何れの社會にも紳士なる者あれども、世人は決して此名譽の稱目を威嚴を全ふせざる門閥の士に與ふることなし、斯くて貴族はノルマン人種中の上流社會にして、紳士は實にサキソン人種中の上流社會なり。

猶ほ英人をして貴族崇拜の魂性より遠ざからしむるに有力なる原因あり、佛國に於ては、人の社會に有する所の地位は、職業の如何に依て定まること、恰も幾多の階級に分割されたる印度の社會に於けるが如く、何の職業は貴し、何の職業は賤しと心得るが故に、交際社會の人士にして、殖民事業杯に心を傾くるものなし、此くの如くにして、或種の業務に熱中し、或種の業務を疎んずるが故に、益々人と人との間に限界を設け、門閥崇拜の顯象を逞うせしむるに至るなり、然るに英人種の社會に於

ては人と人との間に限界を存するとなし、少なくとも此限界線は次第に消滅に歸しつゝあり、殊に米國の如き、由來少しもノルマン人種の感化を蒙らずして、自營制度の榮へたる所に於ては、全然職業に貴賤の別なく、人の價値は一に各自の耐忍不屈の氣質如何に依て定まるのみ、英國も亦此針路に開展し來れり、是れ實に石炭の發明が、工業製造運輸交通等の如き平民的事業に長足の進歩を促がし、一般實業の發達を大に鼓舞したる結果に外ならざるなり、此時勢の變化に際會して、依頼主義の社會は周章狼狽したる其反對に、自營主義の社會は奮勵一番、自ら此新時勢に適應せんとして勇往猛進したり。

要するに、英國はノルマン征服者の輸入し來れる制度慣習等の爲めに、久しく其固有の氣象を抑壓せられたれども、今や再び其本體に立返り、其本質の導く所に向て進まんとす、何物か能く此自然の發達を妨止するを得ん、讀者若し此趨勢の歸する所如何を知らんと欲せば、眼を放て英人種固有の氣象を圓滿に發揚せる米國社會を観察せよ、個人は各自冒險心に富み、不屈不撓の意氣を備へ、能く廣大無邊の原野を開拓し、國運隆盛其勢旭日の如し、多幸なる哉、世襲貴族分子の絶無なる國民。

第四章 英人種の成功と其家庭

社會改造を企つる者の第一に途方に暮るゝ所は、如何にして改造終極の目的を知り、且つ其目的に達す可き道を發見する事を得べきやに在り、目的を知て之に達する道を知らざれば、其目的を知りたる甲斐なきのみか、或は思懸なき終極に達することある可し、故に余は茲に社會改善の階梯として、那邊に立脚點を定めて可なるやを明かにし以て正しき道に讀者を導かんと欲す。

余は英國滯在中、多くは各種社會の發達に關する重大なる問題に付て思考を費せしが、此種の研究には英國こそ實に好都合の國なるを感じたり、何となれば世界中英國程、自營主義と依頼主義とに基く所の諸顯象の兩々相對峙して現出する所なければなり、米國も亦此點に於て参考に資する所なきに非ざれども、英國程に觀察に便ならず、蓋し、米國社會の特質は種々あれども、同國へは舊世界より諸種の分子輸入されたるが故に、諸種の特質に付て一々其根源を判別すること至難なる其上に、是等の特質は、彼地に於て新しき周邊の状態に接して今や變遷の眞最中なればなり、然るに、英國の社會は過渡の時代を経て、セルツ人種の依頼主義と、アングロ

サキソン人種の自營主義とは、夫々社會の體面上に顯はれ、觀察上至極便利なり、換言すれば、大英國に於ては、愛爾蘭又は西北部蘇格蘭のセルツ民族より英蘭イギリスの中部及び南方のサキソンに至る迄各種社會の好標本を一々視察するを得るが故に、是等の種類を分類して、依頼主義なるセルツ人の社會より、自營主義なるサキソン人の社會に進化する迄の段階を識別するには、誠に好箇の研究場なり。

大英國は猶ほ大仕掛の蒸溜罐の如く、其蒸溜の作用に依て、セルツの分子は間斷なくサキソン化しつゝあり、蓋し、強者が弱者を同化するは自然の法則なればなり、然らば自營主義に進化する諸顯象の真相を窺はんには、英國を見るに若くはなしとして、扱、在英國のセルツ民族は人間生活の如何なる點に於て始めてサキソン民族の感化を受くるや、又如何なる顯象ありて、セルツ民族が次第に進化して、既にセルツにも非らず、又サキソンにも非ざる一種の社會を作りしことを證明するや、我輩は社會進化の發端は、家庭の生活に於て認識する事を得べしと云ふに躊躇せざるものなり。

前章にも述べたる如く、エジンボロ市の郊外に於て、農園と炭田とを訪ねたる際、始

めて以上の決論に思ひ當れり、余は既に甚だ清潔に住居する東南地方蘇格蘭人の労働者と、甚だ不潔の生活に甘んずる愛蘭土人セルツ民族の労働者とを比較せしが、此正反對の事實こそ、家庭の改善は正に社會進歩の發端として重大なることを證明するものなり、其東南部蘇格蘭の民族は、今尙ほ幾分か本來の依頼主義を保有するに相違なからんも、彼等が漸次此主義より遠ざかりて、純然たる愛蘭土の民族、又は西北部蘇格蘭の民族より自ら異なる所あるは、其愉快なる家庭を好むの一事を見て明白なり、彼等は依頼主義の社會より、自營的(或は個人的)社會に進化せんとして、其初段階に進みたるものなり、左れば、自營的社會に進化する發端は、家庭の改善に在ること明なりと云ふ可し。

其一

家庭の狀態如何は、社會發達上重大なるものたる事は、是迄多くの經濟家社會學者慈善家の唱道せし所にして、就中ラブレ氏は明に此事實を認識し、豊富なる事實を掲げて説明せしことあり。

一家の鞏固、家督權及び家督の全體讓渡(家産を多くの男女子に分配せざる事)は個人、家族及社會の改良

上最も必要の要件なりとは、屢々論者の説く所なり、成程此三點は至要の改善を意味し、且つ社會の進歩を證明する顯象ならんれども、依頼主義の社會より、自營主義の社會へ進化する上に於て、何等の効驗なき其證據は、以上の三點は必ずしも自營的社會の專有物に非ざるのみか、仔細に吟味すれば、却て依頼主義の社會に於て、一層完備するを見て之を知る可し。

例へば、露西亞、ブルガリア、セルヴィアの農民の如き、殆んど歴史以前の太古より子々孫々一家を繼承し、其家の鞏固なる他に多く類例を見ず、又佛國に於ても、ナヴィヨン、シヴェヌ、ブリタニー、アルプス、ピレネー地方は、一家の最も鞏固なると同時に、又最も依頼主義の舊態を保守する地方なり、而して家督全體相續の完全に行はれて、家督權の鞏固なる亦同地方の社會もしくは同種類の社會に及ぶ者なし。

茲に一家と云ふ意義に於て、全く相異なれる二様の觀念あることを記せざる可らず、即ち依頼主義の社會に於て、所謂一家とは有形物を意味し、自營的社會の民族中に於て、一家とは無形物を意味す、此二様の意義を區別し置かざれば、一家生活の狀態に於て、亦二様の區別ある事を洞察すること能はざる可し、換言すれば、依頼主義

の社會に於て、一家とは住宅土地等の財産及び家族類族等を意味するなり、此社會に於ては、人々財産又は家長に依頼して、自己に依頼せざるが故に、所と人とに戀着し、一家とは所と人との總稱となれり。

佛國ナヴィヨンとピレネー地方との諺に「家は煙を立てねばならぬ」と云ふ、實に依頼主義の社會に於ては、家の煙を立て行かんが爲めには、如何なる犠牲をも辭せざるなり、之が爲めに、男子は當然讓受く可き家産の減少を承諾し、伯父叔母は相續人たる甥姪をして一家の煙を立て行かしめんが爲めに、一生孤獨の生活を忌むことなし、是れぞ即ち彼等が遠く家郷を去て天下至る所青山ありと思惟すること能はざる所以なり、彼等が子々孫々祖先傳來の家を傳へんと欲して、之に戀着する其有様は、譬へば、籐葛の壁に依て扶助せらるゝと一般なり。

然るに先祖傳來の家督を相續して、家名の斷絶する事なく、最も固定せる家々より成れる社會の家庭に於て、何等の愉快なく、殺風景極まるは著しき事實にして、我輩の須らく注意す可き所なり。

試みに露西亞、ブルガリア、アヴェアイオン、ピレニー又はブレトンの農家を訪問せよ、主人は誇顔に、我家は幾十代幾百代繼續せりなど話す可し、然れども、一たび其家内の様子を窺へば、恰も假小屋住ひも同様にして、薄暗く不潔なる臺所の外、只一室あるのみなるに一驚を喫するならん、甚だしきは只一室のみにて、全家族が起居、寢食、料理等を辨じ、或場合には、居室は厩と相隣し、一重の板壁にて其間を區劃するに過ぎざるが故に、奇異なる惡臭漏れ來て、片時も坐に堪へ難きを感じることある可し、彼等は只家を愛して、一家内の愉快を求むるには、全く無頓着なり、其家を愛するは總ての無理を忍んで、徒に家名の長久を計るに過ぎず、某は何々家にして何族と血縁ありなど得意がるも、亦家の爲めに家を愛するに非ずして、家名の爲めに家を愛する證據なり、家に一竿の箆筒を所持するも、其抽出の内には古衣襪襪充滿するのみ、此家具は即ち家の品位を郷黨隣人に誇示せんが爲めに備ふるものなり、要するに、依頼主義社會の民族は、一家内、眞實の愉快よりも外觀の事に意を用ひ、一家と自己の爲めに生活せずして、一家以外他人の爲めに生活する者と謂ふも可なり。

此傾向は大都會の住民中にも識認することを得べし、但し都會の住宅は代々子孫に傳はりたる者に非らざること勿論なり、巴里市街を通行すれば、五六階の大層高樓軒を並べて雲井に聳ゆ、一見巴里市民は家の爲めに萬事を犠牲にする者の如くなれども、其内に入て見れば、五階の家には五家族同居し、六階の家には六家族同するのみか、時としては家の階數よりも之に住居する家族の多きことあり、試に其中の幾階かに住居する一家族を訪問せよ、第一に見る所は客間と食堂ならん、此二間は多くは市街の方に面し、概して廣く且つ能く裝飾せらる、次に奥に通れば、隘陋なる二三の寢室を見る可し、是等の室は光線も入らず、風も通らぬ井戸の如き裏庭に臨みて、殺風景極まるを常とす、左れば都民も農民も労働者も、一家内の快樂と云ふ事に付ては、甚だ無頓着なるを見る可し。

之に反し、自營主義に由て發達したる社會に於ては、一家内の快樂は人生最大目的の一となれり、此社會に於ては、人々家族親戚等に依頼せず、只獨り自己に依頼するのみにして、其家を立るは自己の爲めなり、外に對して頓着するよりも、寧ろ家内の爲めに費用を惜まざるを常とす、此種の社會に於ては、人々我家を以て身の獨立を衛る可き城廓と心得居るは、我家を呼んでホーム(暫く家庭と譯す過)と云ふにても

想見せらる可し、ホームは我家と云ふ意味よりも、一層深き意味を含み、單に有形の家を指さずして、寧ろ一家の調和即ち英人種の家庭に特有なる一家團圓の快樂を指すなり、佛語にても適切な譯語なし。

我家に對する彼我觀念の相違こそ、即ち霄壤も甍ならざる彼我二様の社會を生み出したる根源にして、左の二項は自然の結果なり。

一、自營主義の社會に於ける住宅は、依・頼・主・義・の・社・會・に・於・け・る・よ・り・も・規・模・狭・小・な・り。

自營的社會に於ける住宅とは、小さき田舎住ひの家を指すものにして、一と通り必要の間敷を備へ、兼ねて家計に相應する大小の花園をも有するものなり、此の種の住宅は、英國の田舎に於ては至る所に散在し、殊に都會の近傍郊外の地に稠密なり、尙ほ市街地にても、一家族毎に一家を構ふるを例とす、此設備は英人種家庭の理想を實現する者にして、英國都會の面積、人口の割合より廣大なるは全く之が爲めなり。

之に反して、依・頼・主・義・の・社・會・に・於・て・は、數家族一家に同居するの例なるが故に、居室頗る廣大なり、只都會に於て然るのみならず、田舎に於ても、シャトーとて頗る廣大なる邸宅に多くの家族同居し、從來の小住宅は次第に消滅するの傾あり、伊太利に於ても亦同様なりと知る可し、而して此住宅大小の相違は彼我二様の社會に於て相異なる所の特質の一なること明なり。

二、自營的社會に於ては居を移すこと容易なり。

依・頼・主・義・の・社・會・に・於・て・は、人々有形の建物に依・頼・す・る・が・故・に、家郷に蟄居し、父祖の居室を去り難きに至るは當然の結果なり、然るに自營的社會の人々は苟も立身起業の好機會に接すれば、其居を移すに少しも躊躇せず、地球上の端より端に轉ずるも敢て意とせざるは、畢竟古を顧るよりも行末を慮り、先祖傳來の一家に依・頼・す・る・よ・り・も・自・己・の・腕・前・に・依・頼・し、眞實家の主宰となりて、家の爲めに左右せらるゝことなきが故なり。

然らば、其社會に於て一家の鞏固に缺くる所ありやと云ふに、決して然らず、其鞏固なること猶ほ依・頼・主・義・の・社・會・に・於・け・る・が・如・し、只其鞏固なる趣きを異にするのみ、讀者此邊の意を諒せんと欲せば、前條に述べたる住家内外の特質に於て相違する

所を回想す可し、我に在て、一家の鞏固とは外面に關しての事なれども、彼に在ては内部の事なり、我等は先祖傳來の家に住んで、恰も假住居の如く心得る其反對に、彼等は一時の居宅に住んで、數世紀間も定住する如く心得、二三日旅宿に逗留する間にも快樂を求め、英人が歐洲大陸宿屋の改良を促したる事は人の能く知る所なり、僅に數時間の鐵道旅行を試みる際に於ても亦然らざるはなし、實に英人種の主眼とする所は快樂の一點張なり、誰か謂ふ、家庭の快樂は家の棟梁の如く肝要ならずと、誰か謂ふ人の快樂を求むるは日常生活に何等の關係なく、又社會生活に何等の勢力を及ぼすものに非ずと。

一家の鞏固と云ふ意義に二様ありて、一は外形的に一は内實的なること前に説きたるが如し、而して後者の前者よりも一層大切なるは、我輩の將さに進んで説明せんと欲する所なり。

其二

一家は實に内實上鞏固ならざる可らず、蓋し、家具什器等總て完備せる愉快なる家庭は、社會が自營主義に向て發達し來れる第一の特徴なればなり、其何故に然るや

は我輩の講究せんと欲する所なり、

愉快なる家庭と、家庭を愉快にせんとする希望とは左記三項の結果を生じ、而して是等の結果は、自營主義の實行上に必須なる資性を人々に賦與するに至る可し。

一、愉快なる家庭は個人をして威嚴獨立の念を發達せしむ。

愛爾蘭の勞働者の如き、又我佛國の農民及び職工社會の如きは、不愉快極まる陋屋に生れて、人と成る迄に日々視聽する所、亞米利加土人に異ならず、此くの如き境遇は、獨立の思想を涵養し難きこと勿論なり。

人は多少その見る所の事物と同化し、又その威嚴は着する所の衣服より來ること多し、其軍服たり禮服たり制服たるを問はず、被服の人心を感化すること決して少小に非ず、左れば住宅の人生に及ぼす感化は一層重大にして、且永久なる可し。

余のエジンボロ附近に於て訪ねたる農民と、余に茶を饗したるピニクティックの職人との如き、云ふ迄もなく、知らずくの間、に其住居の清楚にして快樂なるに感化せられて、意思高尚に威嚴と獨立との觀念益々鋭敏となりしに相違なく、外に出で、其爽快なる家庭に歸る毎に社會の一員たる責任と自己の體面とを自覺するは自

然の數なり、人もし自己の體面を自覺せば、益々これを重んじ、之を高めんとするに至る可し、蓋し、梯子に登るには初段を難しとす、而して自己の體面を自覺する者は既に初段に攀ぢ登りたる者なり。

二、愉快なる家庭を求むるは人をして奮勵せしむる基なり。

質素なる生活に慣れ、見淋らしき住居に甘んずれば意氣阻喪し、小成に安ずるに至る可しと雖も、益々家庭を快樂にせんと欲するの念慮あれば、其念慮は人を促して愈々奮勵せしむ可し、蓋し、其奮勵して得たる結果は、直に皆我掌中のものなればなり、思ふに、余が曩に訪ねたるベニグ、ツクの職人の如き、食堂には尙ほ皿棚を備付け、妻女には一臺のピアノを買與へ、客間を飾るには厚き絨緞を以てせんと欲するならん、此希望こそ即ち彼をして益々奮發、全力を盡くして収入の増加を計らしむるの動力なれ、英米に於ては、諸大學の計畫に成れる夏期講習會に講習料を拂て出席する労働者、千を以て數ふる程なりと云ふ、是れ彼等が自ら奮て其地位を高めんと欲するに熱心なる明證にして、休業の間と雖も、自己の改善に勉むるを辭せざるものなり。

論者或は云はん、節儉の念は我佛國労働者の特質にして、此念も亦人をして鼓舞奮勵せしむるに足る可しと、然れども、是れ決して有力なる興奮劑に非ず、假に其勤儉貯蓄は子孫の爲めなりとせんか、即ち己れの死後に其收穫を收めんとする他人の爲めに働くものにして、斯くの如きは非常の克己心を要し、一般の人に望む可らず、左れば其利子に依て自己の快樂を買はんが爲めに貯蓄するとせんか、労働者の身分にて目に見ゆる程の利子を生ず可き貯金を得るは殆んど望む可らざることなり、彼等が百法フランクを貯蓄するには非常の日數を要す、然かも之より生ずる利子は年々三法フランクに過ぎず、此の如き僅少なる所得は到底彼等を鼓舞獎勵するに足らず、由來労働者に勤儉貯蓄を獎勵せんと欲して企てたる公私の設備、一として成功したる者なきは、偶然に非ざるなり。

然るに、英人種は政府其他より何等の獎勵を受けずして、多分の金高を家庭の快樂に放銀することを得、人或は云はん、其金錢は貯蓄したるに非ずして、消費したる者に非ずやと然り、消費したるに相違なし、然れども浪費したるに非ず、其金錢は實に甚だ高き歩合にて放銀したるに等し、僅に三朱許りの歩合に非ずして、實際十割に

も當る可し、何となれば是れ其勤勉力を増加せんが爲めに放銀したるに外ならざればなり。

絨緞を買ひピアノを購ひたる人は、其勞力の功果なる金錢の味を日々直接に其身に感受することゝなるなり、今假に五十圓を儲けて、之を此くの如き家庭の改良に使用する者の快樂と、之を貯金として毎年一圓五十錢を受くるものゝ快樂と、何れか果して精勵辛苦を鼓舞する上に於て有効なるや、説明を要せざる可し、いよく家庭を改善すれば、いよく奮勵して隴を得て蜀を望むの情を満足せしむるに勉むるならん、此奮勵心こそ即ち社會が依頼主義より自營主義に進化する特徴なれば、家庭の快樂は實に社會發達の素因にして、又其如何なる方面に向て發達せんとするやを識別するの標準とも爲るものなり。

所得を擧げて家庭の改善に使用する自營的社會に於て、疾病、死亡等不時の災難に處するには、如何なる方法に依る可きや、是れ或は讀者の訝る所ならん、然れども前章にも述べたる如く、英米人は是等不時の出來事に備んが爲めに、保險契約を爲すの常、英米にて保險事業の非常に隆盛なるは何人も知る所なる可しなるが故に、心

配なく家庭改善に放銀することを得るなり。

三、家庭の改善は個人を精良ならしむるの功あり。

本項は特に讀者の注意を促さんと欲する所なり、蓋し、依頼主義の社會に於ては、社會に階級を生じて、貴賤上下の懸隔次第に甚だしく、労働者にして紳士たらんと欲するも、殆んど不可能の事に屬す、何となれば、此社會に於て繁榮を計るには、貯蓄の外に途なしとするが故に、衣食住調度萬端に節儉を旨とし、幸ひにして巨萬の富を致すも節儉の習慣は惰性となりて、生涯之を蟬脱する能はず、言語舉動嗜好等總て野鄙にして、到底氣品高尚なる紳士たるを得ざればなり、要するに、此社會に於ては最も多く産を造る者は、最も乞食に近き習性の人にして、一朝産を作りたる後とも、乞食の如く生活せざれば却て自ら満足すること能はざるなり。

余は茲に、右に述べたるが如き生活を爲したる行商人の例を掲げんとす、四十年前に馬具附屬品の行商を始めたる者あり、必死に稼ぐこと幾年の後、水力を使用せる鍛冶場を購ひ自から商ふ馬杵轡等を製作する事となり、間もなく四十人の職工を使役する程の盛大を致し、且つ貯蓄したる金を以て、百町歩内外の地所を田舎に求

めたり、然るに此男は數年前に死去し、其妻も間もなく夫の後を追ふて冥土へ行きしが、此夫婦間には一人の兒女もなかりしかば、其遺産は甥姪等へ分配されたり、遺産總高は十五萬圓乃至二十萬圓に上れりと云ふ、斯くの如く財産家と爲りたる後、其言語舉動習慣等の野卑なること、毫も行商人たる當時に異なることなく、一生其人品を高むること能はざりき。

何故以上の如く衣食足て後にも品性を高むること能はざりしや、他なし、幼少の時より我が依頼主義の社會に於ては、其家庭にて威嚴の習性、快樂なる生活の必要、これに適應す可き態度等を會得することなければなり。

佛國內にて色々の特質を表はすものある其の中にも、アヴァイオン地方の者は殊に商賣を好み、又能く節儉を守りて、零碎の金錢を貯蓄し、産を作るもの少なからざれども、小賣商人以上に立身する者殆んど稀れにして、己れの品位を高むるに成功する者は猶更ら稀なり、彼等は財産家となりたる後にも、相變らず不潔なる其地方農民の有様を保存し、舉動品格少しも改善する所なし、序ながら記さんに、アヴァイオン農民の住むは不潔中の不潔なるものにして、余がドルシエール氏と彼地の一農家を

訪ねて、僅かの食事を共にせし際にも、其食物の粗末なる、喉を通過せしむるに如何に勉めたるやは、今尙ほ記憶に存する所なり、如何に研究上の爲めとは云ひながら、其時の余輩の困却は尋常一様には非ざりき。

總じて、アヴァイオン地方の人々は質素儉約にして、家庭の修養を缺ぐが故に、商賣を好むも、商賣上の技術達しからず、社會の進歩に適應す可き資質なし、此現象の著しきはアヴァイオンの古手屋といへる慣用語あるにても知らる可し。

凡そ、佛國の古着商人は二類に分たる、アヴァイオン商人とノルマン商人是れなり、何れも吝嗇に近きほど儉約にして、巴里職工社會の放蕩なると相容れず、共に古着古帽古靴等を賣買す、然るにノルマン商人はアヴァイオン商人よりも敏捷にして、身装も清潔に言語も鄭重なれば、同業社會に信用を博し、アヴァイオン商人は執着にして辛棒強きにも拘はらず、古着商賣の中、有利なる種類はノルマン商人の爲めに占領せられて、僅に襪襪又は古金物類を商ふもの多し、誠に瑣細なる事實なれども、亦以て粗野なる家庭は決して人の成功を促すものに非ず、差したる教育を要せざる事業にすら適當すべき資性を賦與せざることを明なり、家庭の改善に資を投ずるに吝